



卒業論文集

二〇一九年度
栗原ゼミ

written by Suzuki Tsukamoto Mura
Yamamoto Tetsuchi and Prof. Takaharu Kuwabara

はじめに

本書は近畿大学文芸学部日本文学専攻創作・評論コースの業原が担当した演習の卒業論文集です。毎年公開し続けて、今年で八冊目になります。

日本のマンガやアニメや小説といった、具体的なテキストを取りあげて、それぞれ独自の見解を述べた卒業論文が揃っています。日本の文化の最先端を取りあげた論文集になったのではないでしようか。ぜひ一読いただき、講評をしていただければ幸いです。

なお、今年も横長レイアウトなので、スマートフォンで閲覧するのには少し見にくいかもしれませんがご容赦ください。

近畿大学文芸学部日本文学専攻

業原文和

※近畿大学文芸学部日本文学専攻は卒業論文・卒業制作について以下のような字数規定を設けています。

（研究論文・評論の場合）……二万字以上（注・参考文献も含む）。

（創作の場合）……作品と副論文が必要です。

◆小説・戯曲等…二万～四万字

◆詩歌など、その他のジャンルについては担当の教員に相談

◎副論文…小説・詩歌ともに一万二千字以上

はじめに

1

生命の神秘に触れる『海獣の子供』―物語の謎を解き明かす―

田口 仁美

3

現代社会からみる、女性に人気のマンガとは

34

―二〇〇〇年から二〇一〇年代を中心に―

山本奈実

小説から見る「孤独な青年」像の変化

77

一九六〇年前後と現代を比較して

三浦 弘暉

〈異世界転生もの批評〉



データベース化する男性主人公と物語の関連について

塚本 悠太

119

あとがき

149

Venus	Earth	Mars	Jupiter	Saturn	Uranus	Neptune
						
Mean Radius 6,051.8 km	Mean Radius 6,378.1 km	Mean Radius 3,395.0 km	Mean Radius 71,492.0 km	Mean Radius 59,722.0 km	Mean Radius 24,622.0 km	Mean Radius 24,622.0 km
Escape Temperature 103 K	Escape Temperature 112 K	Escape Temperature 50.3 K	Escape Temperature 60 K	Escape Temperature 35 K	Escape Temperature 23 K	Escape Temperature 23 K

田口仁美

—物語の謎を解き明かす—

生命の神秘に触れる『海獣の子供』



目次

序章 五十嵐大介の生命観	5
第一章 前提としての作品紹介	7
(1)登場人物	7
○あらすじ	8
(2)キーワード・解説	15
第二章 物語のモチーフを考える	16
(1)「誕生」というテーマ	16
(2)フォークロアから読む	19
①世界創世神話	19
②アポリジニの世界観	21
(3)物語での「言葉」の立場	24
第三章 物語を読み解く	25
(1)誕生祭	25
(2)琉花の交わした「約束」	27
(3)映画での主題歌	28
参考文献	30

『海獣の子供』に初めて触れたのは映画館だった。敬愛する米津玄師が主題歌を務めるということで観に行った作品だが、そこには想像を超える映像体験が待っていた。まるで生命の神秘に触れたような感覚を覚える本作品は、一体誰が何を感じ作り出したものが気になったことが、今回本作のついて論じようと思ったきっかけである。

『海獣の子供』は漫画原作である。小学館の漫画雑誌月刊『155』にて、二〇〇六年二月号から二〇〇一年一月号まで連載された。作者である五十嵐大介にとっては初となる長編作品であり、第三十八回日本漫画家協会賞優秀賞、第十三回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞に選ばれている。

ここではまず作者について述べたいと思う。

原作者五十嵐大介は「自然」を主題とした幻想的な作風が大きな特徴であり、ダイナミックかつ緻密な線画で構成されている。『民話や怪談話の類いのような話も多く、柳田国男や宮沢賢治のような雰囲気を持たせたかったと五十嵐は語った。

二〇〇二年十二月から二〇〇五年七月にかけて講談社『月刊アフタヌーン』に連載された『リトル・フォレスト』は作者自身が岩手県衣川村で生活した際の実体験をもとに、大自然に囲まれた小さな集落で暮らす一人の女性・いち子の自給自足の生活を描いている。幻想的な要素は特筆されておらず、比較的地味であることから二〇一四年には実写の映像化がされた。何度も出てくる「いただきます」は「命」を頂いているという言葉を繰り返して強調していた。木の実や山菜を採り、田植えや栽培をする。魚を捕まえること、合鴨を屠殺してその「命」や米や穀物が出来るまでの工程である「時間」をいただく。こうした自然の営みや、生きていくための行為を五十嵐は鮮やかに隠さずに当たり前に描く。

そして民話等の思想や世界観の強い作品として『魔女』が挙げられる。二〇〇三年から二〇〇五年にかけて『155』に発表された連作幻想奇譚である。遊牧民族の少女・シラルが織り上げた「伝言」を伝えるため首都に赴く、というあらすじなのだが、簡単に説明出来るものでないものがこころに響く。壮絶なストーリーの中に、五十嵐の世界観や宗教観、言語観が垣間見える。言葉信仰的な言葉の力と、身体性を伴わない言葉の空虚さの両方が五十嵐の作品に描かれる。ここにも「言葉」を超えたものが存在しており、それがその先の世界の可能性に繋がっているようである。

その他にも遺伝子を設計されて生まれた半人半獣たちの戦いを題材に扱った『ディザインズ』や、自然を豊かに深く、身近に描いた短編集『はなしっぱなし』等、「命」や「民話」といったキーワードは必要不可欠である。「命」を題材としたものには「死」のイメージが付きまとうものだが、五十嵐の作品は「死」ではなく、次の何かに生まれ変わるといふ輪廻転生的な思想が見受けられる。生き物の殺生も自然の営みの一部と考えているのであれば、五十嵐の思う生死の境目はあやふや且つ、自然の摂理だと片付けられる広大な世界の中の小さな出来事だと考えるのだから。

五十嵐がそういった生命観を持って物事を描いているということを知った上で、改めて『海獣の子供』という作品を紐解いていこうと試みる。

それにあたって、映画と原作の相違について少し明記しておかなければならない。一冊おおよそ三百三十ページ程あるものを、五巻分全て百十分の映像にまとめようとする、大幅に情報を削らなければならない。後にあらすじを表にしたものを載せているが、そちらは原作に寄せたものになっている。

原作では登場人物の過去や、物語に実在性を持たせる為の小話が多々描かれている。映画では主に映像がメインとなっているため、原作にある物語の深みにあたるものはおおよそ省略されている。制作はSTUDIO.Cが携わっており、『となりのトトロ』『魔女の宅急便』のラインプロデューサーを務めた田中栄子が独立して設立した企業である。独特なタッチの原作を映像化するには困難を極めると謳われていたが、ハイクオリティで名高いSTUDIO.CはCGと作画を織り交ぜ見事に仕上げていた。原作の省略したものを感じ取れるような映像は、この作品の主題でもある「言葉」を超えた世界観とマッチしていた。

その「言葉」を超えたもの、生命の神秘さを今回自分がどれだけ咀嚼出来たかを、映画で省かれてしまった深みの要素である登場人物の過去、民話や神話から読んでいこうと思う。

第一章 前提としての作品紹介

(1)登場人物

- ①安海琉花(あづみるか)・・・うまく気持ちを言葉に出来ず、学校でトラブルを抱える中学生。両親は別居中で母と暮らす。夏休みに海と空という二人の少年に出会い、生命の神秘に触れる体験をする。水中でも地上と同じようにビントを合わせて物を見ることが出来る。「海に関われる」体質を持つ。空が消える直前、彼から隕石を託され体内に宿す。
- ②海(うみ)・・・十年前。フィリピンの沖合で保護され、現在空と共に水族館に身を寄せる。過去にジュゴンに育てられていた為、乾燥に弱い。琉花に自分と似たものを感じ、心を開く。「本番」の鍵を握る者。
- ③空(そら)・・・海の兄として同じくジュゴンの元で育ち、自らの出生の秘密を探る。海を守るべくジムとアングラードに自らの身体を調べるように依頼する。小笠原沖で自ら入手した隕石を琉花に託した後、琉花の前で光となつて姿を消す。
- ④ジム・キューザック・・・海洋生物学者。海と空の保護者のな存在。四十年前空とよく似た少年を死なせてしまった事から、空や海を調べることで「海の子供」や世界の元とされる「原人」の謎を追っている。
- ⑤アングラード・・・若き天才海洋学者。天才を上手く理解出来なかつた両親は彼を恐れた。そして幼少期にジムに保護される。彼の相棒になるが、ジムとはまた違ったアプローチで「海」や「空」に関わっていく。
- ⑥アデア・・・海のなんでも屋。ジュゴンと共に「捕獲」された海と空をジムに引き合わせた。
- ⑦安海正明(あづみまさあき)・・・琉花の父親。水族館の職員。
- ⑧安海加奈子(あづみかなこ)・・・琉花の母親。元水族館の職員で、海女の家系で育つ。
- ⑨ジャン・ルイ・・・ジムの仲間である中年の男性。世界中を廻りながら「海」や「空」に近い生命体「海の子供」や、海にまつわる様々な事象についての証言を収集・調査している。

以下は「巻」にとあらずじをまとめたものである。

それにあたって、省略部分が一部あることだけを述べておく。

第一巻			巻数
海の子供	海に纏わる証言	海に纏わる証言	ストーリー 物語は安海琉花が年老い、過去の話を孫に話す所から始まる。
「マイアミの少年」の死がジャン・ルイとジムとの会話で明らかになる。	<p>「海」は人魂が来るから海岸で一緒に見ようと誘う。あたりが暗くなると空に彗星のようなのが横切った。それは「海」が「人魂」と呼ぶ隕石だった。</p> <p>この後琉花は水族館でジムと正明が聞いていた「ソング」を聴く。</p> <p>ある日、琉花が海岸を歩いていると頭から布を被っている少年に出会う。彼は「海」の兄「空」だった。</p> <p>三人が水族館で過ごしていると琉花の母親・安海加奈子がやってくる。母親と接することが億劫だった琉花は「海」と「空」と水族館の船を使って海へ出た。しかし途中船は止まってしまい、海の上で漂っていた。泳いだり、話したりしている内に琉花は魚が光になって消える。「海の幽霊」の話をし、二人もそのことについて知っているようだった。</p>	<p>第一の証言 元水中カメラマン、ソデスの証言 フィリピン・クフベ島で収集。初夏の満月の夜、珊瑚の産卵の撮影のため、ソデスは地元の海に潜る。真っ暗な海の中に降り注ぐような珊瑚の卵。まるで星空を漂っているような体験。その海中で人間の裸の赤ちゃん二人と出くわす。もちろん酸素タンクも何も持っていない。丸腰の赤ちゃん。赤ちゃんはそのまま潜って消えていった。『海には魔物が住んでいる』といい、残し、ソデスはそれ以来潜水をやめた。</p> <p>ハンドボール部に所属する女子中学生・琉花は、チームメイトを怪我させてしまったのをきっかけに、夏休みの間ハンドボール部の出入り禁止を命じられる。自分の夏休みが終わったと感じた彼女は、衝動的に東京の海に向かう。琉花が到着した頃には東京はすでに夜だった。そこで彼女が出会ったのは、東京の海を自由に泳ぎ回る少年「海」だった。翌日琉花は、父・安海正明の働いている水族館に学校でのトラブルについて話をしに行く。そこには水精で縦横無尽に泳いでいる「海」がおり、再会する。すると彼の保護者であるジム・キューザックと、彼女の父親が現れる。彼ら曰く、海は十年前フィリピンの沖合で、もう一人別の少年「空」と共に、ジュゴンに育てられているのを発見されたそう。</p> <p>翌日、彼女が再び部活に入れてもらおうと校舎に一人でいると「海」がやってくる。</p> <p>第二の証言 大学院生、サラ・ヘンダーソン、アレックス・ヘンダーソンの証言 オーストラリア・ケイクコートにて収集。</p> <p>サラは毎年無人島でキャンプをしていた。各地でシュノーケルをしていて、ジュゴンも何度か見かけたことがあった。ただ一度、誰も信じてくれなかった光景を目の当たりにした。ジュゴンが人間の赤ちゃんを脇に抱え、授乳をしながら泳いでいるところだった。</p>	

第二巻		第一巻		
アングラードの問い	ジムの過去	海に纏わる証言	椅子の民話	
<p>そんな「空」を連れ去りに来たアングラードは何気なく病院にいた患者に次の話に隠された意味を問う。</p> <p>彼はインドネシアの影絵劇の話をする。宇宙支配神がその妃と共に、牛の背に乗って大海の上空を飛翔していた。体がくっついていたせいか宇宙支配神が妃に欲情し、精液が一滴海中に落下してしまう。それが巨大な羅刹となり、天に昇っていたという話である。</p>	<p>それから琉花と「海」は「空」を探し続けていた。そんなある日「空」が、石のかけらを握って現れた。それはかつて琉花が「海」と一緒に見た隕石だったのだ。</p>	<p>四十年前、ジムはとある南方の島の部族とともに住み、クジラ撃ちに参加していた。そんな時、彼は一人の少年に出会う。彼と交流するなどいう長の忠告を無視し、ジムはその少年と親しくなる。しかしふとしたきっかけで、少年は命を落とす。彼の遺体は砂に浸みて消えてしまい、それ以降島は不作に見舞われた。島の者はジムのせいだとし、彼は責任を負って島を出た。しかし彼自身はその少年の正体を探ろうと思っただけだった。そして後に「海」と「空」に出会うのである。</p>	<p>第三の証言 延縄漁師 ロザリオ・グッドの証言 アメリカ・サウス・フィッシュャー マンズワーフにて収録</p> <p>ある時ロザリオは仕事場の港で十歳くらいの言葉話さない少年を見かけるようになる。何となく気にかかり、声をかけて簡単な仕事を手伝ってもらい、報酬として魚を渡した。少年は港に集まるオットセイと戯れていた。姿形は人間そのものなのに、なぜかその光景は不思議で、少年は人間ではないように見えた。ある日ばったり少年を見かけなくなる。数日後、魚と一緒に網にかかり、死体で港にあがった。死体には下半身がなかった。警察はサメにやられた、と言っていたが、その死体には傷ひとつなくつるんとして、腹部の下には滑らかな魚の尾びれのようなものがついていた。死体は強制的にマイアミの水族館に引き渡された。</p> <p>そうしてある日、「空」が病室からいなくなってしまう。</p>	<p>「海」と「空」は再び海に飛び込み、琉花もそれに続いた。すると「空」の体が光り出し、魚が群がるようになった。二人はそのまま沖まで泳いでいき、琉花は漁船の通報により保護された。その後琉花は熟を出し、「海」と「空」は病院にいた。海岸では様々な深海魚が大量に打ち上げられていた。</p>

第三卷			第二卷
アングラードの問い	デデとジムの過去	海に纏わる証言	
<p>そして三人はオキゴンドウの群れを見つめる。琉花は飲み込んだ隕石に導かれるように海を泳いでいった。その内に隕石の落下ポイントに近づいていく。艇に追いついた琉花には「ソング」が聞こえていた。それは何かの誕生を喜ぶ歌だった。</p>	<p>琉花は耳の後ろが気になるようだった。夜アングラードに見てもらおうと、吹き出物のようなものが浮かんでいた。二人は話し込み、アングラードは琉花に問う。「海」や「空」はどこから来たのか。何者なのか、そしてこれから自分たちや彼らはどこに行くのだろうか。</p>	<p>十年前ジムは海なんでも屋・デデから「空」と「海」を紹介された。二人は育ての親であるジュゴンとともに漁師の網に引つかかってしまったのだ。そしてジムは保護した少年アングラードをデデに紹介する。ジムたちとデデは「海の子供たち」やクジラの知能、そして海というものについて話し合った。</p>	<p>突然現れた「空」を、ジムの相方・天才学者のアングラードが連れ出す。アングラードは、彼が隕石を拾いにいったのだと見抜いた。「空」はザトウクジラに乗って隕石の落下付近に行き、他の彼らに近い存在「海の子供たち」と隕石を奪い合い、皆殺しにした。</p> <p>琉花は「海」に手を引かれ「空」とアングラードの所までたどり着く。四人はそのまま海岸で過ごすことになる。その夜、琉花は「空」から隕石を託される。そして「空」は海へと消えていったのだ。</p> <p>目の前で「空」が消えるのを見てしまった琉花はショックでふさぎ込み、「海」はおかしなことを呟くようになった。琉花は体内にある隕石が遠くの誰かと会話しているのを感じていた。そこで「海」とともに、アングラードのヨットで旅に出ることになる。彼女は時折夢で海の世界を覗いてきた。</p> <p>第四の証言 子供たちの母親 ニフ・フニフ・サチコの証言 ミクロネシア・コラバ島にて収集</p> <p>ある日ニフは大型船から落ちて島の砂浜に流れついた外国人の男を見つける。気を失っている男の看病をする。男は言う。「海に落ちた時、海の間をくぐった。白い輪がいくつも連なっていた。気がつくとお前に看病されていた。」ニフは「それは『ウバザメ』。ウバザメの口は門になっていて、地下の国や天井の国に繋がっている。」と教えてやった。いつしか二人はたくさんの子供をもうける。男は漁の途中で負傷し、今度は運悪くヨゴレの群れに喰われて死んだ。</p>

第三卷

亜大陸の創世神話	海に纏わる証言	アングラードの過去	アングラードの問い
<p>「世界地図」と呼ばれるそれについてジムは創世神話を話す。まず、原初の水があった。それが胎児を孕み「原人」となった。それは千頭、千眼、千足を有しており、世界は彼に満たされていた。彼に体の部位から万物は生み出される。別の神話では、宇宙は初め、水で満たされ、真水の神と塩水の神が交わり神々が生まれた。後に起こった神々の戦争で敗れた女神の死体が二つに裂け、天と地に分かれた。</p>	<p>第五の証言 盲目の彫刻家 ナバタナの証言 バブアニューギニア・キア島にて収集。ナバタナの祖父は言う。「海の神は時折、人間の行いを監視するためにその姿を現す事がある。そのとき神と目を合わせてはいけない。命をかすめとられるか、目を失うことになる。」</p> <p>この島を訪れる観光客ダイバーに人気の『ブラックマンタ』その出現ポイントには危険だ、とじいちゃんに忠告してくるが、それが仕事だから行かないわけにはいかない。</p> <p>ある日いつも通りに観光客にブラックマンタを紹介しに海に潜った。</p> <p>その日はやけに海の透明度が異常に高く、現れたブラックマンタいつもより大きい。その腹の模様はまるでしかめっ面のよう。大きな目が二つ開き、ダイバーたちを睨みつけた。その時潜っていた五人の内の一人は行方不明、二人溺死、後の二人は失明した。運が良かったのか。ナバタナは失明した内の一人だった。</p> <p>それ以来、頭の中に湧き出すものを吐き出し続けてないと脳が破裂しそうになり、彼は彫刻家となった。湧き出すものを全て作品にぶつける。その作品はなぜかたくさんの方が欲しいがるのだ。</p>	<p>八年前アングラードはジムに「海」と「空」を引き合わせてもらう。当時の彼らは互いのことしか興味が無く、感情表現が乏しかった。</p>	<p>鯨と琉花と「海」を追うアングラード。波の波長を聴いているとそれが「ソング」だと知る。歌に感わされ、少年と少女が波間に消えたことでアングラードはセイレーン伝説を思い出す。もしセイレーンが「海の子供」だとしたら、セイレーンは何のために人を水中に引き込むかと思考していた。</p> <p>そう考えている間にたどり着いたのは隕石の落下ポイントだった。</p>

第四卷			第三卷
ジムとアングラードの過去	海に纏わる証言	海に纏わる証言	第三卷
<p>ジムはこの「原人」、世界の元あるいは世界そのものといわれているものを探していた。その証拠としてジムとアングラードは過去の南極探査でそれを見たのだ。</p> <p>一方で琉花は腹に巨大な人物画の描かれている鯨に飲み込まれていた。</p> <p>第六の証言 文化人類学者 エマニュエル・マストロヤンニの証言 フランス・ナルローにて収集</p> <p>彼女が十歳の時、彼女の父はシャルル・ド・ゴール空港のトイレにて死体で発見された。衣類は身に着けておらず、持っていたはずの荷物も残っていないかった。ある時酔った彼は、とある島で偶然見る事になったある祭りの話をしてくれる。島の成人以上の男だけの秘密結社が取り仕切っている秘密の祭り。厳しい約束事が太鼓の時代から守られてきた。彼は特別に記録を一切取らない約束で見せてもらうことができた。</p> <p>『島の人々が祖先と共に、年に一度海からやって来る彼らの神と出会う儀式』</p> <p>幻想的で魂の根源を揺さぶられる体験に思わず彼は村人の目を盗み写真を撮ろうとしたを録音した。そこまで話して彼の話が止まった。家の部屋の窓の外暗がりには何かを見たのだ。それ以来父の様子がおかしくなった。彼は何かの儀式のようにあるいは家畜を殺すやり方で首をかき切られて死んでいた。そのときとフィルムとテープを持っていたのだ。葬儀のあと、彼女の母は写真とテープを燃やしていた。その後家族に被害はなかったという。</p> <p>水族館では琉花の行方を追っていた。ジムのヨットにはアングラードからの招待状が残されていた。それは「本番」が差し迫っていること、琉花もその近くにいるという旨の内容だった。加奈子はデデに頼み込んで、琉花を探しに行く。アングラードは天文観測所で宇宙や星に思いをはせていた。</p> <p>第七の証言 元・海女、元・水族館職員 安海加奈子氏の証言 日本・江ノ倉にて収集</p> <p>海女として優秀で将来を期待された加奈子。自分の海女としての定めを否定するかのように、ある日突発的に旅でその地を訪れていた正明と駆け落ちをする。加奈子は小さい頃海に潜った際、何ものかと、ある約束をしたと言う。それ以降、海に潜ると自分の名前を呼ぶ声を聞こえてくる。誰と何の約束をしたのか、加奈子自身にもはっきり分かっていない。海で裸になり戯れる二人、受精の瞬間、加奈子は「るか」と海のどこからかきた音を聞く。産まれてきた子供は琉花と名付けられた。</p> <p>ジムとアングラードは過去に「海」と「空」、チームを連れて南極探査をしていた。そして受け継がれてきた「星のうた」は鯨の「ソング」であり、誕生の歌だと「空」に教えてもらうことになる。</p> <p>ある日鯨の群れがやってきたとき、「海」が海に飛び込んでしまう。アングラードは後を追って、そこで腹に「原人」なる図像を持つ鯨に出くわす。それはまるでビーナスのようだった。「うたを奏でる巨人」アングラードはそう呼んだ。海中には「海」を含めた様々な生き物が活性化し、捕食していた。彼らは何かの為に備えていた。</p> <p>今起きていることは全て「本番」に向けてのリハーサル、自分たちは誕生の物語の中にいると、アングラードはジムに話した。</p>	<p>海女として優秀で将来を期待された加奈子。自分の海女としての定めを否定するかのように、ある日突発的に旅でその地を訪れていた正明と駆け落ちをする。加奈子は小さい頃海に潜った際、何ものかと、ある約束をしたと言う。それ以降、海に潜ると自分の名前を呼ぶ声を聞こえてくる。誰と何の約束をしたのか、加奈子自身にもはっきり分かっていない。海で裸になり戯れる二人、受精の瞬間、加奈子は「るか」と海のどこからかきた音を聞く。産まれてきた子供は琉花と名付けられた。</p> <p>ジムとアングラードは過去に「海」と「空」、チームを連れて南極探査をしていた。そして受け継がれてきた「星のうた」は鯨の「ソング」であり、誕生の歌だと「空」に教えてもらうことになる。</p> <p>ある日鯨の群れがやってきたとき、「海」が海に飛び込んでしまう。アングラードは後を追って、そこで腹に「原人」なる図像を持つ鯨に出くわす。それはまるでビーナスのようだった。「うたを奏でる巨人」アングラードはそう呼んだ。海中には「海」を含めた様々な生き物が活性化し、捕食していた。彼らは何かの為に備えていた。</p> <p>今起きていることは全て「本番」に向けてのリハーサル、自分たちは誕生の物語の中にいると、アングラードはジムに話した。</p>	<p>水族館では琉花の行方を追っていた。ジムのヨットにはアングラードからの招待状が残されていた。それは「本番」が差し迫っていること、琉花もその近くにいるという旨の内容だった。加奈子はデデに頼み込んで、琉花を探しに行く。アングラードは天文観測所で宇宙や星に思いをはせていた。</p> <p>第七の証言 元・海女、元・水族館職員 安海加奈子氏の証言 日本・江ノ倉にて収集</p> <p>海女として優秀で将来を期待された加奈子。自分の海女としての定めを否定するかのように、ある日突発的に旅でその地を訪れていた正明と駆け落ちをする。加奈子は小さい頃海に潜った際、何ものかと、ある約束をしたと言う。それ以降、海に潜ると自分の名前を呼ぶ声を聞こえてくる。誰と何の約束をしたのか、加奈子自身にもはっきり分かっていない。海で裸になり戯れる二人、受精の瞬間、加奈子は「るか」と海のどこからかきた音を聞く。産まれてきた子供は琉花と名付けられた。</p> <p>ジムとアングラードは過去に「海」と「空」、チームを連れて南極探査をしていた。そして受け継がれてきた「星のうた」は鯨の「ソング」であり、誕生の歌だと「空」に教えてもらうことになる。</p> <p>ある日鯨の群れがやってきたとき、「海」が海に飛び込んでしまう。アングラードは後を追って、そこで腹に「原人」なる図像を持つ鯨に出くわす。それはまるでビーナスのようだった。「うたを奏でる巨人」アングラードはそう呼んだ。海中には「海」を含めた様々な生き物が活性化し、捕食していた。彼らは何かの為に備えていた。</p> <p>今起きていることは全て「本番」に向けてのリハーサル、自分たちは誕生の物語の中にいると、アングラードはジムに話した。</p>	<p>ジムはこの「原人」、世界の元あるいは世界そのものといわれているものを探していた。その証拠としてジムとアングラードは過去の南極探査でそれを見たのだ。</p> <p>一方で琉花は腹に巨大な人物画の描かれている鯨に飲み込まれていた。</p> <p>第六の証言 文化人類学者 エマニュエル・マストロヤンニの証言 フランス・ナルローにて収集</p> <p>彼女が十歳の時、彼女の父はシャルル・ド・ゴール空港のトイレにて死体で発見された。衣類は身に着けておらず、持っていたはずの荷物も残っていないかった。ある時酔った彼は、とある島で偶然見る事になったある祭りの話をしてくれる。島の成人以上の男だけの秘密結社が取り仕切っている秘密の祭り。厳しい約束事が太鼓の時代から守られてきた。彼は特別に記録を一切取らない約束で見せてもらうことができた。</p> <p>『島の人々が祖先と共に、年に一度海からやって来る彼らの神と出会う儀式』</p> <p>幻想的で魂の根源を揺さぶられる体験に思わず彼は村人の目を盗み写真を撮ろうとしたを録音した。そこまで話して彼の話が止まった。家の部屋の窓の外暗がりには何かを見たのだ。それ以来父の様子がおかしくなった。彼は何かの儀式のようにあるいは家畜を殺すやり方で首をかき切られて死んでいた。そのときとフィルムとテープを持っていたのだ。葬儀のあと、彼女の母は写真とテープを燃やしていた。その後家族に被害はなかったという。</p>

第五卷

海に纏わる証言	誕生祭	海に纏わる証言
<p>第九の証言 大学生兼漁師 ララ・ヒアイルグの証言 キリバス・オルレア島にて収集。</p> <p>ララが十歳の頃、素潜りでウミガメを狙っていた時の事、竿の先に直径三メートル程の透明なカタマリが触れた。</p> <p>クラゲのようにも見えるが、触手や口などはなく、何よりどんなクラゲより透明で、光の具合でかろうじて見えるくらい。水のカタマリとしか言いようのないモノ。鳥の子たちは大抵それを知っていて、自分が親たそれの大きさを自慢し合っていた。鳥の古老はそれを「海の目玉」と言う。隣の島では「海の卵」とも言うそう。</p> <p>ララは海のことをもっと知りたくて、勉強して奨学金を得、本島の大学に入る事ができた。でもその事は教授も、誰も知らなかった。</p>	<p>誕生祭</p> <p>琉花はこれから起きることを目の当たりにする。</p> <p>「海」は琉花の口を手を入れ隕石を取り出し、飲み込んだ。そして「海」に連れられて歩き続けると、海に出る。そこには沢山の生物たちが何かを捕食していた。それは「海の幽霊」なる光だった。海に飛び込んでその様子を見ると、それはまるで宇宙のようだった。</p> <p>そうして「海」も光になって消えてしまったのだ。</p>	<p>第八の証言 獣師・ストーリーテラー トーリヤの証言 シベリア・チュカ半島にて収集。</p> <p>世界ができたばかりの頃。地上の生き物全ては乾いた土の塊だった。ただ、空を覆う巨大な鳥だけは有り余る水で潤い、しなやかに空を舞っていた。その秘密を守るため、鳥は沈黙を守っていた。</p> <p>ある時、地上の者が鳥の美しさをほめ称え秘密のことをたずねると、気をよくした鳥はうっかり口を開いた。</p> <p>「私は無限に水を産み出す石をくわえているのだ。」その瞬間石は鳥の口からこぼれ落ち、地上の者はそれを隠した。瞬く間に地上にはじめて海ができた。</p> <p>その水と乾いた土が交合し、今のような生き物が生まれた。鳥は昼間、水の反射が眩しくて目を閉じている。だが夜になると鳥は千の目、万の目を見開いて石の行方を探している。石はいまも海底で水を吐き出し続けている。その場所を語ることはできない。</p> <p>鯨の腹の中で琉花は隕石が吹き出す水を口からあふれさせていた。そして隕石と会話をす。隕石には沢山の「記憶」を有していた。琉花の役割はこれで終わりだと、目を瞑るよう言われるが、琉花の好奇心からこれから起こることを、目を開けて目撃するよう言われる。</p> <p>一方アングラードは何者かに家に火を放たれてしまい、全身火傷を負う。ジムは彼の様子を見て病室から去って行く。</p>

海に纏わる証言	
<p>第十の証言 神隠しにあった少女の妹 イリナ・メサの証言 エクアドル・プエルト・バルバにて収集。</p> <p>彼女の姉は生まれつき声が出なかった。姉は十一歳の時のある日、行方不明になった。どこを探しても見つからず、姉は死んだとされた。</p> <p>二年後、姉は帰ってきた。声も出るようになっていた。姉の話によると一人で浜にいと、沖合から幽霊船が現れた。気付くと姉は幽霊船に乗り、そのまま海中をさまよっていたのだと言う。</p> <p>彼女は帰ったその日から学校に行き始めた。以前は人と関わるのが苦手だったようだが、今は普通に接することが出来るようになっていた。</p> <p>そうしてまた一年後にまたいなくなってしまった。彼女はだんだん訳のわからない事を話すようになり、いなくなる直前には、全く聞いたことのない言葉のようなものをわめき散らしていた。メサは姉の帰りをもう六十年も待っている。</p> <p>その後のアングラード、ジム、「るか」の様子に琉花の孫は聞く。どうなったかは知らないがそれと似た二人の話を琉花は聞かせる。</p> <p>「るか」は彼ら、全ての時間、あの「夏」と約束をした。誰かに説明することもない、体の奥で繋がっている約束を見続けている。一番大切な約束は言葉では交わさない。</p> <p>そうして年老いた琉花は長い話を締めくくった。</p>	<p>第十の証言 神隠しにあった少女の妹 イリナ・メサの証言 エクアドル・プエルト・バルバにて収集。</p> <p>彼女の姉は生まれつき声が出なかった。姉は十一歳の時のある日、行方不明になった。どこを探しても見つからず、姉は死んだとされた。</p> <p>二年後、姉は帰ってきた。声も出るようになっていた。姉の話によると一人で浜にいと、沖合から幽霊船が現れた。気付くと姉は幽霊船に乗り、そのまま海中をさまよっていたのだと言う。</p> <p>彼女は帰ったその日から学校に行き始めた。以前は人と関わるのが苦手だったようだが、今は普通に接することが出来るようになっていた。</p> <p>そうしてまた一年後にまたいなくなってしまった。彼女はだんだん訳のわからない事を話すようになり、いなくなる直前には、全く聞いたことのない言葉のようなものをわめき散らしていた。メサは姉の帰りをもう六十年も待っている。</p> <p>その後のアングラード、ジム、「るか」の様子に琉花の孫は聞く。どうなったかは知らないがそれと似た二人の話を琉花は聞かせる。</p> <p>「るか」は彼ら、全ての時間、あの「夏」と約束をした。誰かに説明することもない、体の奥で繋がっている約束を見続けている。一番大切な約束は言葉では交わさない。</p> <p>そうして年老いた琉花は長い話を締めくくった。</p>

(2) キーワード・解説

①海に纏わる証言…「海」と「空」のような生命体が世界各地に存在したという十の証言を集めたもの。物語に実在性を付ける。

②ソング

…鯨の歌。

“星の 星々の 海は産み親 人は乳房 天は遊び場”

「星のうた」と作中で詠まれているものは鯨のソングを人間の言葉で置き換えたものだ。「空」がアングラードに教えた。

③インドネシアの影絵劇に描かれたもの…宇宙支配神が妃とともに、牛の背に乗って海を飛んでいた。やがて宇宙支配神は妃に欲情し、精液が一滴、海にこぼれた。海からは巨大な羅刹が生まれ、天に昇った。という世界創世神話。物語の大きなモチーフになる。

④アヴェロンの野生児…一七九七年頃に南フランスで発見され、捕獲された少年（野生児）。発見当時は完全に人間らしさを失っており、軍医だったジャン・イタールによって正常な人間に戻すための教育が行われた。五年間にわたる教育の結果、感覚機能の回復などいくつかの改善はみられたものの、完全に回復することはできなかった。「海」と「空」、マイアミの少年、その他「海の子供たち」の境遇に近い。

⑤セイレーン（人魚）伝説…ギリシア神話に登場する半人半鳥の存在。セイレーンは海の岩礁からその歌声で、航行する男を惑わして、遭難や難破に遭わせる。

⑥原人（プルシヤ）…インド神話に登場する存在。原人とも巨人とも呼ばれる。世界で最初に存在したとされ、『リグ・ヴェーダ』においては原人プルシヤの身体から太陽や月、神々や人間など世界の全てが生まれたという。千個の目と千個の頭、千本の足を持つと言われる。

⑦黄金の胎児（ヒラニヤガルバ）…太初に現れ万有の唯一なる主宰者となった。天地を安立し、山や海を生じ、神々の生氣となり、神々および生類を支配し、世界の秩序を維持する。特に「神々の上に位する唯一神」であることが強調されている。

第二章 物語のモチーフを考える

上記にまとめられたように『海獣の子供』には世界各国の神話や民謡が多く登場する。そのほとんどが宇宙や万物の始まりを伝えるものである。以下はデデが誕生祭のシーンにて放った台詞である。

“あらゆる伝承が繰り返し語ってきた事。宇宙をひとつの生命に例えるなら、海の有る星は宇宙の子宮であるということ。”（『海獣の子供』第五卷五三頁、五四頁）

この“あらゆる伝承”というものを筆者は物語の要素として考え、実際の民謡、神話から物語を読み解いていこうと試みる。

(1) 「誕生」というテーマ

誕生について考える際に、私は既に作品の大きなテーマでもある疑問を提示されていた。作中に登場したフランス画家ゴーギャンの油絵作品の引用である。以下はアングラードが船の上で歌っていた台詞である。

“D'ou venons-nous ♪ Que sommes-nous ♪ Ou allons-nous ♪…《我々はどこから

来たか？我々とは何か？我々は何処へ行くのか？》」（『海獣の子供』第三卷三二八頁～三二九頁）

以下はこの絵画についての説明の引用である。

“ゴーギャンは故郷のフランスよりも素朴で単純な生活を求めて、一八九一年にタヒチ島に渡った。タヒチ滞在時代の一八九七年から一八九八年に描き上げたこの作品は、高度に独自の様式化された神話の世界を描いた他の作品と同様に、ゴーギャンの代表作とされており、ゴーギャンの精神世界を最も描き出している作品と言われている。絵画の右から左へと描かれている三つの人物群像が、この作品の題名を表している。画面右側の子供と共に描かれている三人の人物は人生の始まりを、中央の人物たちは成年期をそれぞれ意味し、左側の人物たちは「死を迎えることを甘んじ、諦めている老女。」¹であり、老女の足もとには「奇妙な白い鳥が、言葉がいかに



図1 「我々はどこへ行くのか？」

無力なものであるかということを物語っている。」とゴーギャン自身が書き残している。(片山一道『身体が語る人間の歴史 人類学の冒険』一七七頁)

誕生・成長・死・言語の無力さについて描かれたこの絵画は『海獣の子供』の大きな土台となっているのは明白である。作中では水族館の職員が胎内記憶のある人に集まってもらうシーンがある。水族館にやってきた子供たちは丁度魚が光になって消えるところを目撃する。その際子供たちはあの光をくぐって来たのだと言う。生命の神秘や不思議に触れた職員は引用のタイトル通りのはずである。これらを念頭に以降続く様々な「誕生」に纏わるモチーフや伝承に注目したい。

作中に登場したインドネシアの影絵劇は作品の考察をするにあたって重大なモチーフとなっている。それを実際にある神話の視点から見ていく。

影絵劇は現地の言葉ではワヤン・クリッと呼ばれ、ジャワ島やバリ島にて行われる人形を用いた伝統的な影絵芝居、またそれに使われる操り人形のことであると行われている。人形を操る人をタランと呼ぶ。芝居はヒンドゥー寺院での祭りなどで行われ、インド二大叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』などが主な演目である。

影絵劇に近い内容を探している内に『マハーバーラタ』には作中に似た内容を見つけた。第一巻「序章の巻」にはアプサラス(水の精)のアドリカーは、バラモンの呪いで魚にされる。魚はウパリチャラ王が河に落とした精液を飲んで妊娠する。魚は漁師の網にかかり、岸に打ち上げられると、腹から人間の男女の赤ん坊が誕生した。男児はマツヤ・女兒はサティヤヴァティと呼ばれた。

しかしインドネシアから離れてみると、ヘーシオドスのギリシア神話『神統記』の方が近いようである。

以下はアングラードが南海探査にて海中で「原人」と出会った頃の台詞である。

“海中でヤツを見たとき、原初の海から生まれた女神を思い浮かべた「ビーナスの誕生」だ。古代の人々はこいつと出会って、様々な神話を語り継いだんじゃないだろうか。”(『海獣の子供』第四巻三〇七頁、三〇八頁より)

この台詞から「ビーナス」に注目し、そこに関連づいた神話に目を向けた。

『神統記』には以下の内容がある。

“ヘーシオドスが語るところではウーラノス(天空)は、かつては自分の母であり今では自分の妻であるガイア(大地)と自分とのあいだにできた子供たちに、光を見せようとしなかった。(省略)夜になって天空が大地に覆いかぶさったときクロノス(時間)は、母である大地からもらった鎌で父ウーラノスの男根を「刈り取り」、後ろに投

げ捨てた。それは荒波の立つ海に落ち、長いあいだ波間を運ばれて行った。”（『世界女神大全　ギリシアの女神から神祕主義まで』六頁より）

これがアプロディーテーすなわち、ビーナス誕生の物語である。アプロディーテーとはギリシア神話での女神である。そして、ビーナスとはローマ人がギリシア神話に基づきラテン語で独自に書き換え、ギリシア神話に出てくる神々にローマの神々の中から性質の似通っている神の名前を当てたもの一つである。それが「ウエヌス（Venus）」であり、英語読みするとビーナスになる。金星の呼び名の由来もここにある。

また、アプロディーテーと　　いう名前は誕生の仕方由来しており、aphrosはギリシア語では「泡」を意味している。前四世紀までには天空の精液を集め育んだ海の子宮は一つの貝殻であると見なされていた。生命が海から生まれたことをより強調している。



図2 アフロディーテ（ビーナス）の誕生
これらの話から影絵劇に当てはめると、海に落ちた精液は刈り取られた男根にあたり、後に天に昇った羅利はアプロディーテーにあたる。さらに、精液と呼ばれるものを物語に当てはめると、それは作中での人魂もとい隕石であることは明白である。そうするとすれば、この影絵劇に描かれているものはやはり「誕生の物語」であり、物語の大きなモチーフなのである。

19

生命の起源に関する仮説の一つに「パンスペルミア説」があり、一九〇三年にスウェーデンのスヴァンテ・アレニウスが提唱したものである。生命は宇宙に広く多く存在し、地球の生命の起源は地球ではなく他の天体で発生した微生物の芽胞が地球に到達したものとする説である。「胚種広布説」とも邦訳され、ギリシア語で「種をまく」という意味があり、これもまた前記した内容に沿っている物語の要素である。

②フォークロアから読む

(1)に続いてモチーフに関するジムの台詞がある。以下はジムが加奈子に「世界地図」を見せている際の台詞である。

“多くの創世神話には共通するモチーフがある。世界のはじまりにはまず全てを内包する「原初の水」があり：そこから「宇宙の卵」や「原人」が生まれて、それが世界の元となる。”（『海獣の子供』第三卷三〇五頁、三〇六頁）

この会話の中に登場したいくつかの創世神話を抽出し、まとめてみた。

①世界創世神話

多くの創世神話は、大きなものから小さなものへの順序、混沌から秩序への変化といった、広い範囲で同じテーマを持っていることが多い。モチーフの一つ目は作中に登場したインド神話の「原人（プルシャ）」である。

作中の話の通り世界の最初に存在したとされる。古代インドの聖典である宗教文書の一つである『リグ・ヴェーダ』において「原人」は千個の目と千個の頭、千本の足を持つと言われ、身体から太陽や月、神々や人間など世界の全てが生まれたという。

二つ目は作中にジムが「原人」の次に紹介した神話である。これはパピロニアにおける創世神話『エスマ・エリシュ』としても知られる『創世記』において語られているものである。

この詩では神マルドゥクは、海の女神ティアマトによって計画された攻撃から神々を守るために作り出された。そうしてマルドゥクはティアマトに戦いを挑み、彼女を破壊したのである。マルドゥクは天地を作る為に彼女の死体を裂き、暦、惑星、星、月、太陽等が生まれた。そして更にティアマトの夫キングーを破壊し、神々のために働ける存在としての人間を作り出す為に彼の血を使つたとされる。

この二つは「世界巨人型」「死体化生型」という²⁾世界創世神話の類型にあたり、神や巨人などの死体から、天体の運行などの自然現象や、食糧などの生活資源が生じたというモデルである。中国の盤古、アイスランドのスノリのエツダと、世界の広い範囲に見られる。

三つ目はジムの「宇宙の卵」というワードに着目して見つけたものである。

ギリシア北部の土着民であるペラスゴイ人の創世神話はエウリュノメーと呼ばれる「万物の女神」の描写から始まり、その名前は月のように「広く彷徨う」ことを意味している。彼女は裸で「混沌」から出現するが、彼女は自分の足を休ませる足場を見つけないことが出来なかつた為、空から海を分け、波間で一人世界を創造するために踊っていた。女神は南に向かって踊り続けていったが、そのとき彼女の後ろに巻き起こった風は見慣れぬ珍しいもので、女神はこの北風をとらえ、両手でこすったのである。それは大きな蛇オビオンとなり、彼女の踊りによって性欲を刺激され、彼女と交わり、「生命」を孕ませた。そして彼女は鳩になり、水の上に「宇宙卵」を産み落とした。それにオビオンが巻き付き卵は孵り、それらは太陽、月、惑星、星、川や山々、生物を含む大地になった。

これは「宇宙卵型」にあたり、卵から世界が生じたというモデルである。主に東南アジアに多いタイプだが、フィンランドのカレワラや、オルペウス教の創世神話など、ヨーロッパにも「宇宙卵」の概念は見られる。

そしてこれらの神話に関連を持つ生命の起源の説として、地球と生物が相互に関係し合い環境を作り上げていることを、ある種の「巨大な生命体」と見なす仮説がある。これをガイア理論という。大気学者兼化学者であるジェームズ・ラブロックにより一九六〇年代に仮説が提唱された。

それに関するアングラードの台詞がある。

“宇宙が誕生して、星が生まれ、成長し死んでいく、その過程で作られた物質がこの世のすべてのものできている。たつてひとつのもの部分にすぎないのかもしれない、太陽も海も人間も…僕たちは「内臓」…海の有る星」は原人の子宮：か。”
(『海獣の子供』第四卷一四七頁～一四九頁)

ガイア理論に影響を受けた作品は様々あるが、『海獣の子供』もまたそれに影響を受けた作品である。巨大な生命体の中では空も海も人間も、詰まる所は同じ生命体の中にある一部なのである。

“「宇宙と人間が似ている」と言ったのは…空だ。” (『海獣の子供』第四卷一四三頁)(図説)

この自分たちは地球の細胞の一つである考えの延長には、自分たちの中にも宇宙があるということがある。アングラードはそれを「海」を通じて理解していた。それは過去にアングラードがまた「海」たちと出会ったばかりのころ、「海」を連れ出し「海」の中には何かあるか問うシーンである。

アングラードはそこで見たものによって、自分たちや万物には宇宙が宿っていることを知るのである。



図3 アングラードの見たもの

②アボリジニの世界観
この価値観を実際に存在するものに当てはめるとすると、アボリジニの価値観に相当するものがある。
アボリジニの人々の独自の世界観、宗教観は「ドリームタイム(Dreamtime)」という

言葉に表されている。ドリームタイムとは彼らにとつて、天地創造の時代のことである。大地が生まれ、宇宙が創造され、動植物が独自の形になった遙か昔、全能の神や精霊たちが活躍する時代をドリームタイムと云うのである。そしてその時代を今も生き続けているという考え方である。その中では人間と自然とのつながり、さらには宇宙万物とのつながりという、独特の世界観・死生観が表現され、継承されている。このドリームタイムから派生した考え方として、ワンネスというものがある。「ワンネス(Oneness)」とは、「地球とそこに存在するものはすべてひとつなぎ」という考え方である。万物は同じ源から生まれ、一つのエネルギーで繋がっている。地球の一部である我々が細胞であり、宇宙と繋がっていくモチーフには必要な価値観である。「自分たちは誕生の物語の中にいる」というアングラードの台詞は、太古から海中で行われている壮大な生命の営みが今も続いて、自分たちはその中にあること。「ドリームタイムを生きている」という言葉に言い換えることが出来ると私は考える。
この他にアボリジニにつながる根拠として、原作に登場する絵柄の教々に注目したい。

アボリジニの人々は本来「言葉」を持たず、知識、部族の歴史や宗教観といったものを絵や歌、踊りで表現していた。これらはアボリジナル・アートと呼ばれ、壁画・音楽・絵画・クラフトと四つに分類することが出来る。「ドリームタイム」はそれらを使って伝承されている。

アボリジナル・アートの特徴としては主に二つある。一つはドット・ペインティングという点描画で、多くのドットとその集



図4 海に纏わる第一の証言

サンゴの産卵

合により様々な世界を表現しているものがある。元々動物や食用植物、水がどこにあるかを示すために幾何学的な模様を地面に描いて地図のように使っていた。二つ目はエクスレイ・ペインティングと呼ばれるレントゲン画法というもので、動物の骨格や内臓が透けて見えるように描かれるものであ

る。これは動物の食べられる部位、食べてはいけない部位などを伝達するために用いられていた。

作中で消えていく魚は白斑模様ということが明記されていた。そしてその魚は「海の幽霊」と呼ばれ、星のように眩く光り、消えていく。そして白斑模様の魚たちの柄は点が集まっているように描かれていた。

そして図6が実際にドット・ペインティングによるアボリジナル・アートである。



作中ではこの点描写は
星空のようだと形容されていて、消えていく魚や最終巻での
「海」の体は星で一杯の宇宙と化していた。「外にある宇宙は
自分たちの体の中にもある。」という趣旨のアングラードの台
詞は、地球と人間は全てひとつなぎ出来るというアボリジニ
カンの思想と合致するものである。アボリジニナル・アートにも
その思想が反映されているため、描かれている動物の中には点
見の形をした星で出来ている。以下は『ワンロード』現代ア
ートのアボリジニ・アートの世界』でアーティストである石井竜也は
6 アボリジニの人々との会話と感じたことの引用である。



図5 消えた魚たち
つて描か
しばしば

「宇宙はどこから 始まっていると思う？」

月並みな答えを探すほどの皮膚を指さしながら、彼は言った。

「宇宙はおまえの皮膚から始まっているんだ。大地から、皮膚から、宇宙は始まっている」(省略)

アボリジニにとつて絵を描くとは、「芸術」ではなく、ましてや売買を目的としたものでもない。それは大地の神に捧げるものであり、空や風の神に捧げるものである。彼らは自然が創ったものはすべて神がつくったものであると考える、まさにアニミズムの世界を生きている。絵を描くことは、神への貢物であると同時に、自然と一体になることであり、一体になることで神に近づくことが出来ると思えるのだ。体にペインティングを施す体彩画もまた、そうした考えから生まれたものだ。(『ワンロード』現代アボリジニ・アートの世界』 二〇五頁)

ジムの刺青とこの体へのベインティングを同一視することも出来る。ジムは昔の過ちから世界の不思議に触れ、世界創世神話に注意を払い「原人」を探していく。その探す行為は神に近づいていくともれ、その為に各地に赴き、伝統ある刺青を入れては「原人」探しに精を出しているのだと感じた。最終巻では全身にびっしりと刺青を入れていた描写があったが、まだ入れる余地があるとすれば、彼の旅はまだ続いているのかもしれない。

また彼らには「時間」という概念が存在せず、過去・現在・未来という考え方がない。すべてがサークルになって、同時に世界に存在しているという考え方である。原作にも「空」の「死」の価値観についてジムに話すシーンがある。

“生まれる 食べる 食べられる。体の一部になる。土になったり、森になったり。変わりながらぐるぐるまわる流れの中の一瞬にすぎないのに。(省略)人間だけが「死」までの区切られた時空に閉じ込められている。古くは違ったのに。”(『海獣の子供』第四巻二九八頁、二九九頁)

区切られた「時間」ではなく、「時空」という表現からは「時間」の概念は「言葉」を使つてコミュニケーションを図る特有の概念ということがわかる。本来「言葉」も「時間」という概念も持ち合わせていなかったアポリジニのコミュニケーションツールはアポリジナル・アートである絵画や音楽等といったものであった。アングラードは作中で「言葉」についてこう言及していた。

“言語は性能の悪い受像機みたいなもので、世界の姿を粗すぎたり ゆがめたり ボヤカして見えにくくしてしまう。『言語で考える』つてことは決められた型に無理に押し込めて、はみ出した部分はすててしまうという事なんだ。”(『海獣の子供』第四巻三一頁)

以降は人類もかつてはそうだったという旨が続いている。「空」が「古くは違っていた。」と言っていたこともこれと同様の趣旨である。

そこで改めて映画と原作の違いに触れてみる。原作の絵は繊細かつ緻密であり、漫画というよりは風景画と呼ばれることもあるだけに、絵だけでも物語を感じることが出来る画力があつた。そして映画はその作画やテーマを忠実に再現していた。しかし、筆者自身映像の方がより心に残るものがあつた。それは原作を読んでから尚感じたことである。その違いは「言葉」の数である。映画はとてもシンプルな作りで、映画では台詞・言葉数があまりに多くは感じられないようになっていた。それは原作のテーマに忠実に寄り添った結果である。文字のない映像が伝えるものは原作よりわかりやすいように感

じた。そういった意味では原作は「言葉」の数が多く、登場人物たちが言うように、「言語」は話の本質を歪めてしまっていたり、隠してしまうように思えた。
ここまで『海獣の子供』の軸になる世界観を取り上げてきたが、以降は「言葉」や「言語」に纏わるモチーフを挙げていく。

(3) 物語での「言葉」の立場

『海獣の子供』には「言葉」を使ってコミュニケーションを図る人間たちと、「言葉」を使わずに意思疎通をする者たちに分かれている。「言葉」を持つ人間たちは琉花をはじめに様々な苦悩を抱えていた。

琉花が部活に行けなくなった理由は怪我をさせたクラスメイトに謝罪をしなかったからである。顧問の先生に問い詰められていても、上手く話せず、言葉を濁している内に部活停止を言い渡される。そしてまた部活に関わるための「言葉」を探していた。

家では母・加奈子とのやりとりで嫌気がさし、父親である正明は家に帰ってこずにいる。琉花を挟んで会話する二人は常に言い争っているような口ぶりであった。ジムはアングラードとは別のアブローチで「海」や「空」の謎に迫るが、アングラードとの実力の差を知っていて関々とする。アングラードは思い付きのままそれを「言葉」にしていくため、周りの人は彼の思考には追い付かなかった。そしてお喋りの過ぎた彼はジムに焼かれることになる。

物語において「言葉」を持つ世界に呼応するものの一つとして鯨の「ソング」が挙げられる。サトウクジラは複雑な情報の波を詩のように響かせあうことで、見た風景や感情をそのままの形で伝え合って共有しているかもしれないと聞いた琉花は、「言葉」にならない彼らの歌に圧倒されていた。「言葉」を持っていない、または持っていないかっ

た者たちは持っている人間に比べ自由且つ雄弁であったのである。②で挙げたアポリジニの価値観はそれに近いものだ。

加奈子の見た世界地図、伝承だけに留まらず、うたう鯨の巨人、記憶にある姿に変身する隕石、「海」と「空」の二人や「海の子供」たちといった者たちは、人間の姿と

「言葉」を借りて、幾度も人間たちに語りかけていた。鯨のソングも「言葉」に翻訳されてようやく人間たちは壮大な歌であると知ることが出来た。

作中において「言葉」がプラスの要素で描かれるシーンはほとんどない。口にしなければ何も伝わらないということが部活内で起きてしまったということは、「言葉」を使わなければならない状態であり、琉花のようにコミュニケーションが苦手な子は「言葉」の世界で苦しむことになる。また「言葉」によって人間は日常を維持することが出来るようになるが、それによって世界を文飾していくと今度は「死」の概念が生まれ、有限の生を生きるようになってしまった。

「海」や「空」は「死」というものは、別の形に生まれ変わることと認識していたが、ジムはそうではなかった。「死」までの区切られた時間に生きているのが人間だと「空」は言う。それをジムが彼らに押し付けたことよって、彼らにも「死」という概念が生まれてしまったのである。

この映画のキャッチコピーは「一番大切な約束は言葉では交わさない」となっていて、原作の締めくくりにある台詞である。ゴージャンの引用のあった絵画に描かれている白い鳥は言葉の無力さを象徴している。この作品の大きなテーマの一つとして、「言葉」の無力さや弊害が謳われているのは確かである。

第三章 物語を読み解く

ここまで物語の要素を取り上げ、作品の世界観やテーマを考えてきた。それによって、物語の多くは様々な伝承と、アポリジニの価値観が大きく関わっていることが分かった。そして「海」や「空」が自分たち自身を探っていたように、それが物語の大きなテーマとなって、我々もまたどこからやってきたのかという問いに物語の終始問いただされていた。

最終章では、それらを踏まえて作品の「言葉」に出来ない部分を紐解いていく。誕生祭とは何で、琉花たちの交わした約束はどんなものだったのか、「大切なことは言葉にしない」という原作の趣旨は一度無視し、筆者の考察したものを無粋ではあるが「言葉」にしていく。最後に少し映画に触れ、締めくくる。

(1) 誕生祭

『海獣の子供』とは様々な神話や逸話で彩られたパンスベルミア説を語る壮大な物語であると筆者は理解した。そしてその説に重ねたものがガイア理論である。それが大き

な地盤にあることにより、生命の誕生やどこからやってきたかという話が展開されていくのである。

そしてここで解き明かしたいのは最終巻の「誕生祭」である。^三五十嵐はこのモチーフとして、自身が好きな草野心平の詩『誕生祭』を入れている。これは誕生を祝福した詩である。それを踏まえて、百五十頁程台詞のない絵だけが続く「誕生祭」とは一体何であったのか。

祭りの前触れは「人魂」と呼ばれた隕石の落下から始まった。そうして琉花は「海」「空」に導かれるように「誕生祭」へと巻き込まれていった。

この宇宙からやってきた隕石はいわば精子であり、海ある惑星はそれをきっかけとして生命を生み出し、そしてその生命を放出する。この「誕生祭」は宇宙規模の「出産」であると考えられる。そしてその「出産」は、二章で述べた神話や伝説に伝えられる「特別な人間」の媒介によって成立してきた。「海は産み親 人は乳房 天は遊び場」という歌は、そのことを指しており、「誕生祭」は「海」と「空」の媒介によって成立するのであった。

「出産」と結びつけるものとして、「空」が殺した他の「海の子供たち」があげられる。彼らの変死体の調査報告にて「白体」と似ているという描写がなされていた。黄体・白体に例えられる死体が浜に打ち上げられる描写は、子宮の中で起こることになぞられている。受精しなかった子宮からはがれ落ちて消えていく生命の一部が「海の子供たち」だったのである。「海」や「空」のような存在はこれまでにもいて、何度も生き永らえることに失敗する。それは殺されたり、他の生き物に食べられたりと様々であった。「空」と「海」は自分たちが本番になると確信し、失敗しないために方法を模索していた。そして「空」は受精出来ず、時間がきて光となる。そして今回は「海」が精液と暗喩されている隕石を飲み込んで、宇宙の始まりとなったのである。

また、「誕生祭」に近くに行けた者は結局女性たちである。以下は加奈子とデデの会話の台詞である。

“海は「彼岸」なんだよ。そして、女の体は彼岸と繋がっている。あなたは知っているはずだ。女の体は彼岸からこっち岸へ生命を引っ張り出す通路なんだから。本当は海の仕事は女が専門家のさ。”（『海獣の子供』第五巻八五頁）

実際の出産も男子は長く禁制であった（医師を除く）あれこれと深く研究したジムやアングラードだが、結局一番近くで「誕生祭」を目撃できたのは女性である琉花や加奈子たちであった。発光して消えた生き物は新たな命となってこちらに出てくること、胎内記憶を持つ子供たちが一例である。そしてこの台詞から命は「彼岸」と「此岸」を行き来していることが改めて分かる。「空」の形をした隕石は琉花にそう語っていた。

“波打ち際は生と死を分かっ際だ。死者と生者が入れ代わる境界なんだ。(省略) (こ)を境にして、生と死は入れ代わる。海に棲むものにとつての死は、君たちにとつての生。君たちにとつての死は、海に棲むものにとつての生。”『海獣の子供』第四卷一六七頁、一六九頁)

日本のお盆に起る水難は、死者が生者の足を引つ張り彼岸に引きずり込むんでいるという言い伝えがある。こういった逸話が生れるように、海や水辺は神聖且つ神秘的なものなのである。

琉花の弟が産まれた時、琉花がへその緒を切るように加奈子に頼まれた。その際琉花は「命を断つ感触」がしたと感ずるシーンがある。それは海にいた者が死ぬという感触である。このひと夏の体験が琉花の感覚を変えたのである。宇宙規模の「出産」に立ち会った琉花は成長をしたのである。

「海」と「空」をつなぐのが琉花の役割だった。それは琉花が海に関わることの出来る才能を持っていたからである。加奈子は優秀な海女であり、その娘の琉花は水中でも物事をぼやけず見ることが出来た。それを作中では「海に特別深く関わる事のできる」素質とジムは言う。役割の本来はそれだけなのだが、琉花は「誕生祭」を目撃したい思いつから最後まで関わることとなる。祭りの一番近くで彼女はただ傍観していた。そうして彼女は彼女だけの物語を作ることが出来た。

もし琉花がいなければ、加奈子がこの役割を担うはずだったと筆者は考える。加奈子の「琉花は自分の身代わりになったのではないか」と心配する台詞が作中にもあった。彼女もまた「約束」を交わした人物であり、海に名前を呼ばれ続けていた。海から聞こえていた声は、正明と出会い、海で交わることで聞こえなくなった。そして最後に聞こえた声が「るか」であった。加奈子もまた人間関係が上手く築けずいたが、「約束」を交わしてからは旦那や子供を得て、駆け落ちして海を捨てたのである。以下はこの「約束」とは何であったか解釈を述べていく。

(2) 琉花が交わした「約束」

物語は荘厳な生命の神秘を描いたと同時に「言葉」の無力さについても描かれていた。この作品の難しさは原作の「言葉」の羅列である。「言葉」とは現代では口や文字を通して人間の目や耳に土足で飛び込んでくる。それを一切排除して物事を見ると、見えてくる世界はまた違って行く。その先にこの「約束」があるのである。

それでは彼女たちの交わした大切な「約束」とはなんだったのか。以下は筆者による考察である。

物語は年老いた琉花が自分の「ひと夏の思い出を語る」という構成になっている。映画ではこの「ひと夏の思い出」だけを取り出して完結させていた。この物語は「行

きて帰りし物語」の形をとって話が進んでいる。「行きて帰りし物語」とは「主人公が日常から非日常の世界に旅立ち、試練を乗り越えて成長と遂げて、また日常に帰ってくる」という構造である。

琉花は人間関係が上手くいかず、家や学校で馴染めない子。そして彼女は「海」と「空」や彼らを取り巻く人間たち、海と深い関りを持つていく。「誕生祭」を体験した彼女は、その後弟が産まれる。映画ではそれに加え、怪我をさせたクラスメイトと仲直りする様子が描かれていた。このひと夏を超えたことよって、琉花は沢山のことと仲直られ、もしくは取り戻していた。琉花は陸という「此岸」から海側「彼岸」へと足を踏み入れ、そして再び陸へとまた戻ってきたのである。そこには大切な「約束」が関わっている。

この「約束」とは、沢山の人に見つけて貰った、このひと夏の「思い出」を忘れないことだと筆者は解釈した。琉花の母・加奈子もかつて海の中で名前を呼ばれ続けていた。海に「呼ばれて」見つけてもらったことが「約束」に繋がったのである。

物語には多くの視線や「目」が描かれていた。

『海獣の子供』第五巻二二〇頁

海獣たちの「目」、そして人間たちの「目」が何かを見つめるように描かれていた。そして最終巻では沢山の「目」が琉花を見つめていた。そして琉花自身も何かを「視る」ことに関心を持ち、ジムに質問をしていた。

“見るってことは信号を受け取って事だから。例えばリモコンでテレビの操作するのも信号だからね。見た事でこっちのチャンネルが変わる事もあるかもしれない。今までと違うものが見えたり、感じ方が変わったたり…”（『海獣の子供』第一巻三〇一頁）

琉花は「誕生祭」を通して、「海」の「目」を見て、信号を受け取った。それが彼女の「約束」となったのである。年老いた琉花は「約束」についてこう語る。

“一番大切な約束は、言葉では交わさない。だから誰かに説明する事の出来ないし、特に曖昧にしてしまいたいようになる。でもいつでも体の一番奥で、ちゃんとつながっている。わたしはそれを見続ける。その声聞き続けるの。”（『海獣の子供』第五巻三〇八頁）

これは琉花が彼女の孫に物語を伝えている。「思い出」は人に説明するものではない。そして大切なものはいつまでも心に残り続ける。彼らを覚えている限り、つながっていることが出来る。琉花はその「思い出」を物語にして孫に話していた。忘れないこと、語り継ぐことは、琉花が「約束」と向き合って、「見続ける」ということに繋がっている。その「約束」を交わしたことによって、「思い出」を得られた琉花の心は救わ

れたのではないか、というのが筆者の考察である。隕石を見に行っただけが全ての始まりであり、それを飲み込んだ琉花は「思い出」を体の奥にしまったのである。

(3) 映画での主題歌

ここまであらゆる要素を取り出して『海獣の子供』を考察してきた。それは筆者だけではなく、他の漫画家たちからの批評も多くなされている。彼らの多くは原作を読んだものが多く、映画の公開後は映像の技術的な評価や、原作を知っている者による批評が増えていった。彼らは様々な視点で『海獣の子供』を理解し、『言葉』に変換している。

その中でも筆者の好んだ解釈が、アーティスト米津玄師による音楽からのアプローチであった。

米津が努めた主題歌「海の幽霊」の歌詞は映画での物語に深く寄り添っていた。それは米津の物語に対する一つの解釈である。映画公開をきっかけとして五十嵐と米津の対談が行われた。その際五十嵐は「主題歌は物語の着地点を示してくれる」という旨の内容が語られていた。以下は『五十嵐が「海の幽霊」に対して抱いた感想である。

“まず、米津さんに主題歌をつくっていただけのことになったと聞いたときに、ああ、その手があったか、と思っただけですね。というのも、この原作を映画にすることになったとき、ともすると神話のように見えてしまう場合もあるんじゃないか、と少し心配もして。そうなったら、映画を観ている人たちの「今」からは離れていってしまう気がして、それは避けたい、と思っただけです。実際には渡辺歩監督の演出手腕で、人の思っかいが感じられるものになりましたけど。でも、最後のピースとして米津さんの歌を乗せられるのであれば、こんなにすてきなことはないと思います。米津さんらしく、神話のイメージももたせつつも、ちゃんと「今」の物語としての着地点を示してくれて、大切に「今」の人たちに届けてくれるんじゃないかな、と。それで、実際にあがってきた楽曲が想像以上に素晴らしかったので、ただただ、これだな、と思います。この映画にとって、これしかない、という楽曲だと思います。”

米津自身作品との距離感、物語のイメージに寄り添うことに悩み、苦心していた。そして曲は一卷の海辺の椅子の話を軸に膨らませていった。音作りにはオーケストラのアレンジが加わっており、その壮大な音が神話のイメージに繋がっている。映画では椅子のシーンはカットされていたのだが、エンディングでは海辺を歩く琉花と、赤

いハイビスカスが乗った椅子が海辺に描かれていた。原作ではこの椅子について二つの逸話が用意されている。一つは先祖や幽霊を迎え入れるものとしてあり、彼らは帰ってきた証として果実等を置いていくというもの、二つ目は部屋に椅子を置き、部屋を出て次に変化があれば幽霊がいるというものである。そうすると赤いハイビスカスは「海」と「空」が輪廻転生を経て、違う何かに生まれ変わって、この世に帰ってきていること指していると考えることが出来る。また、沖繩を象徴するハイビスカスは、琉球の花Ⅱ琉花とも取れる。そして「海の幽霊」の最後の歌詞には「風薫る砂浜でまた会いましょう」とあることから、生まれ変わった彼らが琉花と再び出会うことが映画での「約束」であるのかも知れない。しかし、この様な解釈を持つためには原作を読む必要がある。元を知らない人にとっては映画でのエンディングはただ謎めいて見えてしまうだろう。

原作と映画の相違により、物語に対する曲の解釈が変わっている。しかし、原作の要素を取り込んだ歌詞により原作のイメージを崩さず、むしろ映画と原作を繋いだのが音楽であると筆者は感じる。音楽というアプローチを一つの「物語の着地点」にすることが出来たのは、音楽もまた「言葉」に大きくとらわれないツールであるからである。以下のリンクは「海の幽霊」のミュージックビデオである。実際の映画の映像が入っており、歌詞をよりよく感じる事が出来る。



図7 「海の幽霊」五十嵐大介によるジャケット

<https://www.youtube.com/watch?v=1s84r1hpuk>

近年特に映画や小説、漫画を鑑賞する側に、言語化された答えを求める風潮が顕著である。その為映画での構図「行きて帰るし物語」のように単純かつポピュラーな作りでさえも、このような「言葉にしない」「出来ない」作品は受け入れられにくいように思える。しかし「大切なことは言葉にしない」という精神性に裏打ちされたこの作品は、徹底的に言語化することを避け、観念的で写実的な世界観で我々の前に現れた。本来は無理にこの作品に対して答えを出そうとするのではなく、鑑賞し終わった後に自分の中に残った感触を大切にすべきである。

□参考文献・引用

*文字の引用は都度記している。

○テキスト
・『海獣の子供』第一巻～第五巻（五十嵐大介著 IKKI COMIX 小学館 二〇〇七年八月四日～二〇一二年八月四日）

○序章

¹ 文藝別冊『総特集』五十嵐大介 世界の姿を感じるままに（五十嵐大介著 KAWADE 夢ムック 二〇一四 八月～四日）
² 01.05 自然と人のつながりを描く 五十嵐大介
http://www.kusakamura.com/tsushin/interview/05_igarashi_daisuke.html

○第一章
³ 『世界神話辞典』（アーサー・コッテル著 柏書房 一九九三年九月一日）

○第二章

⁴ 『身体が語る人間の歴史 人類学の冒険』（片山一道著 筑摩書房 二〇一六年十月五日）

⁵ 『マハーバーラタ 原典訳 第一巻』（上村勝彦訳 筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉 二〇一二年一〇月）

⁶ 『図説世界女神大全1 ギリシアの女神から神秘主義まで』（アン・ペアリング・ユールズ・キヤシユフオード著 藤原達也訳 原書房 二〇〇七年一〇月）

⁷ 地球生命の火星由来説にまつる新根拠
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/mng/article/news/14/8333/>

⁸ 『図説世界女神大全2 ギリシアの女神から神秘主義まで』（アン・ペアリング・ユールズ・キヤシユフオード著 藤原達也訳 原書房 二〇〇七年一〇月）

⁹ 創造神話 類型論
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%B5%E9%80%A0%E7%A5%8E%E8%A9%B1%E7%B4%B7%E6%9C%80%E6%9C%83>

¹⁰ 『アポリジニの世界 ドリームタイムと始まりの日の声』（ロバート・ローラー著 長尾力訳 青土社 二〇〇三年一月三日）

¹¹ 『ワールド・現代アポリジニ・アートの世界』（窪田幸子（監修） 現代企画室 二〇一六年七月二五日）

○第三章

¹² 五十嵐大介、「幸福感」に包まれながら描いた『海獣の子供』誕生&創作秘話を明かす
<https://otocoto.jp/interview/kai-junokodomo/3/>

¹³ 行きて帰る物語とは？解説と具体例を掲載！神話の物語法則
<https://ノドクリエーター.net/go-back-home-story/>

¹⁴ 米津玄師×映画『海獣の子供』原作者五十嵐大介氏のスペシャル対談
<https://www.kai-junokodomo.com/crosstalk/>

□ 図の引用

図1 ヨーギャンの引用
<https://ja.wikipedia.org/wiki/我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか>

図2 アプロディーテー(ユーナス)の誕生
<http://greek-myth.info/Aphrodite/BirthYenus.html>

図3 アングラードの見たもの(『海獣の子供』第三卷二八八頁)

図4 海に纏わる第一の証言・サンゴの産卵(『海獣の子供』第一卷三頁)

図5 消えた魚たち(『海獣の子供』第一卷二〇二頁)

図6 透けて見えるカンガルーの絵
<https://www.pinterest.jp/kimikoartlitho/アボリジニ・アート/>

図7 「海の幽霊」五十嵐大介によるジャケット
<https://reisuserrecords.net/special/uminoyuurei/>

現代社会からみる、女性に人気のマンガとは
—二〇〇〇年から二〇一〇年代を中心に—



山本奈実

目次

はじめに	36
第一章 輪廻転生マンガの流行	38
一、「輪廻転生」がテーマの少女マンガ『僕の地球を守って』と『八雲立つ』	38
二、前世探しブーム	39
三、少女マンガのなかの「分身」	40
四、一九八〇年～一九九〇年の社会へ私探しの時代	44
五、第一章のまとめ	45
第二章 二〇〇〇年からの女性	45
一、「男女共同参画社会基本法」	45
二、現代の女性たち	47
三、多様化した女性の意識	50
四、女性のアイデンティティ 多様化した現代の女性に必要なこと	50
五、「女子」という言葉	51
第三章 現代の女性に人気のマンガ	54
一、「二のマンガがすごい！オナ編」のランキングから人気の作風をみる	55
二、働く女性が主人公のマンガ	56
三、オタク女子・腐女子が主人公のマンガ	63
四、第三章のまとめ	65
おわりに 現代女性に人気のマンガのこれから	67
一、WEB発のマンガ	67
二、女性たちのSNSを使った運動	69
三、女性に人気のマンガのこれから	10
テキスト・参考文献リスト	71

はじめに

本論では、二〇〇〇年以降の現代女性向けのマンガを、女性を取り巻く現代社会に注目しながら論じていきたい。

マンガには、多く生み出されたり人気になる作品に時代ならではの特徴がある。そう感じたのは、「輪廻転生」や「双子」などがテーマになっているSF少女マンガに出会い、このようなマンガの流行とその流行の背景を知ったからだ。同じように、二〇〇〇年以降の現代女性向けのマンガと、その時代背景に関係はあるのだろうかと考えたことがテーマを決めた理由である。

本論に入る前にまず、SF少女マンガの中でも特に社会現象になるほど女性たちの間で流行した「輪廻転生」がテーマのマンガとそのほかのSF少女マンガについて述べていきたい。そこから本論の二〇〇〇年～二〇一〇年代の話につなげていく。なお、本論で取り上げるマンガの発表年・連載場所は「Wikipedia」の各マンガ（作家・連載誌）のページに記載されているものを引用している。

“少女マンガ”と聞いて真っ先に思い浮かぶものは、学園を舞台にした男女の恋愛だった。小学生の頃マンガ雑誌『ちゃお』（小学館）で読んだ、にしむらともこ『極上！めちゃモテ委員長シリーズ』（二〇〇六年～二〇一四年）中原杏『きらりん☆レポリーション』（二〇〇四年～二〇〇九年）篠塚ひろむ『ミルモでポン』（二〇〇一年～二〇〇五年）などの主人公たちはみな、好きな男の子に振り向いてもらおうと努力したり、それがうまくいかなかったり、甘酸っぱい恋愛模様とカッコイイ男の子にドキドキしたものだ。それは近年映像化されている少女マンガを見ても感じることである。

●二〇一五年で実写映画化された少女マンガ原作作品

- 二〇一四年『アオハライド』『近キョリ恋愛』
- 二〇一五年『ストロボ・エッジ』『ヒロイン失格』
- 二〇一六年『オオカミ少女と黒王子』『黒崎くんの言いなりになんてならない』
- 二〇一七年『ピーチガール』『兄に愛されすぎて困ってます』
- 二〇一八年『となりの怪物くん』『ママレード・ボーイ』
- 二〇一九年『午前〇時、キスしに来てよ』

参考 『映画の時間』「少女漫画原作実写化」を一覧でチェック！

<https://movie.jorudan.co.jp/cinema/tag/%E5%98%91%E5%A5%B3%E6%B7%94%E6%9C%9F%E4%B0%9C%E5%A5%B3%E6%9C%96/>（最終閲覧日二〇一九年十一月十七日）

中でも代表的な作品として、『アオハライド』のあらすじを簡単に紹介する。

『アオハライド』は咲坂伊緒原作の少女マンガで、『別冊マーガレット』（集英社）で二〇一一年二月号～二〇一五年三月まで連載されていた。単行本累計発行部数六〇〇万部

を突破した人気作品であり、特に十代の女子に支持されている。二〇一四年の七月からアニメも放送された。

あらすじ(原作)

「中学の頃、お互いに淡い思いを抱きつつ、離れ離れになってしまった双葉と洗。高一で再会するも、どこか変わってしまった洗に双葉は戸惑う。だが、そっけない言動に隠された洗のやさしさは昔のままだった。双葉はふたたび洗に惹かれていく…。」¹⁾

※引用(別冊マーガレット公式サイト アオハライド 作品紹介)
<http://betsuma.shueisha.co.jp/lineup/aohari/de.html>

双葉の友達である悠里も洗を好きになってしまったり、双葉のことが気になる男子、冬馬があらわれたり、学園を舞台にして高校生男女の恋愛模様が描かれる。

作者の咲坂は自分の高校生時代を思い返しながら描いていると語っており、前作の『ストロボ・エッジ』のピュアな作風よりもリアル高校生活の描写を入れつつ、王道を外さないような作品にしたかったと語っている。ライブ中に洗と双葉が振り向きざまに事故でキスしてしまうというエピソードがあるのだが、これは咲坂の実体験をもとにしたものだという。

参考(「コミックナタリー」TVアニメ「アオハライド」放送記念 咲坂伊緒インタビュー)
https://natalie.mu/comic/p/aoha_comic

37

このように学生が主人公のラブコメ少女マンガはほかにも沢山実写映画化されており、『アオハライド』と同じく『オオカミ少女と黒王子』(二〇一一年～二〇一六年)「別冊マーガレット」連載(集英社)や『となりの怪物くん』(二〇〇八年～二〇一四年)「デザート」連載(番外編含む)講談社)などはアニメ化もされている世の中の女性たちが好きだと思われる王道な女性向けマンガ、世間一般に期待されるような少女マンガの傾向が「男女の恋愛」「学園もの」であることがここからも分かる。

そんな私の認識を覆したのは、日渡早紀『僕の地球を守って』と樹なつみ『八雲立つ』だ。近畿大学の図書館で絵柄に惹かれてたまたま読んだ作品だが、これらの壮大で重厚なストーリーに驚かされた。

第一章 輪廻転生マンガの流行

一、「輪廻転生」がテーマの少女マンガ『僕の地球を守って』と『八雲立つ』

●日渡早紀『僕の地球を守って』(一九八六年～一九九四年「花とゆめ」連載 白泉社)
続編 『ボクを包む月の光』(二〇〇三年～二〇一五年「別冊花とゆめ」連載 白泉社)

『ボクは地球と歌う』(二〇一五年～二〇一八年「別冊花とゆめ」、二〇一八年～「メロディ」連載中 白泉社)

現代日本に転生した、月のステーションで暮らしていた前世の記憶を持つ男女を中心としたSFマンガ。前世から続く複雑な人間関係や時を超えた恋愛を描く。前世からの関係で超能力(サーチエスパワー)を持つキャラクターも登場し、バトルも描かれる。

続編の『ボクを包む月の光』は前作から十六年後、主人公の亜梨子と輪の子供である蓮の成長ストーリーだ。ここからさらに四年後を描いた『ボクは地球と歌う』が二〇一五年五月号より連載されている。

●樹なつみ『八雲立つ』(一九九二年～二〇〇二年「Lala」連載 白泉社)

続編 『八雲立つ 灼(あらかた)』(二〇一八年～「メロディ」連載中 白泉社)

シャーマンの生まれ変わりである布椎闇己(ふづちくらく)と鍛冶屋の生まれわりである七地健夫(ななちたけお)が、「古代出雲族の怨念を昇華させる」という使命を果たすため、盗まれた六本の神剣を集めていく物語。

続編では前作から十三年後の世界が描かれる。怨念の昇華を成功させた代わりに自らの命を犠牲にした闇己は、七地の甥・布椎晃己(こうき)(十二歳)として前世の記憶を持ったまま生まれ変わっていた。伯父と甥の関係になった二人の新たな物語。

二つの作品に共通する設定は「輪廻転生」だ。どちらの作品も登場人物たちは「前世」からの強い縁で結ばれていて、生まれ変わった現代でもまた巡り会う運命にある。

一九八〇年～一九九〇年代は上記の二作品以外にも、宮脇明子『ヤヌスの鏡』(一九八一年～八六年「セブンティーン」三部に分けて連載 集英社文庫) 水樹和佳『イティハーサ』(一九八六年～九九年「ぶっけ」連載 一九九九年最終巻書下ろし) 『美少女戦士セーラームーン』(一九九二年～九七年「なかよし」連載) など、輪廻転生・前世・分身：が作中に登場するSFチックなマンガが多数生み出された時代だ。この中でも特に「輪廻転生」をテーマとした少女マンガは一九八〇年代後半から一九九〇年代の小学校～高校生の少女たちの間で人気となり、作品の影響から「前世探し」がブームになった。

二、前世探しブーム

『僕の地球を守って』の作中に登場する投稿を真似たものがオカルト雑誌に多数寄せられるようになったり、「前世」のために事件を起こす少女たちが現れた事象についてまとめられた。

●オカルト専門雑誌『ムー』の文通欄「コンタクト・ブラザ」に寄せられた『僕の地球を守って』の仲間の呼びかけを真似た投稿たち

『ムー』とは学研から出版されている雑誌で、スーパー・ミステリー・マガジンと銘打たれている。「奇跡現象・神が示す大いなる力」「超文明富士高天原の復活」「超人ヘルメス」といった特集や日常から古代にわたる超現象の記事で埋め尽くされており、少年少女の好奇心に答えている。

この雑誌の文通欄「コンタクト・ブラザ」に、八三年ごろから少しずつ現れはじめ、八六年に入ると毎号に五〜六通は見られるようになる不思議な投稿がある。

「a夢の中に出てきた”純”という名の男の子を捜しています。(八六年九月号)

d健、一馬、ちゆ、魔魅という名前に覚えのある方、または何か知っている方、いましたらご報告ください。(八七年二月号) 1)

※引用『別冊宝島92つわさの本』「オカルト雑誌を震わせた謎の投稿少女たち」 十二頁 下段

当時、このような投稿が一号に必ず四〜五通ほど載っていた。「コンタクト・ブラザ」には普通、「心靈や超能力に興味のある年上の男の方、私と文通してください。」などといった内容の投稿が寄せられており、三分の二は女性、年齢は中学生から高校生・大学生・社会人にまでおよび、大学生以上が三分の二を超えていた。しかし、この手の内容のはがきは六分の五が女性であり、年齢は中高生、特に高校二年生が多かった。

●行き過ぎた「前世探し」によって少女たちが起こした事件

自分の「前世」にこだわるあまり、自分の命を絶とうとする事件を起こしてしまった少女たちもいた。

・一九八九年三月二八日 朝刊「小6少女飛び降り「霊が呼んでいる」日向市」

京都府日向市上植町堂ノ前、「イトーピア日向マンション」C棟脇のアスファルトで小6の女の子が頭を打って死んでいるのを近くの人が見つけた。同マンションの7階の非常階段の手すり(高さ六十センチ)に、女の子のものとみられる足跡が残っており、自宅の勉強机の引き出しから「三月四日から何度か自殺しようとしていましたが、やっと今

日、命を絶つことができました。迷惑をかけてごめんなさい。」と書かれたメモ帳が見つかった。自殺とみられている。

彼女は最近同級生に「霊が私を呼んでいる。私は特に霊感が強い」「あなたの前世を占ってあげよう」などといった発言をしていた。

・一九八九年八月十七日 夕刊「お姫様の前世のぞきたかった」徳島の自殺」
徳島県徳島市の中学生A子さん(十四)とB子さん(十四)と小学生の(十四)C子ちゃん(十)が自分たちの前世をのぞくために沈痛解熱剤を飲み、うち二人が入院する騒ぎがあった。B子さんによると、三人は前世ではいずれもお姫様で、意識不明になれば前世がのぞけると思い込み、自分たちで「シナリオ」を考えて十六日に行動をおこした。

最近少年少女の間で、前世や転生をテーマにしたオカルト漫画や雑誌が人気を集めており、徳島県警北島署はこの影響を受けたのではないかとみている。しかし、中学校は「ほとんどの子供たちが漫画に熱中しているが、現象として表に出たことはない」と戸惑いを隠せない様子。

(参考 大阪府立中央図書館 朝日新聞記事データベース 掲載『ビジュアルより 一部引用』)

このように、「前世」は一種の社会現象となるほどに少女たちを魅了したのである。「前世の自分」というと、自分だけだと自分ではない存在、しかし記憶を通じて行き来できる「もう一人の自分」と言っても良いような存在である。「輪廻転生」・「前世」がテーマの作品以外にも、少女マンガには「もう一人の自分」・「分身」を思わせる内容の作品が多くあった。どうして少女たちはそのような作品に惹かれ、自己の探求にこだわるのか。マンガ研究家、明治大学国際日本学部教授の藤本由香里氏は、女性特有のアイデンティティ問題を取り上げて、そのことについて論じている。

三、少女マンガのなかの「分身」

宮原浩二郎・荻野晶弘編『マンガの社会学』(二〇〇一年) 第三章「分身―少女マンガの中の「もう一人の私」」で藤本由香里は、どうして女性は「分身」や「自己」にこだわるのか、少女マンガにあふれている「分身」の系譜をたどり直し、その原型と変化、それが今、映し出そうとしているものをとらえようと試みている。ここからはこの論文を参考に、少女マンガのなかの「分身」についてみていきたい。

もともと、少女マンガには「分身」や「もう一人の私」があふれている。「双子マンガ」は少女マンガの定番であり、「運命の相手」は「分身」と呼ばれ、自分自身の成功を夢見る少女たちはどこかにある「本当の私」や「もっとステキなもう一人の私」に出会うこと、誰かがそれを見つけてくれることを願っている。

少女マンガの「分身」は古く、日本初のストーリー少女マンガと言われている手塚治虫『リボンの騎士』（一九五三年〜五六年「少女クラブ」連載・リメイク版一九六三年〜六六年「なかよし」連載）の中核となるテーマにそれはあらわれている。男でない王位は継げないという掟のもと、女の子であるのに男として育てられた「王子サファイア」と、そんな彼女がお城の舞踏会に出るために亜麻色のかつらをかぶってドレスを着た姿「亜麻色の髪の乙女」。この「亜麻色の髪の乙女」は王女としてのサファイアではなく、「王子サファイア」から身分や属性を取っ払った純粋な一人の女の子としての姿なのであり、「分身」だ。少女にとつての「分身」はまず「性」への違和から生まれ、少女マンガの系譜もまた「性の異なるもう一人の自分」という形で表れているのである。

『思春期の少女にとつて「女である自分」は違和感である。だがやがて少女はそのアイデンティティを引き受け（＝「女」になり、多くの場合、妻になり、母になつていく。妻になるといふのは、自分でありながら同時に他者のアイデンティティにとりこまれることであり、（これは「夫になる」ということとけつして同値ではない）母になるといふのは自分の中に他人を孕み、自分の一部を分離して他人を作り出すことである。

ここに、女性の意識の中に多様な「分身」とか「もう一人の自分」が生まれる素地がある。

つまり、女性のアイデンティティというのは、他者の視点を内面化し、つねに他者との関係によつて揺れ動くものであり男性のように一貫したアイデンティティを保ち続けることは難しい。それほど女性の自我の輪郭は曖昧で変化しやすく、だからそ女性には「分身」とか「もう一人の自分」というテーマにこれほど惹きつけられるのである。」²⁾ ※引用『マンガの社会学』第3章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」七三頁十七行目〜七四頁八行目

●第一期双子マンガブーム（一九五五年〜一九六四年）

手塚治虫『双子の騎士』 わたなべまさこ『やまびこ少女』 など

「双子」を最初に少女マンガに持ち込んだのは手塚治虫である。「双子」に代表されるような「アイデンティティの二重性」は手塚治虫作品の中核を担っており、『アトム』『ジャングル大帝』『どろろ』などでもそのテーマは感じることができる。この「アイデンティティの二重性」は少年マンガよりも少女マンガの方に浸透した。

何らかのかたちでばらばらになってしまった双子の片方が裕福な家庭で育ち、片方は貧しい環境で育つ。その二人はやがて巡り会い、紆余曲折を経て大団円を迎える。または、見分けがつかないのいいことに入れ替わって遊んでみたり、相手の危機を救う、というパターンが多かった。どちらの場合にも双子は仲良しであることが多い。

●第二期双子ブーム（一九六五年～一九八五年）

里中満智子『ナナとリリ』 萩尾望都『半神』など

第一次双子マンガブームの時よりも「アイデンティティ」に焦点を当てた双子マンガが多く描かれるようになる。七〇年を過ぎたころからは双子マンガ作品の数も減り共通のモチーフを見つけることも難しくなるが、この時代の双子ものには仲の良さやその融合性だけではなく、競争や嫉妬、劣等感や葛藤という要素が織り交ざったものが増えている。

あるがままの自分¹¹「現実の自己」と理想の自分・他者の期待に応えようとする自分¹²「ありうべき自己」との分裂と葛藤というテーマを深めていく。この時期、女流マンガ家が描くSFマンガは世間でも高い評価を受け、人気を博すようになってきていた。

第一期双子マンガブーム（一九六五年～一九八五年）のなかで、一九七〇年代後半は女流マンガ家が描くSFマンガが高く評価されたのと同時に、SF自体が日本でブームになっていた。図書の家編・石堂碧協力『少女マンガの宇宙 SFファンタジー1970-80年代』に当時のことが詳しく紹介されている。

一九七六年には萩尾望都『11人いる！』が小学館漫画賞受賞し、小学館文庫にまとめられる。また、竹宮恵子『地球（テラ）へ…』が月刊マンガ少年で一九七七年一月号に連載開始した。そして一九七七年、萩尾望都が光瀬龍の小説をコミカライズした『百億の昼と千億の夜』の連載が「週刊少年チャンピオン」で始まる。女流マンガ家が少年誌で長編SFを連載することは当時、前例がないほど画期的なことであった。

一九七七年に『宇宙戦艦ヤマト』の映画が公開され、一九七八年には日本で『スターウォーズ』も公開され、日本ではSFブームが起こっていた。これに伴って同年、『SFマンガ大全集』（奇想天外社）と『少年少女SF競作大全集』（東京三社）が創刊される。

『SFマンガ大全集』は再録誌であり、作家インタビューや評論、作品リストが載っていたり、山田ミネコ・飛鳥幸子・西谷祥子などの女流マンガ家たちのマンガが載っていた。『SFマンガ大全集』の後誌『漫画奇想天外』は書下ろし作品が中心になり、ここでは湯田伸子・佐々木淳子・竹沢タカ子などの新人たちも起用された。

SFブームの中、

一九七八年 竹宮恵子『地球（テラ）へ…』

一九八〇年 萩尾望都『スター・レッド』

一九八一年 水樹和佳『伝説』

がそれぞれ星雲賞を受賞している。

※参考 図書の家編・石堂碧協力『少女マンガの宇宙 SFファンタジー1970-80年代』

このように女流マンガ家が描くSFマンガは高い評価を得ており、多くの人々に読まれていたのである。この先、双子マンガからさらに「生まれ変わり」「クローン」などのSFチックな内容の少女マンガが増えていくが、女流マンガ家が描くSFマンガが高い評価を受けていたことやSFブームがその背景としてあったのではないかと私は考える。

●〈私〉探しの時代（一九八〇年代後半～一九九〇年代にかけて）

日渡早紀『僕の地球を守って』 水樹和佳（現：水樹和佳子）『イティハーサ』など

ここからは再び『マンガの社会学』第三章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」」を参考に話を進めていきたい。

根本的な「自己」の意識を問い直し、「アイデンティティ」の根源的な問い直しを含む作品群が浮上してくる。(3)

※引用『マンガの社会学』第3章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」」九六頁 十一—行目

双子もの以外にも、多重人格・前世・クローンなど、「分身」というテーマが多様性をもって意識的に描かれるようになった。

この時期の代表作として、「前世」がテーマの『僕の地球を守って』は取り上げられている。主人公の坂口亜梨子が前世（木蓮・女性）の記憶を思い出すことを無意識に拒否している姿や、仲間の一人である錦織一成が前世（槐・女性）から続く恋心に悩む姿が描かれており、「前世」の記憶を持つ登場人物たちが、「過去の私か現在の私か」という問いを通して自分探しをしているように感じられる。

女性たちが特に「前世」に惹かれるのは、

「本質的には一つでありながら同時に複数の存在を生きる」

「同質性と差異と、その間を自由に出入りする」(4)

※引用『マンガの社会学』第3章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」」

一一二頁 七八行目

という「もう一人の私」・「分身」的な要素を持つからである。自分でありながら自分ではない存在を記憶によって行き来できる性質と、共通した「前世」の記憶を持つ仲間との絆という設定の魅力が少女たちを惹きつけたのではないかと『マンガの社会学』第3章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」」では言われている。

「前世」は、一見異なって見える自我の一貫性を保証してくれるのと同時に、運命的な絆で結ばれた仲間とのネットワークの存在をも保証してくれる、九〇年代の最強アイテムだったようだ。※参考『マンガの社会学』第3章「分身—少女マンガの中の「もう一人の私」」

このように、アイデンティティの輪郭があいまいな女性にとって、「自己の探求」・「自分探し」は魅力的だったのであり、「もう一人の私」「分身」というテーマは形をかえて少女マンガ作品の中に現れているのである。

次からは、「輪廻転生」がテーマのマンガが流行した一九八〇年～一九九〇年代の社会について、見ていきたい。

四、一九八〇年～一九九〇年の社会 〈私〉探しの時代

一九八〇年代日本はバブル期で景気が良かったことに加えて、一九八六年に「男女雇用機会均等法」が施行されている。七〇年代までは「女性らしさ」が大事にされていたが、一九八〇年代は女性の社会進出と共に選択肢が増えた時代といえる。それまで「女らしさ」の枠組みで生きてきた女性は新しい〈私〉を探すように。この年代にメディアで活躍した女性たちの代表として挙げられるのは松任谷由実・吉本ばなな・億万智などである。「女の本音」や「ポップな世界」を描き成功しており、世の女性たちが「欲望」に肯定的になるのを後押しした。

一九八〇年の終わりごろから、世間は〈私〉というものに関心を持ち始める。香山リカは『じぶん』を愛するということ―私探しと自己愛』でこの時代を回想しており、第三章「分身―少女マンガの中の『もう一人の私』でもそれが紹介されていた。

一九八八年・八九年頃から雑誌で『がんばった私にこほうび』『クリスマスは私へのプレゼントを探す』『もっと私を磨いてあげる』といったような見出しがやたらに増え、「私」という言葉が良く使われるようになった。

その後、「私」や「こころ」について、必ずあるものという前提で解説したり、その探し方を教えたりするような特集やハウツー本が増えていった。一九九〇年代は、なにかしらはっきりとしたアイデンティティを持った〈私〉というものを追い求める、まさに〈私〉探しの時代であった。

『じぶん』を愛するということ―私探しと自己愛』ではその後、「多重人格」「ストーカー」「アダルト・チルドレン」「癒し」ブームなど、九〇年代を代表するキーワードを〈私〉探しの時代と関連付けて解説していく。これらは全て、「どこかにはるはずの私を探したい」という欲求と結びつくものだ。

五、第一章のまとめ

一章では、一九八〇年～一九九〇年代に流行した「輪廻転生」がテーマの少女マンガの流行と、「輪廻転生もの」をはじめとするSF少女マンガの流行を簡単にみてきた。

・もともと女性にとつてのアイデンティティはともあやふやなものであり、「自己の探求」が少女たちにとつて魅力的であったこと。

・「前世」という「もう一人の私」の存在に惹かれたこと。

・女性の選択肢が増えた一九八〇年～一九九〇年代を生きていた女性たちの中で「描きたい探しがブームになっていたこと。

・欲望に忠実に生きることを後押しする風潮の中で、女性マンガ家たちも「描きたい作品を描く」ことに積極的になったこと。

以上のような女性特有のアイデンティティと社会的背景が合わさって、「前世」がテーマの少女マンガは流行したのである。この女性特有のアイデンティティ問題は時代ごとに形を変え、少女マンガの中に現れている。藤本由香里はここからさらに『寄生獣』を取り上げ、人間的なアイデンティティの問題と生物の自己同一性にまで話を広げているが、本論では女性のアイデンティティに注目して進めていきたい。

第二章 二〇〇〇年からの女性

現代の女性に人気なマンガをみていくために、ここからはまず二〇〇〇年以降の女性を取り巻く現代社会と、それに伴って変わってきた女性の意識について述べていこうと思う。

一、「男女共同参画社会基本法」

「男女共同参画社会基本法」は男女平等を推進するため一九九九年の六月二十三日に施行された法律だ。

「男女共同参画社会」とは、

「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意志によつて社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もつて男女が均等に政治、経済的、社会的及び文化利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会（男女共同参画社会基本法第二条）」¹⁾

※引用 「内閣府 男女共同参画局 男女共同参画とは」 「男女共同参画社会」って何だろっ?」

<http://www.gender.go.jp/about/danjo/society/index.html>

のことであり、政府の具体的な政策としては、「女性活躍推進法」「女性の活躍状況の「見える化」「ポジティブ・アクション」「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)」などが挙げられている。

それまで、日本では女性が自分達の立場の向上を求める運動が行われていた。一九七〇年代の「女性解放運動(ウーマンリブ)」や一九八〇年代の「フェミニズム」等を経て、一九八六年五月には「男女雇用機会均等法」が施行されている。この法律は職場における男女の均等取扱い等を規定したものだ。序章でも少し触れているが、それまで「家庭で家族の面倒をみるもの」だとされていた女性たちに「社会に出て働く機会」を与え、女性の社会進出のきっかけになった。現代では男女の就職率に大きな差はない。

二〇一九年三月に大学を卒業した大学生の就職率は全体として九十七・六％であり、男女別にみると男子大学生が九十七・三％、女子大学生が九十七・八％だ。※参考(「文部科学省「平成30年度大学等卒業者の就職状況調査(4月1日現在)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/05/1416816.htm

この法律に加えて「男女共同参画社会基本法」が施行されたことで、二〇〇〇年代からの日本はますます「男女平等」を推し進めていこうとしている。しかし、この「男女共同参画社会」は浸透していないのが現状である。

世界経済フォーラム(World Economic Forum)が二〇一八年十二月、「The Global Gender Gap Report 2018」を公表し、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数(Gender Gap Index:GGI)を発表した。この指数は、経済、教育、健康、政治の四つの分野のデータから作成され、0が完全平等、1が完全平等を意味する。二〇一八年の日本の総合スコアは〇・六二二、順位は一四九か国中一一〇位(前年は一四四か国中一一四位)と、前年からは順位が上がっているものの、その位置はまだ低い。

※参考「内閣府「男女共同参画局」 広報誌「共同参画」二〇一九年一月号」

http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2018/201901/201901_04.html

二 現代の女性たち

では、「男女平等」を押し進める社会の中で生きる現代の女性たちはどのような経験をし、どのような考えを持つようになるのだろうか。『ジェンダーアイデンティティ 揺らぐ女性像』（至文堂）での座談会や内閣府が行った世論調査の結果も参考にしながら、家庭・教育・学習分野、労働・職場の三つにわけてそれぞれみていきたい。

●家庭

名古屋大学教授の金井篤子は男女共同参画の方向性についての授業を行った経験から、女子学生の現状について述べている。金井によると、例えば男兄弟がいる場合に、兄や弟は言われていないのに自分だけ手伝いをしろと言われたことがある女子学生とそうではない学生の割合は大体半々であるという。つまり、半分の女子学生は「女だから自分は手伝えと言われた」「なんで女だからそうしなくちゃいけないんだろう」という経験がないともいえる。親からの圧力・抑えつけは昔ほど大きなものではなくなっている。

男女ともに働くことが普通になった昨今、育児・子育ての問題も深刻である。育児は母親だけの責任ではない、男性ももっと参加していこうという風潮があるが、子育ての責任や負担はどうしても母親の方に偏りがちだ。制度として育児休暇は男性もとれるようになってきているものの、男性の育児休暇取得率は現状で五十一・四％（厚生労働省「平成29年度雇用均等基本調査」
http://www.gender.go.jp/public/kudosankaku/2018/201806/201806_02.html）にとどまっている。

育児、育児休業をはじめとする両立支援制度を利用する男性はまだ少ない状況だとと言える。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識を調査した結果では、「賛成」が三十五・〇％（賛成一七・五％＋「どちらかといえば賛成」二十七・五％）、「反対」が五十九・八％（「どちらかといえば反対」三十六・六％＋「反対」二十三・二％）となっている。

※ 内閣府 男女共同参画社会に関する世論調査 2. 家庭生活等に関する意識について (1) 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識(令和元年)

<https://survey.gov-online.go.jp/101/101-danjou/2-2.html>

●教育の現場

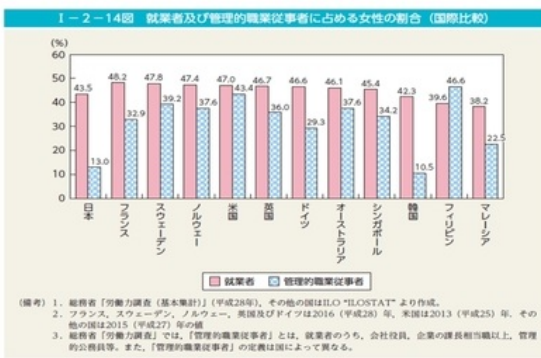
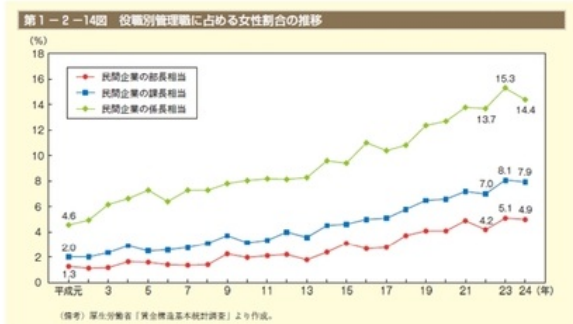
最近では、男子は大学・女子は短大と言う考えも大分薄まってきた。例えば兄弟の場合であっても、兄は大学で妹は短大を強制されるというのはあまり聞かなくなっている。少子高齢化の時代、子供の数は一人から三人ほどという家庭が増えたこともあり、今の親は子供に十分に手をかけて存分に投資するような傾向もある。このような環境のなかで、子供たちはそれほど性別的差別を感じていない。

男女の平等感について、ア家庭生活、イ職場、ウ学校教育、エ政治、オ法律や制度、カ社会通念・習慣・しきたり、キ自治会やPTAなどの地域活動 の七つの分野に分けて全国の十八歳以上の男女を対象として調査したデータがある。これらの分野においてそれぞれ「平等」と答えた者の割合が大きい順に並べると、「学校教育の場」六十一・二%、「自治会やPTAなどの地域活動の場」四十六・五%、「家庭生活」四十五・五%、「法律や制度の上」三十九・七%、「職場」三十・七%、「社会通念・習慣・しきたりなど」二十二・六%、「政治の場」十四・四%となり、「学校教育の場」が一番高く、唯一過半数を超えている。

※参考 「内閣府 男女共同参画社会に関する世論調査 1. 男女共同参画社会に関する意識について(一) 各分野の男女の地位の平等感」(令和元年)
<https://survey.gov-online.go.jp/foi/foi-danjo/2-1.html>

●労働、職場

では、労働の場面ではどうか。大学まではとりあえず同じように進んだとしても、就職活動を経て就職をしていくような場面になるとどうしても男女別のコースが用意されているように感じてしまう。いまだに「一般職」と「総合職」という役割が残っているし、「一般職」の方はどうしても女性のイメージが強いままである。女性の管理職の数も年々増加はしているものの、実際の数字を見てみるとまだまだその数は少ない上に国際的にみても割合がかなり低いことが分かる。



図一、役割別管理職に占める女性割合の推移 図二、管理的職業従事者に占める女性割合（国際比較）

現在管理職に就いている者が大学を卒業して就職した頃をおおよそ十年前の平成二十年とし、そこから遡って五年間の大卒就職率のデータをここにあらわした。

(平成)

二十年	九十六・九%	男女別 (男:九十六・六% 女:九十七・三%)
十九年	九十六・三%	男女別 (男:九十六・六% 女:九十六・〇%)
十八年	九十五・三%	男女別 (男:九十五・五% 女:九十五・〇%)
十七年	九十三・五%	男女別 (男:九十三・三% 女:九十三・八%)
十六年	九十三・一%	男女別 (男:九十三・八% 女:九十三・二%)
十五年	九十二・八%	男女別 (男:九十三・二% 女:九十二・二%)

※参考「厚生労働省 報道・広報 報道発表資料」

「平成31年3月大学等卒業者の就職状況を公表します」
https://www.mhlw.go.jp/stf/koudou/000205940_00002.html

『大学、短期大学及び高等専門学校卒業者の4月1日現在の就職状況調査の推移』(Table 7-16)

就職率の男女別の割合に注目してみるとそれに大きな差があるわけではないことが分かる。就職率に大きな男女差はないにも関わらず管理職の割合では男女で大きな差が生まれているということは、労働の場、特に出世・昇進の場合においてまだまだ女性が不利な状況であるといえる。

三、多様化した女性の意識

このように、「男女平等」を推し進める政府とそれがまだ完全に浸透しきっていないギャップがある社会、「男女平等」の時代を生きる若者と「女性差別」の意識が根深く残っている世代が混在しているような社会が現代なのである。それゆえに、現代の若い女性たちの「女であること」を理由に差別されるような経験の有無も、「女であること」に対する考え方も人それぞればらばらなのであり、一概にこうだと断言できないようになっているのである。つまり、現代の女性の意識は多様化していると言えるのである。

そして、現実として差別が残っている現代社会は、女性にとって必ずしも全てが不利というわけでもない。例えば労働の面に注目してみると、女性は男性に比べて選択の自由度が高いのだ。基本的に働くべき、結婚してから家庭を養っていくべきだとされている男性と違い、女性は就職して長く働いていくことも、結婚してからは働くことを辞めて専業主婦として生きていくことも選択できるのである。そういうところに甘えて、時代に身を任せてほとんどに生きようとする女性も生まれてしまった。女性の出世が厳しいことも、それを助長している。

一九七〇年代、団塊の世代の女性たちは「女であること」にこだわっていたが、現代の女性たちは「女であること」にさほど抵抗感がなくなっているようである。昔は「見られる存在」として抑圧を感じていたが、今は男性に見られることを前提とした「男ウケ」を意識して自らを飾ることもある。

四、女性のアイデンティティ 多様化した現代の女性に必要なこと

『ジェンダーアイデンティティ 揺らぐ女性像』において、大阪府立女性総合センター相談担当コーディネーターの川喜田好子は現代の女性の意識についてこう述べている。

「楽にはなったけれど、なんとなくどこかで諦めとかすり替えをしている感じがする」と思うこともよくあります。「女性も男性と同じように活躍できるのは知っている。でもそんなしんどいことは別にしないでいい。男と同じ仕事とか働き方で頑張らなくても、適当に仕事をちよつと経験し、いい男性と結婚して自分で子育てもすれば人生のいいところを全部を経験できる」と考えている女子大の学生も少なくない。

だから表面的にはいろいろ道はできたようだけれど、基本的には社会の差別構造がそんなに変わっていないから、多様化しているけれども、問題は解決していないのではないかと非常に強く感じています」(2)

※引用 『ジェンダーアイデンティティ 揺らぐ女性像』十四頁下段二行目～十五頁・上段一六行目

現代の女性に必要とされていることは、「女性としてどう生きていくか」「選択肢が増えたからこそ、自分の幸せのために何を選んでいくか」を考えて生きていくことである。

社会なんてどうせすぐに変わらないのだから今のままで良い、なんとなく就職してほとんど働き、結婚して子供を産み育てる経験もできるならばそれで良いという考えのままでは、「男女平等」な社会は永遠に実現しない。

五、「女子」という言葉

話は変わるが、ここからは二〇〇〇年代以降に広く普及した「女子」という言葉について述べていきたい。現代には女子力・女子会・大人女子・腐女子・歴女・カメラ女子・森ガールなど「女子」という言葉があふれているが、この「女子」と、世間一般的に使われる女子という言葉には決定的な違いがある。馬場伸彦／池田太臣『女子の時代！』青弓社 を参考に、このような「女子」についてみていく。

●一般的に使われている 女子 という言葉

普通女子とは、女子高生や女子大学生のように規定された制度のなかで使われるような性別、または「少女」と同じように成人前の「女性」を指す言葉として使われるものだ。

成人未満の未成熟な「女性」を指して使われる「女子」や「少女」という言葉には、他者である男性からの視線、性的な視線が含まれている。『女子の時代！』「はじめに—いまなぜ女子の時代なのか？」馬場伸彦 では、『少女コレクション序章』の著者である濫澤龍彦が少女の客体性について述べている言葉が引用されている。

「少女は一般的に社会的にも無知であり、無垢であり、小鳥や犬のように、主体的に語り出さない純粹客体、玩弄的な存在をシンボライズしている」(3)

※引用 『女子の時代!』九頁一五行目、十頁一行目(『遊離龍彦』少女コレクション序章)一三頁より引用
部分)

少女は、受け身であるがゆえに性的欲望の対象として語られてしまうのだ。

この純粹客性は「少女」に限ったものではなく、女子高生・女子大生を記号として捉えた場合にも頻出する。女子高生・女子大生と言う存在は他者である男子が記号として意味づけた身勝手な幻想な部分もあり、それが商品として流通することもあったようだ。

●女性自らで定義する 「女子」

上記で述べた女子と違い、今日よく見かける「〇〇女子」や「女子会」のように使われている「女子」に年齢は不問だ。性別を全面に押し出した言葉ではあることには変わりないが、性的な隠喩は希薄なのである。ここでの「女子」とはあくまで当事者である「女性」たち自身の趣味趣向、行動に由来しているものだからだ。十代の女性たちで集まろうが六十代の女性たちで集まろうが、本人たちが「女子会だ」と言ってしまうればそれは「女子会」なのであるし、何歳であつても歴史が好きな女性のことは「歴女」と呼ぶし、そう名乗る。

つまりこの「女子」とは、対象として眼差される客体ではなく、当事者である「女性」自身が自称として使ったグループ名であり、またあるいは女性雑誌などで女性読者からの共感を得るために使ったキャッチフレーズなのである。

※参考 『女子の時代!』「はじめに—いまなぜ女子の時代なのか?」馬場伸彦

●「女子」たちの仲間意識 絆 「女子会」

「女子会」という言葉は、「女子」が広く認知された後、二〇〇八年頃から使われ始めた。

『東京ウォーカー』(角川クロスメディア)の二〇〇八年十二月二十四日号では、「男子禁制!秘密の花園『女子会』がブーム」という記事が載っている。この記事によると、「女子会」ブーム流行の発端は、関西で人気を博した読者モデルたちが女性だけの会を開いたことと、アメリカのテレビドラマ、『Sex and the City』の影響が大きいと言われている。

「女の子と男の子のツボって微妙に違うんです。洋服も本当におしゃれしたい時は、女の子の方がかわいさを分かってくれるし。はしやぎたい時は女の子だけが楽しい!」(24歳女性)と、「女子会」とは異性の目を気にせず友情を深める会のようなのだ。……不景気に揺れる世の中を「女子会」で友情を深めた女性達が元氣

にひっばっていかもしれない。」〔東京ウオーカー〕二〇〇八年十二月二十四日号）4）

※引用 『女子の時代！』 第一章「女子」の意味作用 二八頁―二行目―六行目

実際、二〇〇九年に大手居酒屋チェーンが女性グループ限定の食べ放題飲み放題プランに「女子会」の名をつけると、「女子会」は全国的に大流行した。

『女子の時代！』第一章「女子」の意味作用 河原和枝で紹介されている「日経WOMAN」の記事をここでも参考にしたい。

「日経WOMAN」（二〇一〇年十月号、日経BP社）では、「平日夜は『女子会』が楽しい！会社帰り、女性同士で集まって情報交換したり学びあったりする働き女子が急増中！」として、異業種の広報担当女性たちの女子会・「広報女子の会」や、OLや企業家たちが関心のテーマを体験したり学びあう女子会を紹介している。

様々な業界の広報担当の男女が参加する勉強会で知り合い、そこから男性抜きで気兼ねなく話をしようとして始まったのが「広報女子の会」だ。もともと男性が居た集まりから男性を排除した例もあるのだ。女性たち自らで定義して使う「女子」という言葉には、女性たちだけで完結するような世界が生まれている。

明治末期から昭和初期にかけて若い女性たちを指す言葉として「乙女」が多用されていた。『女子の時代！』「第一章「女子」の意味作用」ではこれについて、『オトメの祈り―近代女性イメージの誕生』の著者、川村邦光の意見が取り上げられている。

川村邦光によると、このような「オトメ」の感性は『女学世界』などの女性雑誌の講読を通して培われたと言う。年齢や既婚未婚関係なくできていた感性による女性たちの絆を「オトメ共同体」と呼んだが、これは「想像の共同体」である。近代ブルジョア家庭にあった彼女たちは家庭でも孤立しがちで、現実には連帯が困難であった。しかし、現代の「女子会」には「オトメ共同体」を超えたものがある。

「女子」や「女子会」という言葉の広がりについて『女子の時代！』「第一章「女子」の意味作用」で河原和枝は

「女子」とその現代的用法の広がりには、従来、男性中心社会のなかで分断され切断されてきた女性たちが、ようやく地歩を固め、自らの再定義と新たなホモソーシャル・ネットワークの構成に向けて、歩みを踏み出す兆しなのかもしれない。」（5）

※引用 『女子の時代！』 第一章「女子」の意味作用 三三―三頁八行目―十行目と語っている。

二〇〇〇年代は女性自らで自分たちを定義し、女性たちだけで楽しむ風潮が強く表れていることが分かった。男性からの圧力が比較的和らいだ現代の女性たちは、「女性」である自分を好意的に受け入れ女性同士でそれを楽しむことができているのである。

第三章 現代の女性に人気のマンガ

一章では、現代女性を取り巻く社会の変化とそれに伴って変化してきた現代女性の意識について述べてきた。その内容を踏まえつつ、第二章では現代の女性に人気のマンガを見ていく。

「男女平等」を押し進めながらもそれが完全に浸透しきっていない現代社会の中で、現代の女性たちの考えは多様化してきているのであり、仕事一つに関しても「長く働きたい派」「結婚したらやめる派」など様々な意見が聞かれる。

また、女性たちの「女性であること」に対する考え方も変わってきた。性別を理由に周りからの圧力を感じる機会が昔ほどはなくなったことよって「女性」という性に抵抗を感じるものが少なくなったのだ。

二〇〇〇年代から広く普及した「女子」という言葉は、他者である男性の視線を含まない、女性自らで自分達自身を定義している言葉だ。この言葉が今では当たり前に使われている。現代の女性たちは「女性」であることを楽しむ・仲間意識を持つて分かり合える者同士、「女性たち」のみで楽しむようにもなった。

このような、様々な考えを持つ女性の生態・同じ趣味を共有する女性たちに注目したようなマンガ作品が現代にはあふれており、現代女性に人気を博している。毎年発表されている「このマンガがすごい！」のランキングを軸に、現代の女性に人気の作品をみていく。

その前に、対象とする「女性に人気のマンガ」の定義について述べておこうと思う。

最近では男性向け・女性向けにこだわらずに自分が読みたいと思ったマンガを読む人たちの方が多い。また、『月刊ガンガンJOKER』（スクエア・エニックス）『ハルタ』（KADOKAWA）など、明確に男性向け・女性向けの区別ができないようなマンガ連載雑誌も多くある。女性マンガ家が必要しも女性向け雑誌で連載しなればいけないこともなく、例えば荒川弘『鋼の錬金術師』（月刊少年ガンガン）『銀の匙 Silver Spoon』（週刊少年サンデー）、田辺イエロウ『境界師』『BIRDMAN』（週刊少年サンデー）といったように、男性向けマンガ雑誌で活躍する女性マンガ家もいる。つまり、「少女マンガ」や「レディース・コミック」という枠組みは極めてあやふやなものになってしまっているのである。よってここの「女性に人気のマンガ」とは、『りぼん』『なかよし』『メロディ』（白泉社）などの女性向けマンガ雑誌に連載されているようなマンガだけにこだわらないものとする。

一、「このマンガがすごい！オンナ編」のランキングから人気の作風をみる

「このマンガがすごい！」とは、宝島社が発行しているマンガ紹介のムック本のことであり、各界のマンガ好きがその年の「一番すごい！」と思うマンガを選ぶ年末のイベント的年譜である。一九九六年に前身となる『別冊宝島 このマンガがすごい！』そして『別冊宝島 このマンガがえらい！』が刊行されたのがその始まり。二〇〇五年からは書籍が毎年発売されている。「このマンガがすごい！」編集部が運営しているマンガ情報サイト「このマンガがすごい！WEB」には、二〇〇六年～二〇一九年のランキングがオトコ編・オンナ編それぞれ一位から十位まで発表されている。年代ごとに関心なマンガの傾向をつかむため、「このマンガがすごい！」のランキングを参考にすると、ここでは、上位三位までのランキングを引用した。

二〇〇六年～二〇一九年までのランキング(オンナ編)

二〇〇六年

- 一位 羽海野チカ『ハチミツとクロバネ』(集英社)
- 二位 二ノ宮知子『のだめカンタービレ』(講談社)
- 三位 矢沢あい『NANA』(集英社)

二〇〇七年

- 一位 羽海野チカ『ハチミツとクロバネ』(集英社)
- 二位 椎名軽穂『君に届け』 集英社
- 三位 二ノ宮知子『のだめカンタービレ』(講談社)

二〇〇八年

- 一位 椎名軽穂『君に届け』(集英社)
- 二位 吉田秋生『海街diary』(小学館)
- 三位 菅野文『オトメン(乙男)』(白泉社)

二〇〇九年

- 一位 小玉ユキ『坂道のアポロン』(小学館)
- 二位 くらもちふさこ『駅から五分』(集英社)
- 三位 末次由紀『ちはやふる』(講談社)

二〇一〇年

- 一位 末次由紀『ちはやふる』(講談社)
- 二位 椎名軽穂『君に届け』(集英社)

三位 東村アキコ『ママはテンバリスト』（集英社）

二〇一一年

一位 ヤマシタトモコ『HER』（祥伝社）

二位 ヤマシタトモコ『ドント・クライ・ガール♡』（リブレ出版）

三位 東村アキコ『海月姫』（講談社）

二〇一二年

一位 水沢悦子(画)久住昌之(作)『花のズボラ飯』（秋田書店）

二位 雲田春子『昭和元祿落語心中』（講談社）

三位 えすとえむ『うどんの女』（祥伝社）

二〇一三年

一位 アルコ(画)河原和音(作)『俺物語!!』（集英社）

二位 穂積『式の前日』（小学館）

三位 藤村真理『今日は会社休みます』（集英社）

二〇一四年

一位 穂積『さよならソルシエ』（小学館）

二位 池野恋『ときめきトゥナイト 真壁俊の事情』（集英社）

三位 小玉ユキ『月影ベイベ』（小学館）

二〇一五年

一位 阿部共実『ちーちゃんはちょっと足りない』（秋田書店）

二位 東村アキコ『東京タラレバ娘』（講談社）

三位 池田理代子『ベルサイユのばら』（集英社）

二〇一六年

一位 ふじた『ヲタクに恋は難しい』（一迅社）

二位 東村アキコ『東京タラレバ娘』（講談社）

三位 安藤ゆき『町田くんの世界』（集英社）

二〇一七年

一位 岩本ナオ『金の国 水の国』（小学館）

二位 小西明日翔『春の呪い』（一迅社）

三位 永田カビ『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレボ』（イースト・プレス）

二〇一八年

- 一位 岩本ナオ『マロニエ王国の七人の騎士』（小学館）
- 二位 萩尾望都『ポーの一族〜春の夢〜』（小学館）
- 三位 ユベチカ（著）西森マリー（監）『サトコとナダ』（発行：星海社 発売：講談社）

二〇一九年

- 一位 谷香央理『メタモルフオーゼの縁側』（KADOKAWA）
- 二位 田村由美『ミステリと言う勿れ』（小学館）
- 三位 コナリミサト『皿のお殿』（秋田書店）

※参考 『このマンガがすごい！WEB』【公式発表！】『このマンガがすごい！』ランキングを一大公開!! | <http://konananga.jp/special/8673-2>

ランキングの二〇〇六年〜二〇一〇年ごろまでに注目してみると、『ハチミツとクローバー』『のだめカンタービレ』『君に届け』『ちはやふる』など、同じ作品が年を跨いでランキングしていることが分かる。まずはこれらの内容を簡単に述べる。

『ハチミツとクローバー』

（二〇〇〇年〜二〇〇六年）CUTIE Comic 宝島社 ↓ 「ヤングユ」集英社 ↓ 「コミック・ラス集英社」連載

美大生男女五人を中心とした甘酸っぱい恋愛模様が描かれる。中心は学生たちだが、周りの大人たちも絡んで複雑な人間関係を展開する。

『のだめカンタービレ』

（二〇〇一年〜二〇一〇年）「Kiss」講談社）

音大のピアノ科に在籍しながらも指揮者を目指す千秋真一と、同じくピアノ科に在籍する野田恵の物語。音楽、音大の仲間たちとの交流を通して成長する姿を描く。

『君に届け』

（二〇〇五年〜二〇一七年）別冊マーガレット 連載 集英社）

北海道の高校が舞台の物語。優しい性格だがおとなしく「貞子」というあだ名をつけられてクラスになかなか馴染めずにいた黒沼爽子が、男女学年問わず人気で噂も気にならない風早翔太に出会ったことで変わっていき、成長していく姿が描かれる。

『ちはやふる』

（二〇〇七年〜「Red・LOVE」連載 講談社）

競技かるたに打ち込む高校生たちの青春と恋愛を描く。クイーンを目指している女子高校生綾瀬千早と、同じ競技かるた部に所属している真島太一、別の高校でかるたに打ち込む綿谷新の幼馴染三人を中心とした物語。

これらの作品は学園を舞台に思春期ならではの葛藤や進路に関する悩みも描かれており、少女マンガの王道的な要素を含んだ作品だ。どれも実写化やアニメ化がされていて人気作品であることが分かる。「序章」で実写化されている少女マンガについて述べたが、それと同じ作風だと言える。

序章では「輪廻転生」がテーマのマンガに注目したが、

惣領冬美『ボーイフレンド』(一九八五年～一九八八年「週刊少女コミック」連載 小学館)

紡木たく『ホット・ロード』(一九八六年～一九八七年「別冊マーガレット」連載 集英社)

多田かおる『いたずらなKiss』(一九九〇年～一九九九年「別冊マーガレット」連載 集英社)

吉住渉『マレード・ボーイ』(一九九二年～一九九五年「りぼん」連載 集英社)

など、一九八〇年～一九九〇年代でも人気な男女の恋愛マンガは存在している。

「運命の相手」が出てくるようなマンガは根深く存在しているのであり、時代を超えて愛されているのである。よってここではそのような作品には着目せず、現代だからこそ読まれている作品に注目していきたい。

第二章の内容を踏まえて「現代」に注目すると、一番変化がある分野はやはり「仕事」や「恋愛」ではないだろうか。

二、働く女性が主人公のマンガ

「このマンガがすごい！」にランクインしている作品ではないが、二〇〇〇年代を中心に連載されていた働く女性が主人公のマンガ三作品を紹介する。

●『働きマン』(二〇〇四年～「モーニング」連載 講談社、二〇〇八年から休載中)

主人公の松方弘子(二八歳)は週刊誌の編集者として働いており、三十歳までに編集長になるという目標を持っている。弘子には大手セネコンに勤務する長く付き合ってきた彼氏がいたが、お互いに多忙ですれ違いが続いた結果、十九話で別れを切り出されてしまう。

その後再び彼氏から連絡があり名古屋に転勤することを知らされるが、そのまま二人は別れることになる。

●榎村さとる『Reader Clothes』(二〇〇六年～二〇一一年「YOU」連載 集英社)

大手百貨店・越前屋に勤める入社五年目の天野絹恵(二十七歳)が主人公の物語。学生の頃から九年間付き合ってきた彼氏があり、彼が静岡の実家に帰ることになったタイミングで絹恵はプロポーズされる。しかし仕事が丁度面白くなってきた頃だったため、そ

のプロポーズを受け入れて静岡に行くか、百貨店での仕事を続けるかで悩むことになる。悩んだ結果絹恵は、彼氏と別れることを選ぶ。

その後、今度は職場の上司田淵優作と恋仲になるのだが、田淵が中国に行くことになり、再び絹恵は結婚して中国に行くか残って仕事を続けるかの選択を迫られることになる。彼女は仕事を続けるために東京に残ることを決意し田淵に告げる。それに対する田淵の返答は「東京にひとり置いていくのは心配だから結婚しよう」というものであり、二人はそれぞれ別の場所で仕事を続けながら離れて結婚生活を送ることになる。

●おかざき真里『サブリ』（二〇〇三年～二〇〇九年 『FEMALE YOUNG』 連載 祥伝社）

主人公の藤井ミナミ（二十七歳）は大手広告代理店でCMをつくっており、昼夜問わず仕事に追われるハードな日々を送っている。恋も仕事も忙しかったが、七年間付き合っていた彼氏に「俺と仕事どっちが大事？」と責められ、第一話のラストで別れを切り出されている。

最終回では別の彼氏・佐原がオランダに二年間行くことになってしまい、またもや別れを告げられている。「地球がこわれるくらい悲しい」と感じるが、仕事をしている時は立っていられることに気が付く。実は彼女が妊娠していたことが後から発覚するが、佐原には告げずオランダに行くこともない。一人で出産し、仕事を続けていくことを選択する。

これら三作品の主人公たちはどれも恋愛よりも仕事を続けていくことを優先し、それに合わせた選択をする。仕事にやりがいを感じ、働いている自分に価値を見出しているからである。一九八六年に「男女雇用機会均等法」が施行されてから女性の社会進出が増えたが、現代ではそれは最早当たり前のことになり、さらにその職場の中で男性と戦っていかなくてはならなくなった。男性が有利な職場環境のなかで恋愛を後回しにしても仕事にのめり込み、自分の力で道を切り開いていくことに喜びを感じている。

「このマンガがすごい！」のランキングに話を戻し、二〇一〇年以降の作品について述べたい。

二〇一一年ごろからは同じタイトルが被ってランキングすることもほぼなくなり、ランキングしている作品の内容にもばらつきが生じている。『坂道のアポロン』『俺物語』などの学生が主役のもの、『とくまききトウナイト』『ペルサイユのばら』『ホーの一族』など昔からの人気作品、他『さよならソルシエ』『春の呪い』『ミステリと言う勿れ』など、ひとまとめにカテゴライズできないような作品も見られる。王道的な内容のマンガも相変わらずランキングしているものの、大多数ではなくなっている。

●『東京タラレバ娘』（二〇一四年～二〇一七年 『Kiss』連載 講談社）

「タラレバばかり言ったらこんな歳になっちゃった」 脚本家の倫子（33歳）は、恋も仕事もうまくいかず、同じくアラサー独身女子の香、小雪と焦りながらも「女子会」を繰り返す日々。「キレイになつたらもっといい男が現れる!」「好きになればケツコンできる!」そんな話ばかりしていると、突然、金髪イケメン男子（年下）に「このタラレバ女!」と言い放たれてしまい…。1」

※引用 「Kiss」読むと恋をする・講談社の女性漫画誌『東京タラレバ娘』より
<https://kisscomic.com/c/tararaba/>

『東京タラレバ娘』は二〇一〇年代までに被ってランクインしていたような「青春」「学生」「恋愛」要素が強い作品とは異なり、大人女性が主人公であるからこそ「将来への不安」「焦り」「恋愛観」が描かれている。

倫子たちの「女子会」での話題はもっぱら恋愛がらみであり、出会いを求めて婚活パーティーに参加してみたり相席居酒屋を利用してみたりしながらも「あーでもないこーでもない」と愚痴をこぼしている。同世代が結婚して子供を産んでいく中、アラサーで独身のままでいる自分に対する焦りは、恋愛結婚が当たり前になり結婚が本人の持つスベック次第になった現代ならではのものだ。また歳をとっていくことへの不安は、十代・二十代の若い頃の気持ちがまだ忘れられず、しかし不惑を目前に控えた三十代だからこそ生まれるものである。過去の自分を思い返したり十年後の自分の幻覚が「さみしい」と語り掛けてくるような場面が描かれ、思いのままに行動して仕事に恋愛にと成功をおさめていく後輩の芝田マミ（十九歳）をうらやましく思う倫子の姿もある。

倫子は映画バーの店主と付き合ってみたり、元カレと金髪イケメン鍵谷との間で揺れ動いてみたりと恋愛に忙しい。香は十年以上前の元カレ（バンドマン）と再会しセフレの関係になり、小雪は出産を控えた妻を持つ男性と不倫中だ。彼女たちは恋に仕事に色々悩み、時には喧嘩をしながらも自分の幸せの為に選択をしていく。

「女子会」で「タラレバ」を繰り返しながら騒いでいる倫子たちを金髪イケメン鍵谷は否定するが、それに対して倫子が

「大人になったら 昔のままじゃいけないって 女の子のままじゃいけないって だって雑誌でもテレビでも言ってるじゃん 女はいつまでも女の子の気持ちを忘れちゃダメだって

大人の女はファミレスで恋バナしちやダメってこと？ バカ言ってるんじゃないわよ あれが楽しいんじゃない」2」

※引用（『東京タラレバ娘』四巻 二〇一五年 講談社 倫子の独白より）

と、心の中で反発しているシーンが印象的だ。

紆余曲折の末倫子は鍵谷を選ぶが、「女子会」を辞めることはない。後輩のマミも新たにメンバーとして加わり、最終回ではむしろ以前よりもパワーアップした「女子会」

を繰り広げている。男性に幸せにしてもらおうというより自分の納得いく答えを見つきたいと考えている倫子は、自分の性格・考えを変えることはしないと宣言する。香と小雪も自分の幸せのため、それぞれセフレと不倫の関係を断ち切る。

女同士でしか分らないこと、女だから分かり合えることを共有して笑いあう時間は現代の大人女性にとって大切な時間なのであり、現状に甘えず自分で自分の幸せを選び取っていくためには必要な時間なのである。

『東京タラレバ娘』は二〇一七年に吉高由里子主演で実写化され、さらに『東京タラレバ娘リターンズ』として続編のマンガ連載も始まっている。シリーズ累計発行部数は五〇〇万部を突破しており、多くの女性に人気だ。

先ほど働く大人女性に焦点を当てたマンガとして『働きマン』『Real Riot』最後に『サブリ』を挙げたが、これらの主人公たちはみな仕事はうまくいっており、最後には仕事を優先した選択をしている。しかし『東京タラレバ娘』の倫子はというと、脚本家の仕事では若い後輩に自分の仕事の流れるし、自分の書く作風を否定される。恋愛では、元カレに再度告白されるかもと身構えるも人違い、金髪イケメンには翻弄されるし、新しくできた別の恋人ともうまくいかない。とにかく恋に仕事に両方面で踏んだり蹴ったりで悩みを抱えている。恋愛もそこに仕事も頑張ってきたけれど、ふと立ち止まるとそこには「アラサー」で「独身」な自分がいたのであり、仕事の面でも若い力の前では衰えを感じざるを得ないのだ。

同じような悩みを抱えている女性が主人公のマンガをもうひと作品挙げようと思う。

61

●六多いくみ『リメイク』（二〇一三年〜二〇一六年）『EDEN』連載 マックガーデン
あらすじ

「彼氏ナシ、仕事もマンネリ。あたし『女子力』迷子です。奥村かのこは、派遣社員

の25歳。彼氏イナイ歴も3年目に突入し、次々結婚していく周りの友人や、お洒落を楽しむ同僚をみて焦りを覚える。「変わりたい!」という思いが日々募る中、

ある出会いをきっかけにかのこは一大決心するのだが…… 引用

派遣としてはいった会社に勤めて丸三年、二十五歳になりこのままでいいのかと悩んでいたかのこは、ビューティアドバイザー（BA）の嶋田に出会ったことで、派遣社員としての契約を切り、新しく生まれ変わることを決心する。

『リメイク』のかのこは二十五歳と『東京タラレバ娘』の倫子たちよりも若いのだが、「仕事でうまくいかない」「同世代の結婚に対する焦り」など、抱える悩みは共通している。かのこ特有の悩みとしては、彼女が派遣社員であるというところだ。このままいいのか……という悩みは、正社員ではない派遣社員と言う立場にも由来する。

面接に合格しBAとしての一步を踏み出したかのこだったが、やる気は空回り。なかなかうまくいかず落ち込んでいたところを元気づけたのは職場の女性達だ。無理やり連れてこられた女子会で、うまくやっているように見えていた同僚・先輩たちも実は色々

な悩みを抱えていたことを知ったかのこは、立ち直って前向きに仕事に取り組みようになる。イベントで店舗代表に選出されたり、しかしBAとしての仕事の壁にぶち当たったり、試練を乗り越えながらかのこはBAとして成長していく。

では恋愛はおろそかになってしまっているのかというところでもなく、最終巻では努力の末に憧れだった職場の先輩・四一崎（あいさき）課長と結ばれている。『リメイク』では、仕事と恋愛どちらかを選ぶのではなく、どちらにも精いっぱい励み成功していく女性の姿が描かれている。

このマンガは無料でマンガが楽しめるアプリ、「LINEマンガ」でも読むことができ、人気作品としてランキングしている。

二十代半ば〜三十代の女性が主人公のマンガは他にも、三十歳手前にして同棲していた彼氏にフラれた女性と母との交流を描く・鳥飼西『おんなのいえ』（二〇一二年〜二〇一六年）「BE・LOVE」連載 講談社）や年下男性に一目ぼれしてしまった三十歳女性の脳内会議を描く・水城せとな『脳内ポイズンベリー』（二〇一二年〜二〇一五年）「Coco.hana」連載 集英社）などがある。

ここまでの作品はひとりの主人公に焦点を当てたものだったが、幅広い年代の様々な女性たちに焦点を当てたオムニバス作品もある

●ヤマシタトモコ『HER』(二〇〇九年〜二〇一〇年「フィール・ヤング」連載)
年齢も職業も異なる女性たちが主人公の「CASE」1〜6からなるオムニバス作品である。以下、それぞれの物語を簡単に紹介する。

【CASE.1】

アパレルでバイトとして働く井出さん(二十五歳)が主人公。見た目も性格も悪くないはずなのにどうして男たちは私を選ばないのか。周りの女性たちをなんとなく見下しながら男たちには選ばれる時を待っていた彼女が、たった一人、この男性から愛されたいと思うようになるまでの話。

【CASE.2】

美容師の小野房さん(三十一歳)が主人公。小野房に彼氏はいないが、女たらしで妻がいるお客さん三上が気になるようになってしまう。このまま働き続けて一人で死ぬかもしれない未来を想うと怖いけれど、仕事にお酒、一人の時間、自分にとって大事なものを捨てることほしくない、三上を選ぶ「うま」しない。

【CASE.3】

スカートの丈は三対二・友達とのお揃いは拒否しない・処女だとやばい…世の中でなんとなく決まっている「フツー」に従って生きている女子高生の西鶴「ずえ」が主人公。そんな彼女は、白髪

で初老の女性が若い女性とキスをしているところを目撃する。年寄りには恋をしない・恋愛は男女で行う・キスは目を閉じる。自分の中の「ツッ」と全く一致しない光景を目撃してしまっただけです。これは動揺する。

【CASE. 4】

アパレル関係の会社で働く西浦さん(三十四歳)が主人公。十五歳の頃に母が浮気しているところを見てしまつて以来、心に傷を抱えて生きています。その時の母から感じた「女のおい」が嫌で、おしゃれも化粧もできなくなつてしまつた。酔つた勢いで一晩を共にした居酒屋の店主・立花と関わっていく中で、自分の気持ちに整理をつけていく。

【CASE. 5】

見た目も言動もかわいい女性・花河まみと、さっぱりした性格のかついい女性・本美優が主人公。人に愛されないと自分に意味がないと思つているまみと、恋人はおらず仕事が好きだと言つた優。相手は自分にもいいものを全部持つているように見えてうらやましい。大好きだったのに、素直になれなかった二人の話。

【CASE. 6】

カップルの柳井くんと高子さんが主人公。二人は体をつなけているものの、柳井くんは高子さんからの好意に自信が持てないでいた。女は感傷的で感情的、するくてかわいい。柳井くんは「女は醜い」と言うが、高子さんは柳井くんのそんなところが好きだと言つた。女は怖くて醜い、男は愚かだけれど、それをひくくめて愛おしいと思うのと同じように、柳井くんは高子さんを愛している。

【CASE. 2】の小野房さんは『東京タラレバ娘』の倫子と考えや選択が似ていると言え。恋愛はとりあえず端にやつて仕事をバリバリこなして生きてきたのは良いけれど、将来を考えると怖くなる。このまま独りで歳をとっていくことに恐怖を覚えるのである。しかしだからと言って自分の「だわり」を捨てることもせず、危ない橋も渡らず、あくまで自分の幸せの為に自分らしく生きていくことを決めるのだ。

他にも、女性同士の恋愛・女性同士の嫉妬・歳の離れた女性たちの交流など、様々なパターンの女性たちの物語が描かれている。

女性をテーマにしたオムニバス作品は『HER』以外にも、様々な愛の形を描いた短編集・よしながふみ『愛すべき娘たち』(二〇〇二年～二〇〇三年)、『メロディ』連載 白泉社)や、異なったタイプの「おひとり様」女性の姿を描く・谷川史子『おひとり様物語 - story of herself -』(二〇〇七年)、『Behn』、『Kiss』連載 講談社)などがある。

三、オタク女子・腐女子が主人公のマンガ

ここからは、女性自らで自分自身を定義する「女子」という言葉が使われるようになった二〇〇〇年代ならではの女性同士のマンガ作品を見ていく。

●ふじた『ヲタクに恋は難しい』(「pixiv」Comic POOL) 二〇一四年

「隠れ腐女子の〇し・成海は転職先で幼なじみのルックス良く有能だが重度のゲームヲタクである宏嵩と再会する。とりあえず付き合い始めたものの、ヲタク同士の不器用な二人にまじめな恋愛は難しくして…」⁽³⁾

※引用 (「pixiv」コミック 『ヲタクに恋は難しい』作品紹介)

<https://comic.pixiv.net/works/1530> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十日)

このマンガはもともイラストコミュニティサービス「pixiv」に投稿されていた作品だ。「pixiv」とは、二次創作やオリジナルの小説・イラスト・マンガを一般人が投稿できるサイトで、作品は無料で閲覧することができる。「ヲタクに恋は難しい」は二〇一四年度の【次にくるマンガ大賞】の『本にして欲しいWebマンガ部門』で第一位を獲得して書籍化が決定し、一迅社より、二〇一五年四月三十日に発売された。

『ヲタクに恋は難しい』の主要人物たちはみな、ジャンルが微妙に異なるもののオタクと呼ばれる人間だ。

主人公の桃瀬成海は腐女子で同人作家としても活動しており、マンガ・アニメにも詳しい。幼なじみで恋人になった二藤宏嵩は重度のゲーマーで、仕事場でも休憩中にゲームをしている。二人の職場の先輩、小柳花子は男性キャラクター専門のコスプレイヤーをしており、その界限では有名な人物である。舞台関係などの三次元を好むが、アニメやマンガも読んでいる。成海と同じように腐女子でもある。同じく成海・宏嵩の先輩であり花子の恋人でもある榎倉太郎は、メジャーなアニメ・ゲームなどを好む。一般人以上の知識は持ち合わせているものの、他三人と比べるとややライトなオタクである印象を受ける。

pixivコミック上では

「ヲタクな人も、そうじゃない人もニヤニヤできてキョんキョんしちゃう、あなたのためのラブコメディー!」⁽⁴⁾

(「pixiv」コミック 『ヲタクに恋は難しい』作品紹介より)

<https://comic.pixiv.net/works/1530> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十日)

と紹介されているのだが、コミックマーケットが舞台の話やオタク的な用語も頻出し、成海たちと同じような趣味をもつ読者なら思わず笑ってしまう・共感してしまうようなエピソードが沢山ちりばめられている。オタクとしての彼女たちに共感しながら、その恋愛模様を楽しむことができる。

●谷香央理『メタモルフォーゼの縁側』(「コミックNewtype」二〇一七年) (連載)

『ヲタクに恋は難しい』では、主要人物たちが同じ職場の先輩後輩という関係で比較的年齢も近かった。しかし、『メタモルフォーゼの縁側』は七五歳にしてBしマンガと出会った老婦人市野さんと書店員の女子高生うららの交流を描く物語だ。老婦人の市野さんは夫に先立たれ、子供も独り立ちしており独り暮らし。何気ない日々の中に老いを感じる場面も増えていたが、Bしマンガとうららに会ったことで生活に潤いを感じるようになる。

女子高生のうららは自分の好きなものを共有するような仲の良い同級生がそれまでおらず、市野さんという仲間ができたことをうれしく思っている。彼女は高校三年生の大事な時期に、自分でマンガを描いて市野さんと共に同人誌即売会に参加することを決める。同じ趣味を持つ仲間(市野さん)の存在はうらがが自分探しのために行動を起こす理由の一つになっている。

好きなものを好きっていうのも、綺麗な人をうらやましいと思ったり、将来はこうなりたいみたいなとか、そういうの、全部恥ずかしい、疲れる。咲良くんは自分の大事なものを大事にできてすごいね。5)

※引用 「コミックNewtype」『メタモルフォーゼの縁側』三十四話「うららの独白より」

<https://comic.nintendo.com/contents/engawa/> (最終閲覧日二〇一九年十一月六日)

※「咲良くん」うららと市野さんが会えるきっかけになったBしマンガ『君のことだけ見ていたい』に出てくる男子高校生の名前

同じ趣味を共有できる仲間ができ自ら行動を起こしたことは、好きなものを堂々と好きと言う気持ち、自分にはないものを持つ人をうらやましいと思う気持ち、将来の自分について考えることなど、それまで見えない振りをしていた自分の心に向き合うきっかけになっている。

65

オタク女子や腐女子が主人公の作品は他にも、くらげオタクと三国志オタクと鉄道オタク、男子禁制のアパートで暮らすオタク女子「厄くず」の物語・東村アキコ『海月姫』(二〇〇八年〜二〇一七年)「Kiss」連載(講談社)や、特撮オタク女子の複雑かつデリケートな葛藤を描く・丹波庭『トクサツガガガ』(二〇一四年〜「ビッグコミックスピリッツ」連載 小学館)などがある。

四、第三章のまとめ

二〇二〇年まで、現代の女性を取り巻く社会と現代の女性に読まれていたマンガをみてきた。選択肢が増えたことによって女性の意識が多様化している時代、女性である自分とどう向き合っていくか、自分の幸せの為に何を選択して生きていくかが大切になってき

ている。そのような選択が迫られるのは仕事に慣れてきた二〇代後半〜三〇代の頃であり、実際この年頃の女性たちが主人公のマンガが沢山あった。そんな作品に現代社会が反映されているように感じる。人気になっていくマンガを何作品か挙げてきたがその作風は様々であり、登場人物たちの考えも多様であった。仕事と恋愛どちらも充実させた女性、仕事を選ぶ女性、女性たちだけの世界に楽しさを感じる女性など、本当に色々な考えを持っている。

仕事を続けているけれど出会いがない、結婚願望が強い女性は『東京タラレバ娘』の倫子たちに共感するのであるし、何よりも仕事にやりがいを感じ、長く働いていきたいと考えている女性は『働きマン』の弘子などに共感するのだろう。

また、「女性たちの生きざま」に注目した作品が人気だとも言える。要素としての「恋愛」はあるものの、「女の世界」に着目して、女性同士の会話や趣味の共有、「結婚」・「仕事」・「社会」に対する女性の考えや悩みをリアルに切り取りつつ、おもしろく描いている。

登場人物達の選択に共感したり反発したりしながら自分の生き方について考えることは、マンガを通じた自分探しだ。「男女平等」を推し進める社会と現状にギャップがある現代女性の悩みは、「仕事」「結婚」「子育て」など、尽きることはない。男性からの抑圧が比較的軽くなった現代の女性たちは、そのぶん自分の幸せのために自分で考えて選択していかなくてはならないのだ。このような悩みを共有できるのは同じ「女性」だけなのであり、作中に出てくる女性たちもそれに含まれている。それは、「女子会」を開く女性たちの「女性たちだけの方が分かり合えるし楽しい」という心情とも共通している。

おわりに 現代女性に人気なマンガのこれから

第三章で、「このマンガがすごい!」の二〇一九年までのランキングを引用したが、二〇一九年十二月十一日に「このマンガがすごい!2020」のランキングトップ10が発表された。以下はそのランキングである。

- 一位 牧野あおい『さよならミスカーツ』（集英社）
- 二位 和山やま『夢中さ、きみに。』（KADOKAWA）
- 三位 雁須磨子『あした死ぬには』（太田出版）
- 四位 田村由美『ミスアリと言っつ勿れ』（小学館）
- 五位 奥田亜紀子『心臓』（リイド社）
- 六位 萩尾望都『ボートの一族 ユニオン』（小学館）
- 七位 中野シスカ『だれもなら』（KADOKAWA）
- 八位 つつ井『裸一貫! つつ井さん』（文藝春秋）
- 九位 入江喜和『ゆりあ先生の赤い糸』（講談社）
- 十位 ヤマシタトモコ『速国日記』（祥伝社）

※参考 「このマンガがすごい! WEB」【速報】このマンガがすごい!2020の令和初のランキングトップ10公開【公式発表】<http://kononanga.jp/special/kononar2020>

人気アイドルグループに所属していたもののある事件によって脱退し、全てを隠して男の姿で高校生活を送る少女が主人公の『さよならミスカーツ』『pixiv』や『t_witter』などのWEB上で話題になったワヤマ氏の作品を収録した『夢中さ、君に。』、四十代女性が直面する心身の変調をリアルに描いた『あした死ぬには』など、最新のランキングになると最早王道なラブコメマンガはトップ10に入ることはなく、ランキング作品の内容は混沌をきわめている。

ここでは最後に、そのような作品たちの中でもWEB上で発表されてから人気になり単行本化したマンガに注目していこうと思う。

一、WEB発のマンガ

もともと、マンガ家を目指すような人たちは自分で描いた作品を出版社に持ち込んだり、マンガ連載雑誌で開催されているような新人発掘のコンテストに応募したりすることが主流であった。アマチュアが自身の作品を簡単に多くの人に発信するすべがなかったのである。

しかし、「pixiv」や「t_witter」などのWEBコンテンツが発達した現代では、自身が描いた作品を簡単にWEB上にアップすることができるようになった。これによって自身の作品は瞬く間に多くの人々目に触れるようになる。

現代では、コミック誌で連載、単行本化という流れの他に、WEB上で発表し単行本化と言う流れも主流になってきており、「pixiv」や「Twitter」に投稿していたマンガが人気になり、それが単行本化した事例は沢山ある。

先に挙げた『ヲタクに恋は難しい』『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ』『夢中さ、君に』は「pixiv」発のマンガであるし、本文では取り上げていないが、もちぎ『ゲイ風俗のもちぎさん セクシュアリティは人生だ』エッセイ(二〇一九年)、『戦うみみちゃん和不条理な世界』コミックエッセイ(二〇一九年)などのように「Twitter」上で話題になった人物の作品が次々単行本化している例もある。

このような流れの中で、WEBサイト「オモコロ」で連載され話題を呼び、単行本化・実写映画化されるマンガがある。『ツキイチ！生理ちゃん』だ。

●『ツキイチ！生理ちゃん』図1

ツキイチ！
生理ちゃん

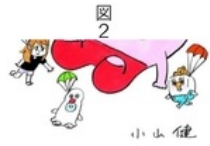


女性特有の「生理」という体験を「生理ちゃん」というキャラクターに見立て、生理に関する女性の悩み・辛さを描いたこの作品は多くの女性たちから共感され、話題となった。WEB連載されていた作品をまとめて書下ろしを追加した単行本がKADOKAWAから出版され、二階堂ふみ主演で『生理ちゃん』(二〇一九年十一月八日より公開)として実写映画化された。

この作品の作者は女性ではなく男性マンガ家の小山健によって描かれたものだ。彼はインタビューで、この作品を描き始めたのは「リツイートされたい」という気持ちからだったと語っている。小山はそれまでいくつかのマンガを描いていたがどれもばつとせず、他のライターの記事がすぐリツイートされているのを見て、「自分ももっとウケるものを書きたい」と思ったそうだ。今までの記事を研究した結果、インパクトを重視した「生理」をテーマにすることを決めたという。

作品を描くにあたって、女性たちから意見を収集したり妻を参考にしたようだが、小山自身の考えも反映されているところもある。六話目の「女子高生と生理ちゃん」の女子高生の話には男の意見を擬人化した「性欲くん」というキャラクターが登場し、男子高校生の性欲との対比が描かれる。

『ツキイチ！生理ちゃん』はただ女性の体験をまとめたものではなく、男性マンガ家視点から描かれたマンガなのである。



左側、緑のパラシュートが性欲くん

※参考 「wotopiーウートピ」『生理ちゃん』作者インタビュー

前編 私たちが『生理ちゃん』に共感してしまうのはなぜ? <https://wotopi.jp/archives/7774>

後編 「生理ちゃんが来ると思うとラクになった」予想外の肯定的な感想に作者は…

<https://wotopi.jp/archives/77843>

二、女性たちのSNSを使った運動

近年、インターネットやSNSが発達し多くの人々が利用するようになったことで、自分の考えを簡単に世の中へ向けて発信し、多くの人々と共有することができるようにもなった。その環境を利用して、女性たちが社会への不満の声をあげている。

●「#KuToo(クトゥー)」

グラビア女優でありライター・フェミニスト・石川優実が発信者として行っている、職場の女性にパンプスを強要する社会に向けての抗議運動で使われている言葉である。全ての人が今よりもっと働きやすく、それによって職業選択の幅が狭まらず、無駄な負担のないような労働環境を目指すため、厚生労働省へ署名を提出し、会社へ性差によるハイヒールやパンプスの強制を禁止するように通達をもらうことを目的とした署名活動を行っており、二〇一九年十二月現在までに三万件以上の署名が寄せられている。

「#KuToo」という言葉は「靴(くつ)」と「苦痛(くるしみ)」と「Me Too(メー トゥー)」を掛け合わせて作られた造語だ。Twitter上で意見を発言するときにこのハッシュタグが使われている。「#KuToo」は、2019年の「新語・流行語大賞」にノミネートされた。

●「生理の辛さを共有する」

月経前症候群(PMS)の症状について知ってもらおうと、SNS上で自分の経験をつづった。男性への正しい女性教育を求め、生理の仕組みと辛さを知ってもらおうと女性たちがTwitter上で発信した。

三、女性に人気なマンガのこれから

このように、女性たちの中で秘められてきたものをソーシャルな場で共有し、それがSNS上で拡散され、意見の交換が行われるようになった。女性たちの悩みはSNSを通して共有され、多くの人々の目にも触れるようになる。このような話題は大きな反響を呼びやすく、テレビ番組などで紹介されることもある。

もともとは女性たちのなかだけで「男子禁制」的に共有されていた「悩み」「辛さ」がSNSを通してWEB上で共有されることよって、それを男性も受け取れるようになった。

『女性特有の問題』に着目するのは女性マンガ家だけでなく、『ツキイチ！生理ちゃん』の小山健のような男性マンガ家も登場してきているのである。

ここまで紹介してきた現代の女性に人気なマンガのほとんどが女性マンガ家の描いたものだった。しかしこれからは、女性にしか起きない「生理」という経験を男性の視点から描く『ツキイチ！生理ちゃん』のような作品がWEB上で発表され、女性から共感を得るような事象はもつと増えていくかもしれない。

テキスト・参考文献リスト

○おちろし

参考

- ・「映画の時間」 「少女漫画原作実写化」を一覧でチェック」
<https://movie.jorudan.co.jp/cinema/tag/%E5%85%B3%E5%B5%B3%E6%96%B6%E7%94%B3%E5%9E%9F%E4%B0%9C%E5%9F%8E%E5%9C%96/>（最終閲覧日二〇一九年十一月十七日）
- ・「別冊マーガレット公式サイト アオハライド 作品紹介」
<http://betsuna.shueisha.co.jp/lineup/aoharide.html>
（最終閲覧日二〇一九年十二月十六日）
- ・「ミックナタリー TVアニメアオハライド」放送記念 咲坂伊緒インタビュー」
<https://natalie.mu/comic/pp/aoha.comic>（最終閲覧日二〇一九年十二月十六日）

引用

- 1) …「別冊マーガレット公式サイト アオハライド 作品紹介」より
<http://betsuna.shueisha.co.jp/lineup/aoharide.html>（最終閲覧日二〇一九年十二月十六日）

○第一章

参考

- ・日渡早紀『僕の地球を守って 愛蔵版』一巻〜十巻 二〇〇四年 白泉社
- ・樹なつみ 『八雲立つ』一巻〜十九巻 一九九二〜二〇〇二年 白泉社
- ・石井慎二編・蓮見清一発行『別冊宝島92うわさの本』一九八四年 JICC出版局
- ・大阪府立中央図書館 朝日新聞記事データベース 聞蔵『ビジュアル
- ・宮原浩二郎・荻野晶弘編『マンガの社会学』二〇〇一年 世界思想社
- ・香山リカ『じぶんを愛するということ―私探しと自己愛』一九九九年 講談社現代新書
- ・図書の家編・石堂碧協力『少女マンガの宇宙 SFファンタジー97080年代』二〇一七年立東舎

引用

- 1) …石井慎二編・蓮見清一発行『別冊宝島92うわさの本』一九八四年 JICC出版局 浅羽通明「オカルト雑誌を震わせた謎の投稿少女たち」一二頁 下段
- 2) …宮原浩二郎・荻野晶弘編『マンガの社会学』二〇〇一年 世界思想社

- 藤本由香里 第3章「分身一少女マンガの中の「もう一人の私」
七三頁十七行～七四頁八行目
- 3) …宮原浩二郎・荻野晶弘編『マンガの社会学』二〇〇一年 世界思想社
藤本由香里 第3章「分身一少女マンガの中の「もう一人の私」
九六頁十一行目
- 4) …宮原浩二郎・荻野晶弘編『マンガの社会学』二〇〇一年 世界思想社
藤本由香里 第3章「分身一少女マンガの中の「もう一人の私」
一一二頁七八行目

○第二章

参考

- ・内閣府 男女共同参画局 男女共同参画とは「男女共同参画社会」って何だろう?」
<http://www.gender.go.jp/about/danjo/society/index.html> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)
- ・厚生労働省 報道・広報 報道発表資料「平成31年3月大学等卒業者の就職状況を公表します」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000205940_00002.html
- 「大学、短期大学及び高等専門学校卒業者の4月1日現在の就職状況調査の推移」(Ecol: 74KB) (最終閲覧日:二〇二〇年一月十一日)
- ・内閣府 男女共同参画局 広報誌「共同参画」2019年1月号
http://www.gender.go.jp/public/kyodosan/aku/2019/201901/201901_04.html (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)
- ・内閣府 男女共同参画社会に関する世論調査 2. 家庭生活等に関する意識について (1) 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識(令和元年)
<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/2-2.html> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)
- ・内閣府 男女共同参画社会に関する世論調査 1. 男女共同参画社会に関する意識について (1) 各分野の男女の地位の平等感(令和元年)
<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/2-1.html> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)
- ・厚生労働省「平成20年度雇用均等基本調査」共同参画」2018年6月号
http://www.gender.go.jp/public/kyodosan/aku/2018/201806/201806_02.html (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)
- ・馬場伸彦/池田太臣『女子の時代!』二〇二二年 青弓社
- ・伊藤裕子『シエンダーマイマニマニティ 揺らぐ女性像』二〇〇六年 至文堂

引用

- 1) …「内閣府 男女共同参画局 男女共同参画とは「男女共同参画社会」って何だろう?」
<http://www.gender.go.jp/about/danjo/society/index.html> (最終閲覧日:二〇一九年十二月十六日)

- ・図一：「内閣府 男女共同参画局 男女共同参画白書 平成25年版 第2節 就労場における女性（管理職に占める女性割合の推移）」第12、14図 役職別管理職に占める女性割合の推移」
<http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-14.html>
 （最終閲覧日：二〇一九年十二月十六日）
- ・図二：「内閣府 男女共同参画局 男女共同参画白書 平成29年版 第2節 企業における女性の参画（役員・管理職に占める女性の割合）」
 12、14図 就業者及び管理的職業従事者に占める女性の割合（国際比較）
http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h29/zentai/html/homen/b1_s02_02.html（最終閲覧日：二〇一九年十二月十六日）
- 2) … 伊藤裕子『ジエnderアイデンティティ 揺らぐ女性像』二〇〇六年 至文堂
- 『座談会』ジエnderアイデンティティ 揺らぐ女性像 柏木恵子・川喜田好恵・金井篤子・伊藤裕子」十四頁下段二二行目～十五頁・上段一六行目
- 3) … 馬場伸彦／池田太臣『女子の時代！』二〇二二年 青弓社 九頁一五行目・十頁一行目（濫澤龍彦『少女コレクション序章』一九八五年 中央公論社 一三頁より引用部分）
- 4) … 馬場伸彦／池田太臣『女子の時代！』二〇二二年 青弓社
- 河原和枝 第一章『女子』の意味作用 二八頁二行目・一六行目

○第三章

参考

- ・「ら」のマンガがすじーWEB 【公式発表……】『ら』のマンガがすじー『ランキングを一挙大公開!』<http://komanga.jp/special/86773-2>（最終閲覧日：二〇一九年十二月十六日）
- ・Kiss『読むと恋をする 講談社の女性漫画誌『東京タラレバ娘』』
<https://kisscomic.com/o/tarareba/>（最終閲覧日：二〇一九年十二月十六日）
- ・「ら」のマンガがすじー『マンガがすじーの縁側』
<https://comic.webnewtype.com/contents/engawa/>（最終閲覧日：二〇一九年十一月六日）
- ・「ら」のマンガがすじー『マンガに恋は難しい』
<https://comic.dixiv.net/works/1530>（最終閲覧日：二〇一九年十二月十日）
- ・ヤンタマ『『ら』』二〇一〇年 祥伝社
- ・東村アキコ『東京タラレバ娘』一巻～九巻 二〇一四年～二〇一七年 講談社
- ・「ら」のマンガがすじー『リメイク』
<https://manga.line.me/product/periodic?id=000046ki>（最終閲覧日：二〇一九年十二月十六日）
- ・馬場伸彦・池田太臣『女子の時代！』二〇二二年 青弓社
- ・MyBest 大人の女性におすすめな漫画の人気ランキング50選」
<https://my-best.com/2008>（最終閲覧日：二〇一九年十二月十七日）

引用

- 1) …「クイーン」読むと恋をする・講談社の女性漫画誌『東京タラレバ娘』
<https://kisscomic.com/c/tarareba/>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十六日）
- 2) …東村マキ『東京タラレバ娘』四巻 二〇一五年 講談社
- 3) …「クイーン」 『タタリに恋は難しい』作品紹介
<https://comic.pixiv.net/works/1530>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十日）
- 4) …「クイーン」 『タタリに恋は難しい』作品紹介「より」
<https://comic.pixiv.net/works/1530>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十日）
- 5) …「ミッドナイト」 『メタモルフォーゼの縁側』三十四話「うらの独白より」
<https://comic.webnewtype.com/contents/engawa/>（最終閲覧日・二〇一九年十一月六日）

〇おたけ

参考

- ・「SDマンがすけーWEB 【速報】『SDマンがすけー』2020令和初のマンガイベント」
10公開【公式発表】 <http://komanga.jp/special/konoma2020>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十六日）
- ・「Word - ウート」 『生理ちゃん』作者インタビュー
前編 「私たちが『生理ちゃん』共感してこまごまなむ」 <https://wotopi.jp/archives/77744>
後編 「生理ちゃんを完結させたかった『生理ちゃん』の感想に作者は…」
<https://wotopi.jp/archives/77843>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十七日）
- ・「キャンズン・オズロ」 職場での「ロールモデル」の強制をなくそう
<https://www.change.org/p/%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%A4%E5%83%B0%E7%9D%9C%E8%81-kudo-%E8%81%B7%E5%A0%B4%E3%B1%A7%E3%B1%A4%E3%B3%92%E3%B3%B0%E3%B3%A8-%E3%B3%91%E3%B3%B3%E3%B3%97%E3%B2%B9%E3%B1%A4%E3%B3%B7%E3%B8%B6%E3%B2%B9%E3%B1%A4%E3%B1%8F%E3%B1%97%E3%B1%84>（最終閲覧日・二〇一九年十二月十日）
- ・「オチロ 小山健」 『キャンサー生理ちゃん』 <https://omocoro.jp/kiij/100541/>
（最終閲覧日・二〇一九年十二月十七日）

引用

- 図…「オチロ 小山健」 『キャンサー生理ちゃん』 <https://omocoro.jp/kiij/100541/>
（最終閲覧日・二〇一九年十二月十七日）
- 図…「オチロ 小山健」 『キャンサー生理ちゃん』 <https://omocoro.jp/kiij/123753/>
（最終閲覧日・二〇一九年十二月十七日）

小説から見る「孤独な青
年」像の変化

一九六〇年前後と現代を比較して



76

三浦
弘暉

目次

はじめに	7
第一章 「孤独」とは	7
第二章 小説研究	8
第一節 住野よる『君の臍臓をたべたい』	8
第二節 入間人間『ぼっちーズ』	8
第三節 三島由紀夫『金閣寺』	9
第四節 大江健三郎『セヴンティーン』	9
第三章 考察	10
おわりに	11
テキスト・参考文献リスト	11

はじめに

本研究では、孤独な青年を主人公とする小説に着目し、主人公の感じる孤独感について詳細に解き明かすとともに、そこから各世代の青年像を考察するものである。

さて、小説『君の臍臓をたべたい』は、二〇一六年に「本屋大賞」第一位に選ばれた*ばかりでなく、発行からわずか二年で実写映画化され、さらにその翌年にはアニメーション映画として全国公開された。この作品をデビュー作とし、一躍人気小説作家となった住野よるは、ほぼ毎年一作ずつのペースで新作を発表しており、今なお多くの読者を魅了し続けている。

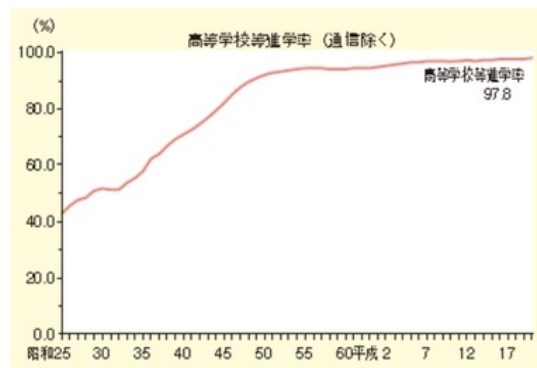
彼の作品は単行本化されているもので、二〇一九年一月十七日現在六作ある。そのうち三作品は、孤独な青年を主人公としている。冒頭で挙げた『君の臍臓をたべたい』も

まさにそんな小説であり、独りぼっちだった主人公が周りの人との関わりの中で葛藤していく様子が如実に描かれる。しかし考えてみれば、このようなテーマを扱う小説は他にも数多ある。有名なものを挙げれば、例えば太宰治『人間失格』、夏目漱石『こころ』などがそうだろう。だがそのような小説と彼の小説を比較して考えた時に、それらに語り口調などの言葉的な違いだけでなく、物語の内容や構造そのものに関する違いがあるのではないかと感じた。そしてそれらがどうしてその時代で流行したのか疑問に思った。それが今回の卒業論文の研究を始めたきっかけである。

ところで、青年といっても、その期間は長く曖昧だ。『広辞苑 第六版』*によると、『青春期の男女。多く、14、5歳から24、5歳の男子をいう。』*とある。しかし今回は、高校生と大学生を主人公とする小説を扱う。理由は次の通りである。

文部科学省の『平成21年度文部科学白書 第2章 現下の教育課題への対応』と『教育の機会確保と質の向上』*に記載されている学校基本調査(図序―1)による高校進学率を見ると、一九六〇年(昭和三五)前後では六〇%程度であることがわかる。さらに一九七五年(昭和五〇)頃に九〇%を超え、そこからほとんど落ちることなく二〇〇八年(平成二〇)には約九八%となっている。

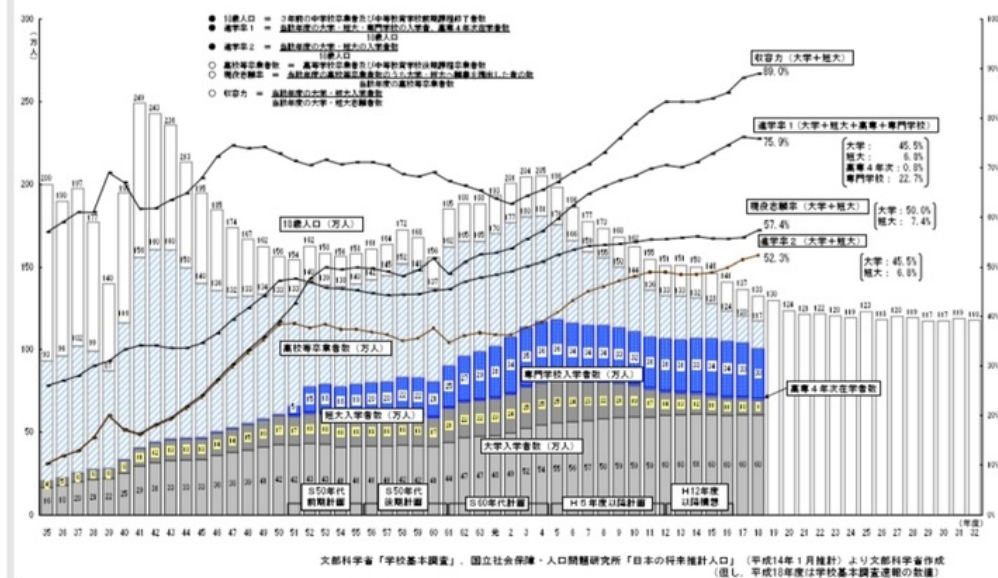
図序―1 日本の高校進学率推移*



さらに、同省『資料4・1 学士課程教育の現状について(基本データ)』*(図序―2)によると、日本の大学進学率(専門学校・短大・高等専門学校四年次在学者含む)は、一九六〇年前後では一〇%程度であるのに対し、二〇〇六年(平成一八年)では約七六%となっている。これらのことから、高校と大学の進学率は、一九六〇年前後と現代とは大きく異なっていることがわかる。それぞれの時代では、高校生と大学生の立場や考え方も違うことが予測される。その時代的な変化の有無を読み解くために、このような設定をした。

なお、戦前までさかのぼると、義務教育の期間をはじめ現代とは比較のしようがないほどに状況がかけ離れている。そのため、高校生と大学生を主人公とする小説において、現代と大差のない一九六〇年前後のものを比較対象として取り扱うのはある程度適切であろう。

5 18歳人口及び高等教育機関への入学者数・進学率等の推移



また、扱う小説は、読者が自身の現状、あるいは青年時代と照らし合わせ、しばしば共感しながら読んでいられると考えられるものであることが望ましい。故に、青年が主人公であっても、例えば異世界転生モノなど、内容が極端なファンタジーであるものは対象から除外する。さらに、青年だけでなくより多くの年齢層の読者に読まれているものもほしい。具体的には、それぞれが出版された時点で学生だった人だけでなく、その周辺世代の人にも読まれ共感されているものであってほしい。そのため、一〇代を主なターゲットとする安価なライトノベルをあえて排除するとともに、より高価なハードカバー本として出版された後に安価な単行本として重版されたものという条件を設ける。これによって読者の主要な年齢層が幅広いと見なすことができる。

以上のことから、今回扱う小説を再定義してまとめると、

- ・一九六〇年前後もしくは二〇一〇年代に初版が発行された小説であること。
- ・孤独な青年を主人公とする小説であること。
- ・主人公は高校生もしくは大学生であること。
- ・ハードカバー本として出版され、文庫本として重版された経緯があること。
- ・極端なファンタジーではないこと。

以上の条件を全て満たす小説として、一九六〇年前後から、三島由紀夫『金閣寺』、大江健三郎『セヴンティーン』、二〇一〇年代から、住野よる『君の隣をたべたい』、入間人間『ぼっちーズ』の四作品を取り扱う。

81

それぞれの小説の考察として、着目するポイントは次の通りである。

- ①：主人公(視点人物)
主人公の名前や特徴など。
- ②：①の置かれている状況
物語のメインとなる舞台開始時点での主人公の年齢、身の上、考え方など。
- ③：①が孤独となった原因
主人公がなぜ孤独な現状に陥ったか、その過程。
- ④：①にとつてのキーパーソン
物語上で主人公に最も大きな影響を及ぼした人物の名前や、その人物の状況、物語上でたどる運命など。
- ⑤：①をとりまくその他の人々
キーパーソン以外の主な登場人物の名前、状況、物語上でたどる運命など。
- ⑥：物語の経過・展開
物語上で起こった出来事を、起こった順に番号を振り記す。
- ⑦：⑥を通しての①の心境・信条の変化
物語を通して主人公の考え方がどのように変化したか。

なお、あらずしは特に番号を付与せず「番初めに記す。また、最後に『彼らの「孤独感」について』という項目を設け、次章で定める孤独感に主人公がどのように当てはまっているのかを考察する。この他、必要に応じて随時項目を追加し、考察していく。

第一章 「孤独」とは

研究を始めるにあたって、まず「孤独」とはいったい何なのか、人はどのような時に孤独感を覚えるのか、という疑問に直面した。『広辞苑 第六版』*で「孤独」と検索すると、『②仲間のないこと。独りぼっち。「―感」*とある。確かに独りぼちな状況は孤独ではあるが、それだけでは説明がつかない場合がある。先ほど挙げた『人間失格』の主人公の大庭葉蔵を思い出してほしい。彼は大家族に生まれながら子供時代を過ごし、『人間の営みというものが未だに何もわかっていない』*と言い、孤独を感じていた。彼に特異性はあるものの、他人のことがよくわからず周りから孤立していると感ずることは多くの人が理解できるのではないだろうか。このように、周りに人がいても孤独を感じることがあるのは明らかだ。

落合良行は、『孤独な心・淋しい孤独感から明るい孤独感へ』*で、孤独感を『自分が一人であると感じること』*と定義づけた。さらに作中で、「理解・共感についての感じ方」と「孤独への目の向け方」に着目し、それらをもとに孤独感をA型とD型の四つのパターンに分類した(図1-1)。

表の縦軸は、「現実に関わり合っている人と理解・共感できると考えているかどうか」であり、横軸は人が自分とは別個の存在であるということ気付いているかどうか、すなわち「人の個性に気付いているかどうか」である。

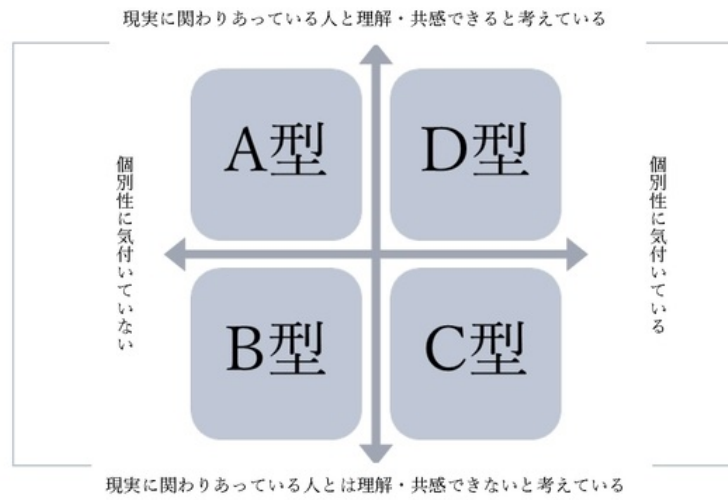


図1-1 孤独感の4類型*5

それぞれの孤独感の特徴は次の通りである。
A型:人とワイワイやっついて、融合した状態で味わう孤独感。物理的に独りである時に、何となく寂しいと感じる。

B型：自分と心が通じ合わなかったり、人の心がわからなかったりする時の孤独感。みんなと一緒にいても心理的につながっていないと感じる。誰も自分のことをわかってくれないが、一方で誰かわかってくれる人がいるはずだと考えている。

C型：誰一人として自分と同じ人はいない。だから誰も自分のことを理解してくれないのは当然だ。同様に自分も人を理解できないのだから、人を信用せず、周りにとだけ人がいても心を閉じたままにする。

D型：自分と同じ人はいないが、だからこそお互いに理解しあおうという孤独感。同感ではなくても共感ができると考え、自分のことを他人に理解してもらいたい一方で自分自身も他人を理解したいと思っている。

さらに、「居場所」についての研究も心理学界隈でなされている。本岡寛子によると、居場所には大別して「物理的居場所」と「心理的居場所」の二種類がある。物理的居場所とは、学校や友達の輪の中など、物理的に人と一緒に存在できる居場所のことである。対して心理的居場所とは、自分があるのままの姿で存在できる居場所のことであり、自分自身をわかってくれる人がいなかったり、自分の本心を打ち明けられる場がなかったりした時に満たされていないと感じることがある。物理的居場所と心理的居場所、どちらも満たされていないならば孤独感を感じるといえる。これらについては、本岡から直接話を伺って得た知識である。また、浅木海音と奥野誠一は、『大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連』*の中で、則貞百合子の心理的居場所の研究を挙げ、『心理的居場所とは、「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場があるという感情」であり、物理的側面だけでなく人間関係性に基づく心理的空間も含むものである。』*と述べている。つまり心理的居場所の定義の中に物理的・心理的両面の居場所が含まれているということである。

以上、落合の研究による孤独感の四分類と、本岡や浅木・奥野らの研究による居場所の定義を紹介した。今回は、前述した小説の主人公の孤独感の研究にあたって、この二つの観点から考察していく。なお、紹介した居場所における研究で、本岡と浅木・奥野の述べることが対立しているような印象もあるが、今回はより深く掘り下げて研究するために、便宜上本岡の主張を採用し、物理的・心理的両居場所を分けて考え、それぞれが満たされていたかどうかを見ていく。

第二章 小説研究

第一節 住野よる『君の隣臓をたべたい』

【あらすじ】

志賀春樹は、友達がいなかった。なぜなら、他人に興味がないからだ。周りの人も基本的に彼を気にすることはなかったが、しかし高校二年生のある日を境に、例外が約一

名現れる。それはクラスの人気者、山内桜良だった。四月、桜がまだ残っていたある日、彼は盲腸の手術の抜糸の後、病院のロビーにて「共病文庫」と題された日記を拾い、持ち主だった彼女が臍臓の病気で余命わずかであることを知る。以来、彼女はしきりに彼と交流を持ちたがり、休日や放課後に遊びに誘うようになった。彼はうっとうしがりつつも、余命いくばくもない彼女の頼みを断り切れずに仕方なく付き合う。ある日は焼肉食べ放題、またある日は若い女性が好きそうなスイーツbuffetのレストラ、さらには新幹線に乗って一泊旅行と、回を重ねるごとに交遊がエスカレートしてゆき、彼はその度に彼女の見せる予想外な提案と行動にたじたとするが、同時に彼女の人間性に少しずつ興味と憧れと尊敬の念を抱くようになる。しかしそんな矢先、彼女は天寿を全うすることなく、通り魔に襲われて死亡する。彼は彼女の様々な行動や感情の謎を知るために、彼女の母親と面会し、彼女が残した「共病文庫」を入手する。そこから彼女自身も彼に憧れていたことを理解する。そして、彼女が彼に課した最後の宿題であると思われた、彼女の親友・恭子との友人関係を構築し、二人でお墓参りに向かうのであった。

【①・主人公(視点人物)】

志賀春樹。小説を読むことが好き。自分を「草舟」に例え、周りの流れになるべく巻き込まれないように、巻き込まれたら逆らわないようにと生きてきた。

【②・①の置かれている状況】

高校二年生。小学生頃から友達がおらず、作るうともしなかった。志賀のクラスでの立ち位置は、地味で目立たず、ただずつと本を読んでいる根暗な人であり、山内と一緒にいる時でさえ、クラスメイトは彼女には挨拶するものには目もくれない。

【③・①が孤独となった原因】

志賀自身が友達を作ろうとしなかったからである。彼の考えでは、人は皆自分にしき興味のない生き物であり、よほどの魅力がある人でない限り関心は向かず、まして自身はその類の存在ではない。故に周りの人も自分に興味もなく、自身も他者に興味はないから、友達など作る必要もできる必然性もない、というのが信条だった。山内との件によってクラスで度々注目を集めたが、その時でさえも、自分からは特に弁明もせず、相手から話しかけられない限り極力無関心を装った。

【④・①にとってのキーパーソン】

なんといっても今作のヒロインである山内桜良である。彼女は、志賀の「人と深く関わらない主義」を初めて打ち破った人間であり、死後に彼が友達を作るようになるきっかけとなった人物である。彼とは対照的に明るく快活、クラスの人気者で、友人関係のみならず恋愛歴も過去三人と豊富だ。中学生のある秋、臍臓の病気で余命数年と宣告さ

れる。最初はひどく落ち込んだが、やがて現実と向き合い、自分の運命を恨まずに病氣とともに生きると決断、ほぼ同時期に書き始めた日記を「共病文庫」と名付けた。病氣のことを話せば動揺して日常を日常らしく過こせなくなると危惧して家族と医者以外には友達はおろか学校の先生にさえも秘密にしていたが、共病文庫を読まれてしまったこととで彼に知られてしまう。しかしその際のリアクションが比較的軽微であったことから、彼ならばこんな自分と素で関わっても普通に接してくれると考え、唯一病氣のことを隠さなくていい友達としてぐいぐい接するようになる。しかしツツコミづらい病氣のことを平気で自虐ネタにすることはさすがに彼の動揺を誘い、その度にたしなめられているが、回を重ねることにうまくなることを身に付けられ、ある種のコントの様を呈するようになる。また、彼女が病氣であることと、それを感じさせないような明るさと強引さは、彼の関心を引くと同時に、彼女の多少行き過ぎた頼みも断れない理由となった。彼女が彼を連れまわしたことが、結果的に友達のない彼にとつて非常に多くのことを経験させることになった。

【⑤・①をとりまくその他の人々】

山内ほどではないものの、志賀に直接的に大きな影響を与えた人として、山内の親友である恭子(苗字不詳)、山内の元交際相手であり学級委員の隆弘(同)が挙げられる。

恭子は、山内の中学生時代からの親友であり、山内の遺書に志賀と並んで個別にメッセージを残された友人の一人である。志賀に対しては、俄かに山内と親密になったことを警戒し、特に志賀が山内と二人でこっそり旅行したと知った際には「校長に変なことをしたら殺す」と言い放った。病氣のことを山内からではなく死後に志賀の口から聞き、そのうえで「友達になってほしい」といわれた時には、山内の秘密を黙っていたことを許すことができず一旦断るが、一年に及ぶ志賀の努力の末ついに許し、高校三年生の夏、共にお墓参りに行く。

隆弘は、山内の最後の恋愛としての交際相手である。志賀と山内が初めてプライベートで遊んだ頃にはすでに別れていたらしい。山内にはまだ未練があったようで、俄かに仲良くなった志賀を邪魔者として、志賀の本のしおりを盗んだりと密かな嫌がらせをした。志賀が山内と喧嘩をして家から飛び出し、雨降る道中で出会った際、志賀に対する恨みが噴出し、激しく責め立てて殴りつけるが、それを山内に見られ、完全に振られてしまう。志賀はこの一連の事件を『人生でおよそ初めての経験となる、いわゆるいざこざ』と表現しているが、そう感じた直後に、志賀はおそらく初めて、意図的に人を傷つけるような発言をした。彼が志賀を殴ったのもその発言のためである。

【⑥・物語の経過・展開】

時系列に従って重要事項をまとめると次のようになる。

(一) 中学生の山内、朦朧の病気で余命宣告を受ける。ごく一部の人を除いて病氣のことを秘密にし、共病文庫を書き始める。

- (二) 山内、高校進学。家族や友達との時間を大切にするため帰宅部になる。
- (三) 高校二年生の志賀、病院にて共病文庫を拾い、山内の事情を知る。
- (四) 志賀と山内(以降「二人」)、ともに図書委員になる。
- (五) 志賀が図書委員の仕事中に山内に「君の脾臓を食べたい」と前代未聞の告白を受ける。帰宅時、日曜日に二人で外出の約束をさせられる。
- (六) 二人が焼肉を食べに行く。やたらと志賀の話を開きたがる山内に、自分は誰かに興味を持たれるような人ではないから話したくない、などと言うが、山内は「私は興味がある」と言う。志賀は急に山内が怒り出したことを不思議に思いながらも、例の草舟精神でしぶしぶ答える。
- (七) 翌日、二人の交遊がクラスに知られて話題となる。志賀は極力気にしないようにし、直接尋ねられても適当にやり過ごす。
- (八) 同日、志賀が山内にスイーツカフェに連れていかれる。店内で恭子と遭遇し、警戒される。山内がなぜ志賀と関わるのか語る。
- (九) 志賀が山内の死後の憂いをなくすために、共病文庫に自分の名前を書かないことを要求する。
- (一〇) 志賀の本のしおりがなくなる。
- (一一) スイーツカフェの三日後、二人でまた交遊。新幹線に乗り福岡県へ旅行する。太宰府天満宮、モツ鍋店などを回り、高級ホテルで同じ部屋で一泊する。酒を飲みながら『真実か挑戦』ゲームをし、お互いのことについてわかりあう。
- (一二) 翌朝、秘密の旅行が恭子に知られる。帰路に就く前に、山内が手品グッズを買い、練習すると宣言する。
- (一三) 翌週月曜日、秘密にしていたはずの旅行がクラス中に知れ渡る。志賀の上靴がゴミ箱の中から見つかる。翌日も志賀の筆箱がなくなるなど不審なことが続く。
- (一四) 一学期最後の登校日の放課後、二人で山内の家に行く。目的は、山内の薦める『星の王子さま』の本を借りに行くこと。将棋やゲームをした後、帰宅間際に、山内が抱きつくなどのいたずらをしてきたために志賀が激怒、反撃でベッドに山内の身体を押しさえつける。山内の涙に自我を取り戻し、気まづくなって家を飛び出したところ、隆弘と出会い、喧嘩する。追いかけてきた山内に志賀は家に一旦連れ戻され、そこで仲直りする。山内は志賀と出会ったことは偶然じゃない、自分の意志で出会ったのだと話す。
- (一五) 翌日、山内が入院する。以降、志賀が山内の病院を見舞いに訪れるようになる。その際、山内が意図的に志賀と恭子が鉢合わせになるよう仕向ける。
- (一六) 二回目の見舞いの後、志賀が恭子と木屋で鉢合わせる。恭子は、山内を傷つけたら私が殺す、と言い放つ。
- (一七) 四回目の見舞い。山内から『真実か挑戦』ゲームを持ち掛けられ、志賀の勝利により、山内にとって『生きる』とは何かを聞かされる。志賀にはすぐには伝えなかつたが、山内の病気の進行が早く、寿命が半分に縮まったことが発覚する。

(一八) 五回目の見舞い。志賀が山内の心境の変化に気付き、心配する。山内に「生きていてほしい」と伝えると山内は大爆笑。しかし志賀の帰宅後、山内は嬉しさに泣く。

(一九) 退院までの間にもう四回、志賀は山内の見舞いに行く。

(二〇) 退院の日、『デートの約束』で海に行くために、志賀が待ち合わせ場所のカフェに行く。山内との交流から得たものを考えながら待っていたが山内は結局姿を見せなかった。夕食時に山内が通り魔の犠牲になったことを知る。

(二一) 山内の葬式。志賀は出席せず、家で山内から借りた小説を読むなどして過ごす。

(二二) 志賀は突然亡くなった山内の物語の残り数ページを読むために、山内が残した共病文庫を得ようと家を訪れ、山内の母からそれを受け取る。山内のたどった人生と志賀に抱えていた思いを知り、泣く。そして山内の意思を実現するために、恭子に電話を掛ける。

(二三) 志賀と恭子がカフェで会う。恭子が志賀から共病文庫を受け取り、読んで泣く。志賀は恭子に「友達になってほしい」と頼むも、断られる。

(二四) 一年後、恭子と仲直りを果たした志賀が二人で山内のお墓参りに行く。

【⑦⑧を通しての①の心境・信条の変化】

最初、志賀は友達がいなかった。それは自分が他人に興味を持たないのと同じように、他人も自分に興味を持っていないだろうと信じて疑わなかったからである。だからこそ周りで何が起ころうが自分に関係なければどうでもいい、それが彼の信条であった。しかし山内がその考えを覆した。ここまでは前述の通りである。彼自身も、時には自分の人間観を披露して抵抗を試みるが、相手に強く出られるとそれ以前に出られない草舟精神と、彼女の持つ並みならぬ境遇への憂慮により、いつも押し切られてしまふ。彼女の答えたくない質問に答えさせられてしまい、行きたくない場所に連れていかれてしまい、関わりたくない人とも不必要に関わらざるを得なくなってしまう。だが彼女との交遊は確実に彼を変えていった。彼にとって人とここまで深く関わったのは初めてであり、その中で相手に思いやりの感情を持つこと、心配すること、さらには喧嘩の後の仲直りまで経験した。そうして序盤では彼女をうつつとうしがっていたのに、後半では彼女の『私に生きていてほしいの?』という問いに『うん』と即答するまでになった。他人に興味を持たなかった彼にとって、これは大きな変化だろう。加えて自身が流れに逆らわずになんとか生きてきたと思ひ込んできたことさえも実は自ら選択して歩んできた道だったと気付くのだ。そうして終盤では、「恭子と仲良くしてほしい」という彼女の思いに流されたわけではなく、自らの意志で一年間の粘りの末友人関係を構築した。

この物語を通して変わったのは志賀だけではなく、山内もまたその一人であった。彼女は彼が秘密を知る前から、自身とは正反対の人間だと感じて興味を持っていた。病院での邂逅の場面で話してから彼をますます気に入ったらしい。だから彼を少し強引に連

れ出して突飛な交遊をしたのは、彼に変革をもたらそうとしたというよりはむしろ自身自身の遊び心の赴くままと行ったところだろう。しかし彼との交流の中で、自分が多くの人の中で生きてきたこと、彼らなしには自分の魅力は成立しないこと、他人との比較の中でみ自分という存在を見つげられることに気付く。そして、対照的にそれらを全て他者との関わりの中ではなく自分の中で自己完結させてきた彼に憧れを抱くようになる。(一八)で、彼女は泣いたが、それは誰もいなくても一人で存在できる彼に、他者とは独立した一人の存在として心から必要とされると感じたと感じていたからであつた。そのことに対して非常に嬉しさを感じたのである。

【彼らの「孤独感」について】

まず、落合の定めた孤独感の四分類を、志賀と山内に当てはめて考えてみよう。

志賀の孤独感、山内と出会うまでは、その考え方の特徴から、C型であると言つて間違いないだろう。彼は最初は友達を持たず作らずの精神であり、他人が自分をどう考へようが、また自分が他人をどう考へようが、お互いに関係ないことだと信じていた。だが彼女と出会い、交流を深めてゆく中で、その心境に変化が見られ、まず彼女をどうでもいいとは思えなくなり、ついには彼女以外にも友達を作ろうとあがくようになってきた。このことから、最終的にはD型の孤独感に落ち着いたとみられる。ただ一つ疑問なのは、他人に興味を持っていなかった彼が果たして本当に孤独感を持っていたかどうかである。強いて言うなら、彼が本当に孤独を感じていたタイミングは、彼女と死別した彼が、燕子に拒絶されてから仲直りするまでの、小説では詳しく描かれていない一年間ではないだろうか。

もしその考えが正しいとすると、孤独感を強く抱いていたのはむしろ山内のほうではないだろうか。確かに彼女は志賀と違つて常に人間関係に困らなかつた。しかし⑦で述べた通り、彼女は周りの人々の中で相対的な自分の魅力を見出していた。つまり極論、他人と接していない状況では、逆説的に『私っていったい誰?』と感じていたことも考えられる。しかし常に周りに人がいるわけではない。加えて彼女は物語中盤で入院し、友達という時間が人よりも短くなつてしまつた。だから入院中の彼女の孤独感本来ならば日に日に激しくなつていくはずであり、そのまま押しつぶされてしまつたかもしれない。だがそうならなかつたのは他でもない志賀との交流があつたからだ。他者との関わりを必要としなかつた彼から『生きていてほしい』と言われたことで、『自分が、たった一人の私であると思つた』のだ。『人間は相手が自分にとって何者かわからないから、友情も恋愛も面白い』とは言つていたが、人の個性に本当に気付いているかどうかは疑わしく、一方で自分自身の本当の魅力を求め、その理解者を求めていたことから、A型とB型を併せ持っていた状態から最終的にD型にたどり着いたと考えられる。

次に、本岡の言う物理・心理的居場所について、二人を当てはめていく。

志賀は、友達を持たなかつたため、学校での物理的居場所の充実度はお世辞にも高いとは言えない。しかし彼は自分の中に自分の世界観を持つていた。友達関係を持たなく

ても、自分を取り巻く人々に対して、小説の登場人物のように想像し、自己完結させてきた。友達がいけないという状況も、自分で選び取り、実際に山内との交流が始まるまでは周りの人も概ねその姿勢を許してきた。このことから、心理的居場所とは自分の中に保持することができていたと考えられる。

一方山内は、前述の通り友人関係には恵まれており、学校でも外でも友達と和気あいあいと過ごすことができたことから、物理的居場所は申し分なかった。しかし自身の病気のことについて話せる人が志賀と出会うまではおらず、また、友人関係の中で自分単体としての価値を見失いかけていたことから、心理的居場所とはなかなか手に入らなかったと言える。

要するに二人はお互いに正反対の「居場所」を持っていたわけである。そして物語が進むにつれて、それぞれの足りない「居場所」を相互に補充させてゆくのだ。二人が仲良くなった背景にはこのようなある種の人間関係の化学反応があり、これによってますます信頼度を高めてゆくのであった。志賀が山内の死後に自ら友達を作ろうと努力したのは、彼女の意志を引き継ぐためのみならず、彼女とともに失った心理的居場所を取り戻そうとしたからに違いない。

第二節 人間人間『ぼっちーズ』

【はじめに】

本小説は二〇一〇年に出版された同タイトルの小説（ハードカバー本）*を作者が加筆修正し、文庫化したものである。文庫化の際、ハードカバー版の第五章の続きとなる短編が追加され、間章を除き六章構成となった。それ以外は特に大きな内容の変更がないため、ここでは文庫版を扱う。

この小説では五人の登場人物が各章の視点人物として存在する。前述の通り全体では六章あるが、第一章と第六章の視点人物が同一人物なので実質五人で間違いない。彼ら一人一人について解説すると内容が膨大になるため、今回は特に第一〜第二章に注目し、①〜④では第一章の視点人物を扱うものとする。視点人物の代わる第二章も扱うのは、その章にも第一章の視点人物が大学生として登場するからである。

【あらすじ】

「友達」というものは、非常にありふれたものであり、誰もが気軽に手にしているものである。けれどそれがなかなか手に入らない人たちがいる。なぜなのだろうか。

人々がこつた返す大学で、多くの学生が誰かしらの気の知れた友人を作っていく中、誰一人として友達を作れなかったいわゆる「ぼっち」がいた。大学に居場所を持ってない彼らは、怪しげな保険医からうさぎのストラップのついた謎の鍵を渡される。『きみがこの、どうしようもない大学生活と闘う気があるならこの鍵を受け取るんだ』こうして、彼らのぼっち脱却への闘いが始まった。

そもそも友達とは何か。どうして自分は友達ができないのか。彼らは保険医から授かった一室で考える。そうして彼らなりの答えを出し、部屋を出る。どういうわけかぼちが現れる度に受け継がれたその部屋の正体は、約三〇年の時を経て(〇Bを含めて)部員を集めた「幕場野球同好会」の部室だった。それはぼちたちで構成されたぼちたちのサークルだ。彼らは長い時を経て何とか一チームができるだけの部員を確保し、かつて大学に存在した別の野球部の元部員に試合を挑むのであった。

【①・主人公(視点人物)】
森川豆。甘いものや辛いものなど、刺激の強い食べ物が全般的に苦手。

【②・①の置かれている状況】
愛知県のある某大学経営学部所属。第一章時点で一年生、第二章では四年生になっている。実家は岐阜県にあり、大学の近くに下宿している。大学はおろか、これまでの人生で友達らしい友達は一度もできなかった。理工学部環境創造学科の中村さんに片思い中で、彼女と会うために大学の近所のクレープ屋に通っているが、クレープ自体は苦手である。中村さんには同じ経営学部の笹島康夫も好意を抱いており、恋敵である。

孤独に耐えかねて六月より保健室登校をすると、そこで怪しげな保険医から謎の鍵を託され、第四講義棟三階奥の部屋を与えられる。以降、しばらくそこで暮らすようになる。自宅には風呂と洗濯のために『通う』ようになる。

第二章開始時点では鍵は保険医の手に戻っていることから、それ以前に秘密基地を明け渡した模様。

【③・①が孤独となった原因】
大学入学以前は不明だが、入学前の春休み中に経営学部合宿に参加したものの、その中で同期に話しかけられも話しかけられもせず、当然友達もできずそのまま現在に至る。

【④・①にとってのキーパーソン】
中村さん(名前不詳)。森川と同じ大学に通っており、所属は理工学部環境創造学科。大学近くのクレープ屋でバイトをしている。

森川が高頻度でクレープを食べるのに全然太らないこと、彼に友達がいないこと、そして彼がうっかり口を滑らした「秘密基地」というワードに興味を持つ。

学科では数少ない女子であるため同期の男子からはヒロイン扱いされており、バイト先にも友達がいる。それ故に本当に友達がいないという森川は彼女にとって非常に新鮮な存在であった。

容姿端麗であり、森川のように孤独な男子二人から二か月連続で告白され、いずれも断っている。

ちなみに、「中村」という登場人物は今作にもう一人登場する。それは彼女の父である。彼こそが墓場野球同好会の初代リーダーであった。もちろん彼も友達のないぼっちであった。彼と区別するため、彼女を指す場合は今後も引き続き「中村さん」と呼ぶことにする。

【⑤・①をとりまくその他の人々】

第一章、つまり森川が大学一年生の時に限れば、笹島康夫と保険医が挙げられる。

笹島康夫は、森川の同級生である。目つきが悪く険悪な印象の要望で、顔の形が根菜類を彷彿とさせる。森川と同様友達がいない。中村さんに好意を寄せており、森川とはその点で互いに向かい合う関係だが、一足先に中村さんに告白して玉砕する。それに触発されて森川はクレープの包み紙で折った百羽の折り鶴で告白するも直接言葉にしなかったために気付かれず、代わりに「友達告白」をし、こちらは受けてもらえる。つまり結果論だが彼は森川と中村さんの仲を近づけさせる囁ませ犬になったと言える。ちなみに、彼は告白失敗の後、やけ食いで大学近くのラーメン店の大吃いに挑戦し完食、店の歴史にその名を残した。

保険医は、職業は厳密には養護教諭だが、学生からそのように呼ばれている。医学部出身。自称無免許カウンセラー。中性的な容姿をしている。実は墓場野球同好会の創始者に次ぐ古参メンバーであり、つまりこの大学出身である。彼もまた学生時代に孤独を味わっており、入学してきた独りぼっちたちに居場所を与えられるようにと、部員が全員引退した後も部室を密かに残し、彼が見込んだ者に「秘密基地」と名付けられた一室を託してきた。と同時に無断で彼らを墓場野球同好会に入部させていた。

第二章では、羽生田順が視点人物として登場する。大学一年生で、経営学部所属。彼もまた友達がいないぼっちだった。理由は、『集団に属すること好きな方向に行けなくなることを嫌った』からだ。多くの人がはびこる大学で居場所を見失っていた矢先、保険医から話しかけられ、例の鍵と「秘密基地」を授かる。しかしそこに入り浸る生活に将来的な危機感を覚え、外側に友達という居場所を求めて夜に秘密基地を出たところ、第四講義棟入り口前のベンチで森川に声を掛けられ、以来、二人は毎夜オセロをずる仲になる。交流の中でお互いにとって縁の薄い「友達」というものについて話し合ううちに、いつの間にか彼にとつてそこが新たな依存先となり始め、森川と会う時間を待ち遠しく感じるようになる。最後は森川を友達と認めた。

余談だが、実は森川は大学卒業後も大学院生、講師といった形で大学に残っており、そのため間章を除く全ての章に登場し、それぞれの視点人物とも関わることになる。中村さんも、大学近くで働いており、保険医もずっと大学で同じ職業を続けていて、森川と同様各視点人物と関わる。特に中村さんと保険医は孤独に悩む視点人物のアドバイザー的な役割をすることが多い。ちなみに視点人物の名前だけ挙げるならば、すでに述べた人を除けば、第三章の蓮池鞠、第四章の戸井剛、第五章の音石鴨である。ただし音石は中村さんと同様友達に恵まれた非ぼっちである。

【⑥・物語の経過・展開】

第一章より第二章を時系列に従って重要事項をまとめると次のようになる。

- (一) 森川が入学。四月の経営学部合宿で大学デビューに失敗する。
- (二) 五月、中村さんが森川の同級生(笹島とはまた別の者)に告白されるが、断る。
- (三) 森川が保健室登校。同日、保険医から秘密基地を託される。
- (四) 笹島が森川に、中村さんへ告白すると宣言する。森川は先手を打って中村さんにそのことを遠回しに警告するが、その際にうっかり秘密基地の存在を明かしてしまい、中村さんは大変興味を持つ。
- (五) 森川が中村さんに学校で付け回される。流れて保健室にたどり着き、保険医と三人で会話し、秘密基地や森川について話す。その後、森川と中村さんが一緒に昼食を食べる。
- (六) 笹島が中村さんに告白し、玉砕。
- (七) 森川が中村さんに告白するも気付かれず、代わりに友達になる。(第一章完)
- (八) 森川、秘密基地返還。
- (九) 森川の入学から三年後、羽生田が入学。

【以降第二章】

- (一〇) 羽生田が保険医から秘密基地を託される。
- (一一) 羽生田と森川が初めて出合い、以来毎夜オセロをするようになる。
- (一二) 森川と羽生田の夜会二日目。友達と無意味な話題で盛り上がるかどうかを検証。
- (一三) 夜会三日目。友達になるために他人に迎合すること、友達になったら友達になったと口に出して言うべきかどうかを検証。
- (一四) 夜会四日目。羽生田が夜だけではなく昼にも会うことを提案、翌日二眼目の講義をともに受ける約束を交わす。
- (一五) 羽生田と森川が共に同じ講義を受ける。
- (一六) 森川が夜に来なかったが、笹島がやってきて羽生田とオセロをする。
- (一七) またもや夜に森川が現れず、代わりに偶然居合わせた中村さんと羽生田が話す。
- (一八) 翌日の夜、羽生田が森川と再会、またオセロを始める。羽生田が森川に、友達ができたと伝え、暗に森川を友達だと宣言した。(第二章完)

【⑦・⑧を通しての①の心境・信条の変化】

森川は大学一年生の段階で一八年間、友達がいなかった。それまで作ろうとする気すらなかったというわけではない。春休み中に行われた新入生の合宿にも、一人だけ取り残されることへの危惧と素敵な女子大生との出会いへの期待を込めて参加したからである。しかし結局その期間中一度も話しかけられず、学生生活が始まってからも友達はつ

いに行きなかった。そのせいか友達同士で仲良く話す連中を見ると激しい嫌悪感を覚える。そしてそれ以上にそんな自分自身に対しても、やりきれなさから来る絶望の感情を抱いている。だが一方では、なぜ自分には友達ができないのかという超難問に対して自分なりの答えを出そうともがいていた。友達がいないので学校に居場所がなく、かといって引きこもりも嫌だ。そんな中で保険医から与えられた第四講義棟の一室は、彼にとって一時的な妥協点となったのだ。つまり、一応学校にいるし、誰にも気にされずに堂々と独りでいられ、友達の不在についてこらくまで考えられる場所を得たのだ。逆に言えば、そこを他人に知られてしまえばこの安全地帯を失うことになる。だからいくら相手が憧れの中村さんといえどその場所を知られるわけにはいかず、彼女から興味を持たれても隠し通そうとしたのだ。

森川にとって転機となったのは、(四)である。それは予定外に秘密基地を喋ってしまったということだけでなく、人前に出ると緊張して声がうまく出なくなる『こんにやく現象』という悪い癖を克服したという意味でもある。翌日の中村さんのランチでは上手に話すことができなくなったことから、完全克服とまではいかなかったが、それでも彼女から逃げずに思いを伝えられたことは彼にとって大きな前進であった。また、ランチの時点では、彼女と友達になったことを想像して『甘美なような、地獄でもあるような』と考えたが、最終的には彼は友達になることを選んだ。あれほど忌み嫌い、あれほど憧れていた「友達」。その関係を自らの意志で相手に要求することができた。

森川の友達作りへの挑戦は羽生田に対してという形で継続する。友達はできても、そもそも友達というものについて未だ今一つわかっていなかった彼は、羽生田とひとまず毎晩会う機会を取り付け、交流の中で友達になるための試行錯誤を繰り返す。それは相手を直接友達だと声に出して言ったり、どうでもいい会話の中で相手の発言に逐一大げさにリアクションしたりと、非常に不器用で痛々しいものであったが、最終的に羽生田に自分を友達だと認めさせ、友達とは何なのかについても一つの答えを見出すことができた。

【補足事項】

この小説では都合上森川らについてしか語れなかったが、それ以外の登場人物や物語全体についても取り上げておきたいことが多いので、ここで解説する。

まず、視点人物となる人は、激しさに違いはあれど皆一様に自己嫌悪意識を持っている。そして同時に、他者も嫌っている。この傾向は今回詳しく取り扱った森川に限ったことではない。第二章の羽生田も、その他の章の者も、特に自分、そして集団をつくる人々に対して、表立ってではないが軽蔑している。このことについて、第四章で視点人物の戸井が、大人になった中村さんから奇妙な縁で次のように指摘を受けている。彼女曰く、人は自己愛しか上手く成り立たない生き物である。そして自分と何かを共有している者同士だからこそ友情もまた成立するのだ。だから自分のことを好きではない人

は、他人を好きになることもできず、結果として友達ができないのだ。この説は確かに友達のできない彼らの状況と矛盾せず、問題点をうまく説明できていると言える。

そしてここで一度話題を変えるが、今作を通して大きなテーマとなっているのは、次の二つである。一つは、友達とは何か。もう一つは、友達ができない人はどうすればいいのかだ。これらについて、章を通じて各場面に応じて少しずつ明かされていくわけだ。独りぼっちの登場人物自身が悟ることもあれば、前述のように中村さんや保険医が語ったりすることもある。

もう一つ、今度は「秘密基地」の存在意義について解説する。秘密基地と呼ばれる部屋は、すでに述べた通り、「墓場野球同好会」の部室だ。保険医が大学一年生の時に、当時大学四年生だった中村（中村さんの父）とともに加入し、やっと部員が一人から三人に増えたサークルで、保険医の大学卒業に伴い部員がいなくなった後もひっそりと存続し、部室も保険医が管理していた。保険医がその部室を残した理由はすでに述べた通りだが、実際に強引にはあるが三〇年もの年月をかけて部員集めに成功した。だが、誰を新入部員として招くか、すなわち誰に秘密基地を与えるかは、保険医が決めているようだ。その判断要素は、独りぼっちであること。保険医がそうでないと判断した人、つまり友達に恵まれている人には、たとえ秘密基地に興味を持たれても『君には秘密基地は必要ない』と存在を明かすことを含めて断っている。もともと独りぼっちに大学内の居場所を与えることを目的としているため、いわば独りぼっちにとって聖域のような場所を、いわゆる「リア充」たちに明け渡すわけにはいかず、また友達がいる人は友達との輪の中という居場所を大学内にすでに持っている、そのような人に秘密基地が要らないのは当然である。

だが秘密基地を残した目的はそれだけではない。当時大学一年生だった保険医が間章で語っているが、独りぼっちでいられる居場所を得たぼっちは、そこで独りぼっちで過ごすうちに、次第に人が恋しくなり、勝手に出ていく。それこそが保険医の真の狙いである。つまり、独りぼっちでしか生きられない人に、大学という集団社会のストレスから逃れて落ち着ける場所を与えることで、冷静に自身の現状を見極めさせ、孤独と向き合い、他人と向き合う覚悟を養う時間を与えるということだ。秘密基地はあくまでそのための一時避難場所に過ぎないのだ。

長々と独立した話を三つしたが、いよいよこれらをまとめていく。その終着点こそ、この物語全体の構造についてである。この物語は、自分を嫌い、他人を嫌い、集団を嫌い、孤独を嫌う、どうしようもない独りぼっちたちが、大学という集団社会のストレスから逃れて落ち着ける場所、すなわち秘密基地を与えることで、一人で冷静にじつくりと自身の現状と向き合い、孤独と向き合い、他人と向き合う覚悟を養い、ひいては誰もが意識せず手にしている「友達」を作るまでの、非常に痛々しく地道で壮絶な戦いを描いた物語なのである。

しかし彼らの戦いは完勝とはいかなかった。というのも、秘密基地を得た者たちは皆最終的には歴代の秘密基地保持者たちや中村さんという仲間を得ることができた。だが

一方で、物語の第五章で大学講師の森川が語るのだが、彼らは結局それ以上に友達関係の幅を広げることができず、結果的にお互いすぐに顔を突き合わせられる大学周辺で就職し、そこから離れずに暮らすことになってしまった。しかしそれでも、大学という物理的な空間としての居場所と、友達という精神的な居場所を得て、破滅することなく痛々しくも立派に生きることができたのである。

【彼らの「孤独感」について】

彼らが内心に秘める「友達（理解者）が欲しい」という感情は「誰も自分のことをわかつてくれないが、一方で誰かわかってくれる人がいるはずだと考えている」に該当するととれる。一方で、彼らが友達という存在に対して「ばばば無縁の存在として認識し、群れている人々を軽蔑する意識がある点に注目すると、「誰も自分のことを理解してくれないのは当然だ。同様に自分も人を理解できないのだから、人を信用せず、周りにだけ人がいても心を閉じたままにする。」という点に近い。いや、特に森川と羽生田は、よく見てみると最初は友達という存在そのものについてよくわかっておらず、むしろ自分は友達そのものを必要としない、とすら考えていた。ただ周りはそんな自分に対して『なんで独り独りしているの？』と蔑んでいるに違いない、と考えていた。

以上のことから、森川や羽生田の最初の孤独感とは、B型とC型の両方の孤独感を併せ持つ、あるいは両者の中間的な孤独感であると言える。そして最終的に行き着くところは、やはりD型なのではないだろうか。中村さんが「自分と何かを共有している者同士だからこそ友情もまた成立するのだ」というように、彼らは独りぼっち同士で共感しあい、ぼっち仲間を形成していった点に、D型の「同感はできなくても共感はできると考え」ている特徴が当てはまるからだ。

森川や羽生田をはじめ、視点人物たちは基本的に大学入学時から友達ができないことに悩んでいた（例外あり）。そして友達を作って群れている人々を嫌っており、そうした人々が集う大学内にも居場所がなく、自宅に引きこもることは抵抗を感じていた。つまり、物理的居場所も心理的居場所もない時期がしばらくあったのだ。そんな彼らに、保険医は秘密基地を与えた。これにより、大学にいてなおかつ堂々と独りぼっちでいられる空間を得、仮にはあるが両者を満たすことができたのだ。しかしそこで過ごすうちに、その場所の不完全性と自身の課題に気付く、秘密基地で両居場所を満たすことに欲求不満を覚え、最終的に数少ないながらも自らの手で友達を作り、秘密基地を放棄した。彼らが新たに得た両居場所は極めて限定的な範囲にしかならなかったが、それでも秘密基地と比べて永続的なものであり、長期的に孤独感を和らげることに成功したと言えよう。

第三節 三島由紀夫『金閣寺』

【あらすじ】

幼い頃より吃音を抱えていた溝口(「私」)は、父の死をきっかけに京都金閣で住み込み修行をしながら学校に通うようになる。金閣の不思議な魅力に心惹かれつつも、今一つそれが何なのかつかめず、いつかその正体を理解し完全に自分のものにしてやろうと考えた。しかし数少ない友の死や、人生についての悩み、さらに老師の住職らしからぬ世俗的行為を目撃したことなどをきっかけに、金閣に放火して焼失させようと企む。ある日ついに決行、自身もその炎に包まれて死のうとしたが叶わず、山の頂まで逃げてそこから燃え盛る金閣の煙火を見て、これから生きていこうと決心する。

【①・主人公(視点人物)】

溝口。名前不詳。一人称は「私」。京都府舞鶴の東北、日本海に面する岬の出身。体が弱く運動音痴で、加えて吃音を抱えていたため、幼い頃から周りの子たちからかわられていた。ただし英語が得意で、英語で話す場合はどまりなく話すことができる。

【②・①の置かれている状況】

この物語においては「現在」とする期間がかなり長い、主に舞台となるのは「私」が高校生〜大谷大学予科・本科生のおよそ六年間である。友達は極端に少なかったが高校でも大学でも一、二名ほどいた。金閣の美の正体を追究している。

【③・①が孤独となった原因】

吃音のためうまく自己表現ができない。そのせいで幼い頃からかわられていた。やがて人は自分の吃音をあざ笑うものだというある種の固定観念を持ち始める。そして人に理解されないことを逆に誇りに思い、いざ自分が権力者になれば彼らは気持ち悪く口を閉ざさない自分を恐れることになるという妄想を抱く。こうしてますます人を心底で遠ざけた。

【④・①にとつてのキーパーソン】

後述の有為子や鶴川をはじめ、物語全体を通して「私」に深い影響を与える登場人物は何人か存在する。が、その中のトップは、人ではないが金閣だろう。

「私」と金閣との出会いは中学生時代だが、それ以前からも美術書などにより知識としては知っていた。そうして膨らませた想像上の金閣は極めて美しいものであったが、実際に見てみると「大したことない」と感じた。それでも妄想の中の金閣は美しく保たれ、この理想と現実とのギャップを彼は「金閣は本当の美しさを隠している」と解釈した。同時期に戦争で日本各地が空襲で焼け野原になるというニュースを度々目にするようになるが、これによっていつかは金閣も焼けてしまうだろう、そしてその時には自分も死に、金閣と一つになるだろうと考え、ますます金閣に対する憧れを強めていく。しかしついに焼けることなく終戦を迎え、この妄想は実現しなかったが、戦争の悲しさに影響されずに永遠に存在し続ける金閣を覚えて美しいと感じる。

「私」にとって金閣は美と永遠の象徴であり、自己の世界観、すなわち「内界」の中心にそびえ立つ存在であったが、人生において度々意識の中に不意に登場し、彼を動揺させる。しかしその実態は後述の通り彼が思い描いていたようなものではなく、彼はやがて金閣を焼くことを決断する。

【⑤・①をとりまくその他の人々】

まず、有為子という女性がいる。「私」が中学生の時に好意を抱いていた相手である。「私」は早朝の出勤を待ち伏せて彼女に会おうとしたがあしらわれ、以来恨みを抱くようになる。脱走兵と恋仲であることが憲兵にばれ、その静い中で射殺される。

「私」にとって彼女の死はその後の人生にも若干の影響を及ぼし、美しい女性と出会うとすれば彼女と重なって思い出されてしまうのであった。

「私」が金閣の徒弟になってほどなくして出会った鶴川も重要人物である。彼は東京の裕福な寺から金閣へ徒弟修業にやってきた。「私」の同級生だ。「私」の唸音を一切気にしないと言い、また、自分の伝えきれない感情を上手く言葉にして翻訳することから、「私」が当時かなりの信頼を寄せた相手である。「私」と同じ大谷大学へ進学すると、彼にはすぐに別の友達ができ、「私」はしばらく大学で孤独になってしまう。その後柏木と仲良くなった「私」にその仲を友達として忠告したが、間もなくトラックに轢かれて亡くなってしまふ。後にその死に自殺の疑いがかかる。

金閣の住職である田山道詮和尚は、「私」の父の知り合いであり、父の死後に「私」を金閣に徒弟として受け入れた人物である。「私」からは「老師」と呼ばれている。過去に女遊びをしていたり、煙草が好きだったり、ぜい肉がついていたり、その職業に似つかぬところがあり、「私」からも不思議がられていた。

柏木は、「私」が大学で鶴川以外にできた初めての友達である。内翻足を抱えており歩く動作がやや不器用で、それを恥じているが、同時にそれが自分の重要な要素であることも自覚している。過去に女性から告白を受けたこともあるが、自身は女性から決して愛されないと信じており、その女性からの愛もついに断り通した。しかしその経験から、人は現実のものに対して妄想の中で無限に膨らんだ欲望を密かに向けるものだという心理を獲得する。これに従って、女性から愛されたいという自身の欲望も、女性が自分を愛するという感情も、どちらも受け容れたふりをする事ができた。彼は女性から気を引くために内翻足を利用してわざと痛がるような真似をすることがあり、このような生き方は同じく唸音という障害を抱える「私」にとって新鮮なものであり、参考になるものであった。平気で嘘を演じる彼にむしろ親近感を増幅させた。

【⑥・物語の経過・展開】

(一)「私」が誕生。家は京都府成生禪の寺の住職をしている。

(二)舞鶴東郊の叔父のもとに預けられ、東舞鶴中学校へ通う。

- (三) 中学一年生の夏休み、実家に帰省したある日、家族で並んで寝ている際、家に泊まっていた親戚と母が隣で性交渉をしているのを目撃。父はそれを知りながら「私」の目をふさぎ、一連の出来事をなかったことにしようとした。
- (四) 好意を寄せていた有為子が憲兵に射殺される。
- (五) 翌年春休み、父に連れられて金閣を初めて訪れる。
- (六) 父の死。遺言により、金閣の徒弟となり、東舞鶴中学校を中退して秋学期から臨済学院中学校へ転向。また、同じく徒弟修業に来ていた鶴川と出会う。
- (七) 五月、鶴川と京都南禅寺に行く。天授庵にて長振袖を着た女性が陸軍士官に茶を勧め、そこに自分の乳液を注ぐのを目撃する。
- (八) 父の一周忌の前日、母が金閣へ訪ねてくる。母から故郷の寺がすでに他の人の手に譲られたことを知る。そして将来的に和尚の後を継いで金閣の住職になることを目指すことを奨められる。
- (九) 終戦。京都はついに空襲に遭わず、「私」も金閣も無事だった。
- (一〇) 冬のある日、外人兵と連れれの女が寺見物する中で二人を案内する。二人は途中で口論を起し、男が女を地面に倒して「私」にその女の腹を踏ませる。
- (一一) 老師が「私」を大谷大学へ進学させると告白する。
- (一二) (一〇)から一週間後、(一〇)の事件が寺で噂となる。鶴川が「私」に真相を問うが、「私」は否認する。
- (一三) 「私」が大谷大学予科へ進学する。
- (一四) 「私」が柏木と友達になる。
- (一五) 「私」、柏木、それに一人の女性と三人で交遊する。柏木が一芝居打って女性を惹きこむ。
- (一六) 「私」と柏木が大学を休み、女性二人も加わって嵐山へ遊びに行く。「私」はそのうち片方の女性と親密になり、長い接吻を交わすまでになるが、そこで「私」の中に再び金閣の幻想が現れ、その女性を一時的に意識から追いやってしまう。そして、恋愛という営み(『人生』と、金閣『永遠』とは、両立不可能であることを悟る。
- (一七) 晩、鶴川の死が知らされる。以降、鶴川への供養として、柏木とも女性とも以前ほど親しくせず孤独になる。
- (一八) 大学二年生になる。柏木から尺八をもらい、練習する。
- (一九) 五月、尺八のお礼に、柏木の要望で寺からカキツバタの花とトクサを盗んで持ってくる。柏木がそれで生け花を作ると、そこに(七)で見た女性がやってきて、柏木と口論を始め、その後、「私」とその女性が親しくなる。女性が「私」に乳房を見せると、そこでまた金閣が想起された。このことから金閣も乳房も、どちらも表面上は美しいが実態は闇であると悟る。そしてまた金閣が自分を人生から遠ざけたように感じ、いつか金閣の存在を自分のコントロール下に置き、自分に干渉してこないようにすると誓う。

(二〇) 正月、「私」は老師が新京極で女性と交遊するのを目撃してしまう。秘密の交遊のあとをつけてきたと勘違いした老師から帰宅後に叱責を受けると思われたが、一切なかった。

(二一) 老師の叱責がないので、「私」は試しに、毎朝届ける朝刊の中に祇園の芸子の写真をはさんで渡す。これで老師が今度こそ自分の偽善を白状したうで叱ることを期待したが、翌朝その写真が「私」の引き出しに返却されていただけで、やはり何事もなかった。

(二二) 「私」が学業をこれまで以上におろそかにするようになる。成績も席次も大幅に落ちた。

(二三) 大学三年の一学期終了後、「私」が学業と接心の怠慢で老師から叱責を受ける。

(二四) 一月、老師から「かつてはお前に金閣の住職を継いでもらおうと思っていたが、もうそんな気はない」と告白される。

(二五) 「私」が柏木から三〇〇〇円を月一割の利息で借り、出奔する。行き先は決めていなかったが、途中、建勲神社でおみくじを買い、『旅行一凶。殊に西北がわるし』と出たので、あえて西北方向の西舞鶴由良に行く。日本海に面する荒涼な海岸を歩きながら、『金閣を焼かなければならぬ』と考える。

(二六) 出奔して三日後、宿泊していた小宿の者が「私」を怪しんで警察を呼び、出奔が発覚して警察に保護されて寺まで送り届けられる。

(二七) 大谷大学予科を修了。成績は悲惨だったが、落第制度自体がなかったため無事修了し、本科へ進学。

(二八) 五月、柏木に利子合わせて五一〇〇円の返済を迫られる。「私」があくまで黙り通していると、「来月になったら何としても取り返す」と宣言される。

(二九) 六月一〇日、寺に柏木がやってきて、老師に金の返済を要求する。金は老師が支払い、「私」に今後同様のことがあればもう寺には置けないと忠告する。その後「私」が柏木に会うと、鶴川が生前に柏木に送った手紙を見せられる。その文面から、鶴川は自殺したのではないかと読み取った。

(三〇) 六月十五日、老師から授業料等で合計四三〇〇円を渡される。

(三一) 六月十八日、授業料を持って北新地へ行き、初の女遊びをする。そこでまり子という遊女と親しくなり、翌日も情事を交わす。

(三二) 数日後、寺内で老師の全く動かない姿を見て、「私」は老師とはすでに別々の世界に在るのだと感じる。

(三三) 七月一日の晩、老師の知人である福井県龍法寺住職の桑井禅海和尚が金閣に訪れる。「私」と和尚がしばらく話をし、和尚からは「私」は真面目で平凡な学生に見えると言われ、『私を見抜いて下さい』と言うと『みんなお前の面上にあらわれている』と返される。

(三四) その日の晩、金閣への放火を決行する。そこで一緒に死のうと考えていたが、三階の究竟頂に入れなかったことから、金閣に拒まれていると感じ、逃走する。左大文字

山の頂まで駆け登り、金閣から渦巻く煙と空高く上る炎を眺めながら煙草を吸い、生きようと思った。

【⑦・⑧を通しての①の心境・信条の変化】

物語を通して「私」に大きな影響を与えたものの一つが、友達存在である。彼が吃音のために人からかわれ、誰も自分のことをわかってくれないことを理解し、それに対して逆に誇りを感じていたことはすでに述べた。成長してからも彼が人から好まれるタイプではなく自身を嫌う人も多いということは、彼の金閣での生活の描写からよくわかる。ところが鶴川が初めて彼の対人関係の固定概念を打ち破り、人と親しくしようとしないうわげではなく、彼自身もそれを理解していた。だから大谷大学予科へ進学後、鶴川が別の友人を作った際は、その仲を邪魔しないように自らフェードアウトしていった。そして彼も鶴川の代わりに一人くらい友達を作ろうとする。こうしてできた友達がいがられようとする柏木は、真正直で誠実な鶴川とは対照的な存在として彼の目に映っただろう。そのわざと悪を実践する姿勢には心理的に距離を置きつつ、同時にある種の憧れも抱いていた。この正義と悪のはざまでは彼は動揺する。やがて金閣を焼くことを決断した彼は、老師にいたずらをしたり、遊女と遊んだりといった「悪」を実践するのだった。

もう一つ「私」に大きな影響を与えたのが、金閣に象徴される「美」なのだろう。妄想の中では美しいのに、実際に見てみるとその美しさを感じられず、また妄想の中に戻ると輝きだす。そのなかなかなかむことのできない不思議さがかえって彼を惹きつけた。しかも彼が現実世界で世俗的な欲望をあらわそうとすると彼の心に出現し、その実現を妨害しようとしてくる。だからその美の正体を理解し、また金閣の呪縛を乗り越える必要があった。しかし彼が追い求めたものは彼の理想の形を伴っていないことを段々と理解してゆく。彼が思っている以上に、金閣も世間も理不尽過ぎた。それを彼がはつきりと感じ取ったのが、(二〇)である。この事件を通して、彼はまず老師に失望し、さらにその失望が金閣や世界にも及んだのだ。それまであれほど憧れていた金閣を支配しているのは老師である。住職という、徒弟たちの手本となる立場でありながら、女遊びという極めて世俗的な文化をたしなみ、しかもそれを知られても懺悔しようとも認めようとしないうわげもない。金閣はそんな人のものなのだ。また、金閣は彼が女性を抱こうとしたり、女性の乳房を見たりする度に、幻想の中にあられて、それに関心を持つことを妨害した。だがこれが悪や欲望に対する警告になっていったかといえばそうではない。現に彼が外国人兵に命じられて女性の腹を踏んだ時も、それについて懺悔をしなかった時も、金閣はあらわれて警告することがなかったのである。おそらく彼はそのことに気付いたのかもしれない。つまり彼が追究していた金閣は、現実には都合よく彼を支配しようとしていただけなのだ。それは彼が信奉したいと思う形ではなかった。だからこそ、

金閣を焼いて、幻想の中の金閣を胸に抱いたまま心中しようと考えたのではないだろうか。結果的にはそれすらも叶わず、この世から消えゆく金閣を高台から見下ろし、ついにその呪縛が解けたと感じ、改めてそんな世界で生きてゆこうと考えたのだろう。

また、井迫洋一郎『三島由紀夫「金閣寺」研究』*によると、「私」にとつては金閣を焼く行為そのものが、自身の理想で固められた「内界」と決別して現実の社会すなわち「外界」で生きていく彼の意思表示であったという。この考えは日本文学の研究者の間では広く一般的らしい。

【彼らの孤独感について】

「私」が人から理解されないことに誇りを感じていたことから、「人と理解・共感」はできないと考えているとらえられるだろう。個別性に関しては、どのように考えているかはつきりとわかる描写は少ないものの、少なくとも皆同じだと考えてはいないようである。両親といる柏木といる老樹といる、人を内心で侮蔑していることが多いが、大学で自身と同じように障害を抱える柏木と友達になろうとしたり、時には柏木と熱く議論を交わしたり、老樹の不祥事を目撃した際はいつかそれを白状してくれるだろうと期待したりと、彼らと全く理解しあおうという気がないとは言えないし、自分だったらこうすると考えていることを人にも期待するあたりは個別性に気付いていないともとれる。

各登場人物と最後に関わったところを見てみると、柏木とは議論をして意見の一致を見ているが、老樹とは自分が全く別の世界にいると確信したところで終わっている。つまり、人によって態度や考え方が違うため、個別性や理解・共感の面で彼がどう考えているか一概に捉えることは非常に難しいのである。しかし、彼が金閣に放火する直前に、桑井和尚と話をし、『私は完全に、残るくまなく理解されたと感じた』とある。何を理解されたと感じたのかにもよるが、ともかくも彼は最後は人から理解されたと感じることができた。また、老樹と自分が違う世界にいると考えたことから、人の個別性に気付いたと判断できる。故に、金閣で修行する前はC型、それからはB型とC型とD型とが状況に応じて激しく行き来し、最後はD型になったと考えられる。もし物語に続きがあれば、さらに解釈が動かされる可能性は大いにあるが、オチとしてこれであるならばこの解釈が精一杯であろう。

金閣の徒弟になる前の「私」は、友達がほおらず、作ろうとしなかったことから、物理的居場所が非常に少なかったと言える。一方、人に理解されないことを誇りとしていたので、その意味では心理的居場所には自分の中に固持していた。金閣での生活が始まってからは、鶴川や柏木という友達を得ることができた。彼ら以外では、田山和尚は「私」を将来の後継者として期待を込めて育ててくれたようだが、特に金閣の他の徒弟からは良く思われていなかったようなので、限定的ではあるものの、両居場所を獲得したのだろう。物語後半では、彼の勉学に対する意欲などにより、和尚の失望を買っていたので、金閣の生活における物理的居場所としての機能は弱まった。

また、「私」にとつて真に理解したい・してほしい存在は金閣である。戦争期は自分と同じ世界にいと感じていたが、終戦後はそうではないと感じ、その後もその存在が彼に大きく影響を及ぼした末、最後は同じ世界にはいないと考えて燃やした。この意味で彼の心理的居場所が失われたと言えるのではないだろうか。しかし前述したこの物語における研究界限での通説から改めて考えてみると、金閣を燃やした行為によつて彼が「内界」から「外界」へと生きる世界を変えようとしたのであれば、金閣を象徴とする「内界」の心理的居場所を放棄する代わりに、現実の世界すなわち「外界」という心理的居場所を新たに獲得しようとしたわけなので、一方的に失ったわけではないということになる。

第四節 大江健三郎『セヴンティーン』

【はじめに】

この物語は、岩波書店『大江健三郎自選短篇』などに収録されている『セヴンティーン』と、その続編である『政治少年死す』の二つで構成されている。もともとはどちらも文藝春秋新社『文学界』で連載されていたものの、発表後ほどなくして書籍として出版された前者に対して、後者は出版社への脅迫などにより長らく書籍化がなされず、二〇一八年七月になってようやく講談社『大江健三郎全小説3』に掲載されたことで書籍となった。つまり後者は前者に比べて流通期間が極めて短く、多くの人に読まれたものと言えるのが疑わしかった。しかし、どちらも話題になったのは事実であり、後者も正式な形で出版ではないものの海賊版が流通し、それなりに読まれていたようなので、今回は両者の物語の境目を明示しつつ一つの物語として取り扱い、考察する。

なお、後述の「おれ」が入党した組織について、『セヴンティーン』では「皇道派」と表記されているが、『政治少年死す』では「皇道党」とされていることが多いため、この考察の中でもそれに準じ、前者では「皇道派」、後者では「皇道党」と表記する。

【あらすじ】

「おれ」は一七歳になった日、テレビのニュースから話が飛んで姉と口論になり、言い負かされそうになった悔しさで思わず怪我させてしまう。家庭での居場所を見いだせず、学校でも気味悪がられ、対照的な優等生たちを心の中で負け惜しみに軽蔑することしかできない自分を、どうにもできず悩んでいた。しかしクラスの人気者の新東宝から、極右勢力・皇道派の演説に声援を送るサクラとなるよう依頼され、そこで演説者の逆木原国彦と出会う。逆木原の演説は自身が日頃から抱いていた不満の気持ちと共鳴し、思わず拍手喝采を送り、批判的だった傍観者をも威圧して退散させた。正式に皇道派に入った彼は、家庭でも学校でも名誉を取り戻し、激しい闘争へと突き進んでゆくのであった。（『セヴンティーン』完）

（『政治少年死す』）左派のデモ隊との衝突が繰り返されるが、皇道黨員たちは、幹部たちがいっこうに政権掌握に動き出さないことに不満を感じ始めていた。そんな中、

「おれ」は同じ右翼の中でも独特な考えを持つ安西繁に関心を持ち、親しくなる。この人とともに日本を変えようとも考えたが、結局互いに別の道を進むことになる。一方、八月の終戦記念日に、広島で左翼と衝突した後、彼は皇道党を批判したとして作家の南原征四郎を脅迫するが、南原の予想外の意志の強さに怯み、引き揚げる。安西との結党も叶わず、自分で日本を変えることもできず、無力感に包まれる日々の中で、彼は天皇への盲目的な忠心と、いずれ左翼に反撃されるかもしれないことにおびえる、二つの「内なる自分」に気付く。そして天皇に自分の命を捧げようと考え、左派政党的委員長を演説中に刺殺して死刑になろうとしたが、判決は少年鑑別所行きであったため、独房の中で自殺した。

【①・主人公(視点人物)】

「おれ」。本名不詳。父、母、兄、姉、そして彼の五人家族のおそらく末っ子。

【②・①の置かれている状況】

(『セヴンティーン』) 高校二年生。一七歳になったばかり。家庭でも学校でも孤立気味で、自分に対しても周りの人に対しても激しく軽蔑している。当初は左派寄りの考えで、自衛隊の存在に反対していたが、後に極右勢力に入る。

(『政治少年死す』) 高校二年生。前作から数か月経過している。極右勢力「皇道党」のメンバー。

【③・①が孤独となった原因】

家族、特に両親と兄が、「おれ」に関心を向けない。姉以外は彼の誕生日にすら気付かず、「おめでどう」の一言も言ってくれなかった。さらにその姉とも、喧嘩をして怪我をさせたことで関係が悪化する。

学校では、最初は優等生としてクラスの中心部にいた。だが物理の授業で先生から宇宙の果てについての話を聞き、発狂して気絶し、それ以来周りから気味悪がられるようになってしまう。

【④・①にとつてのキーパーソン】

面物語を通して最も大きな影響を与えたのは、天皇である。「おれ」にとつては皇道派入党以来、常に信仰の対象であり続けた。実際に「おれ」と会う描写はなく、直接的に「おれ」に何かをしたことがあるのか定かではない。

【⑤・①をとりまくその他の人々】

主な登場人物としては、「おれ」の家族、逆木原国彦、安西繁がいる。まず「おれ」の父が挙げられる。本名不詳。彼は「おれ」とは別の私立高校の教師をしている。自称『アメリカ風自由主義』者で、生徒の生活や問題についてほとんど干渉

しない姿勢を取っている。それは息子である「おれ」に対しても同じで、姉と喧嘩を始めても見向きもしなかった。しかし「おれ」が怪我をさせると、「お前はもう姉に将来の大学の学費を払ってもらえないから、学費の安い東大に行くか就職するかしかない」と言う。

兄は、東大教養学科卒のエリートで、テレビ会社で働いていた。本名不詳。しかし「おれ」が一六歳の年の秋に一週間の休暇を取って以来性格が変わり、家では趣味にか関心を向けないような人になってしまった。当初は父とは対照的に面倒見の良かった彼を「おれ」も深く慕っていたが、この変貌ぶりには失望、これによって「おれ」は家庭での安定的居場所を失った。

姉は、自衛隊病院に勤務する看護師である。本名不詳。強度の近眼で、読書家。職業柄、自衛隊の必要性を感じている。やや左翼寄りの「おれ」とふとしたことで口論になり、さんざんに言い負かすが、逆上されて怪我を負わされる。

新東宝は、「おれ」のクラスメイトの男子である。本名不詳。クラスの優等生グループの一人で、変態キヤラダが人気が高い。彼が「おれ」に右翼集団・皇道派の演説のサクラを依頼したことで、後述の通り「おれ」の運命を大きく変えるきっかけを作る。彼自身はもともと大して皇道派に心酔していなかったが、「おれ」が組織での地位を確立すると、「おれ」の宣伝係となり、「おれ」の伝説を誇張してクラスに広めるようになった。

逆木原国彦は、皇道派の一人である。党内での具体的なポジションは明かされていないが、ある程度の地位はあるようだ。「おれ」らがサクラに訪れた集会で演説していた最中、自ら右派であることを名乗り怒鳴り散らした「おれ」を見込み、入党させる。後日、「おれ」の家族と面会し、「おれ」を党の本部に正式に引き入れることを宣言する。安西繁は、皇道党に所属する黨員である。三五歳で、戦時中は学徒出陣で動員され戦場に行った戦中派である。初登場では「C黨員」と表記されていた。皇道党内で起こった議論の中で「おれ」と親しくなる。後に皇道党を抜け新たな組織を作る。

【⑥・物語の経過・展開】

- (一) 優秀で家族思いだった兄の性格が仕事疲れの影響で激変し、家では趣味にしか関心を示さないような人になる。
- (二) 翌年、「おれ」が物理の最初の授業で、教授から宇宙の壮大さについて聴かされ、感動を通り越して恐怖のあまり気絶し、クラスに醜態をさらす。
- (三) 「おれ」が一七歳の誕生日を迎える。反応したのは姉だけだった。
- (四) 同日、皇太子のニュースを見ている最中に、皇太子や自衛隊の存在価値の是非について「おれ」と姉が口論になる。姉に負けそうになったことで「おれ」が逆上、姉の額を蹴飛ばして怪我を負わせる。父からは「これで東大か防衛大学に入るか、あるいは就職しかお前には道はない」と言われる。

- (五)翌朝、高校に二〇分遅刻して学力テストを受ける。国語の試験終了後、クラスメイトが出来栄えについて話し合う中で、新東宝がテスト内容の独自解釈を披露する。その輪の中に「おれ」を招こうとするが、「おれ」は侮辱されたと感じてその場を去る。
- (六)同日午後、体育の総合実力テストが行われる。八〇〇メートル走の試験で「おれ」が醜態をさらして走る。
- (七)同日放課後、帰宅する「おれ」に新東宝が有給で右派演説のサクラを依頼する。皇道派の逆木原国彦の演説を、「おれ」は最初は冷ややかな目で見ることが、やがて感化される。人一倍の拍手を送ったことで周りから奇異な目で見られるが、その批判の声を圧殺し、逆木原から高く評価される。
- (八)「おれ」が皇道派に正式に入党。他の黨員たちとの交流が始まる。逆木原から特に厚遇される。
- (九)放週間後、逆木原が「おれ」の家族に面会する。家族からも「おれ」の進路について了承される。
- (一〇)「おれ」の学校での立場が良くなり、新東宝は「おれ」の宣伝係となる。
- (一一)「おれ」が逆木原に進められてトルコ風呂に行く。女性との関わりの中で皇道派としての思いが固まり、自尊心が高揚する。
- (一二)「おれ」が逆木原の書庫で天皇関連書籍を読み漁り、皇道派としての決意をさらに固める。
- (一三)五月以降、「おれ」が皇道派青年グループに加わり、左派勢力との闘争が始まり、逮捕と釈放が繰り返される。(『セヴンティーン』完)
- (一四)皇道党内で議論が起こり、安西繁によって収まる。「おれ」が安西に興味を持つ。
- (一五)終戦記念日に左翼デモ隊と衝突し、「おれ」が怪我を負う。
- (一六)テレビで皇道党を批判した南原征四郎を「おれ」が単独で襲撃し脅迫するが、南原はおびえたまま不服従の意を示した。その姿に「おれ」は撤退する。
- (一七)同日夜、皇道党広島支部長が催すキャバレーに参加。「おれ」はそこで女給に童貞を奪われる。
- (一八)東京への帰りの電車の中で、自分のやりたいことやするべきことについて考える。
- (一九)安西が皇道党を脱退する。逆木原が黨員たちの動揺を抑えようと、終戦から間もなく右翼十四人が集団で切腹した話をする。「おれ」は深く感動する。
- (二〇)逆木原の講義後、「おれ」は安西から手紙にて紹介され、芦屋丘農場でしばらく暮らす。農場主の長男の嫁と特に親しくなる。
- (二一)東京に出て安西と会い、今後について話し合う。安西がすでに自分の同盟を作っていること、新たに同盟者が増える度に他の同盟員を除名していることなどを聞かされる。

る。「おれ」は安西の同盟に加わることはできないと考えるが、一方で安西の考えていることを理解し、改めて安西を好きだと思った。

(二二)「おれ」が久しぶりに帰宅。寝床で考えに耽るうちに、自分がいつか左翼に復讐されるのではないかと恐怖する。恐怖と無力感が激しく自分を責めた末、逃れる唯一の手段こそ天皇のための死であると悟る。

(二三)左派政党の演説をしていた委員長を「おれ」が刺殺し、現行犯逮捕される。

(二四)取り調べ。「おれ」の態度は概ね良好で、質問に対して正直に答えたが、回答は係官の予想するものとはしばしば異なり、彼らを当惑させた。

(二五)判決が出る。「おれ」は死刑にはならず、東京少年鑑別所に送られる。

(二六)「おれ」が独房の中で自殺する。

【⑦・⑧を通しての①の心境・信条の変化】

「おれ」はもともとクラスで優等生のグループであったようだが、(二)の事件により、気味悪がられるようになった。すでに(一)の件で兄が自分にかまってくれなくなり、家庭での居場所に満足できなくなっていたし、さらに(四)も重なり、これらによって彼は学校にも家にも居場所を見出せなくなってしまう。常に自己嫌悪と他人に対する劣等感を抱え、それを覆い隠すように心の中で彼らを軽蔑し、自沈の快感に浸る堕落した日々を過ごしていた。彼が他人と一定以上の関係を持つには、まずその劣等感を弱めなければならなかったのだ。それが(七)で実証される。新東宝の誘いを彼は最初は断ろうとするのだが、結局ついていくことにしたのは、新東宝の必死の頼みを受けて、新東宝がクラスで見せる道化の顔からは想像できないほどナイーブな性格であったことを知り、立場が逆転したと感じたことと優越感を覚えたからだ。つまりこの物語、特に『セヴンティーン』においては、「劣等感」と「優越感」が、彼の孤独感を語る上でのキーワードとなっているのだ。彼は皇道派に入党してから大きく変わってゆく。それは「自分は右翼だ」と主張することで自身の醜い部分を他人の目から隠し通すことができ、他人を畏怖させることができたからだ。もうこれまでのように醜態ばかりさらしているおれではないんだ、悪い左翼どもを駆逐して日本をより良い国にしていくという崇高な目標を持つ強い人なんだ、と内外に示すことができたからだ。(二二)で獲得した皇道派の理想は、このようにして彼の自己嫌悪を克服し自身の存在価値を意識するためのよりどころとなっていったのだ。

(二六)までが『セヴンティーン』を通しての「おれ」の心情の変遷だが、『政治少年死す』に物語が移ると、せつなく確立した優越意識が徐々に揺らいでいくことになる。逆木原らが政治の表舞台に立つ気配は一向になく、皇道党内でもそれを不安視する声が増えていく。上層部が動き出さないのであれば脱党して自分たちでやってみようと思える者も増えてきて、その話の中で安西と彼が意気投合する。彼はこの段階ではまだ優越意識と皇道党の正当性意識を高く保持しており、それ故に左翼デモに向かって激しい暴力を振るうなど過激な行動に出ているが、(二六)の事件でその優越意識が崩れ始め

る。彼のすさまじい威圧に、最初は南原はただおびえるばかりだったが、南原はそのあわれな態度のまま不従を宣言した。強い人に脅迫されておびえ、醜態をさらしながらも、自分が正しいと信じたことは曲げず、毅然と言い放つ。怖くても負けないというその姿は、かつての醜い自分ができなかったこととして彼の目に映ったのかもしれない。そしてここで南原を圧倒しきれなかったことは、克服したはずの彼の心の内なる恐怖を呼び覚ました。自分は日本を変えるばかりか、たった一人の男の薄弱な意思を打ち砕くこともできない。逆にこれまで左翼らを攻撃してきたように、いつか復讐されて野垂れ死にするだろう。そう考えた彼は、天皇への忠心を盾にその恐怖から逃れようとする。そんなところに(一九)で逆木原が語った話が飛び込んできた。そこから着想を経てどり着いた考えが、天皇を心底崇拜し、天皇の逆賊の中の大物を殺害して、死刑に処されて伝説になるというものだった。彼は心の中の天皇の存在をますます大きくし、天皇のために死にゆく自分を心の中で美化した。ある日ついに決行するが、彼が未成年だったこともあり、死刑にならず鑑別所送りとなった。それは彼にとつては別の意味での死刑宣告であり、いつか外の世界に放り出されて左派にリンチされるかもしれないという恐怖を将来に残すことであった。さらに暗殺事件の判決が出る直前、係員から姉が病院での職を失ったことを知り、後悔の念に駆られる。彼はこの時、自分の誕生日を唯一覚えていた、家族の中では比較的理理解者だった姉を、怪我させた時以上に、永遠に敵に回したと考えたかもしれない。家庭にも皇道党にも居場所はなく、鑑別所の外は危険地帯。彼はまだ身の安全が守られているうちに、自ら死を選んだ。たとえ「天皇のために」というのが恐怖を覆い隠すための後付けであっても、理由として最も尊大であり、死にやすかったに違いない。この彼の唯一の味方は心の中に描く天皇であり、それ以外にはいなかった。

【彼らの「孤独感」について】

『セヴンティーン』前半、すなわち皇道派に入党する前の「おれ」は、自分の理解者を希求していた。一方で、その複雑な内面を他人に見られることを恐れているようでもある。つまり、「誰かおれをわかってくれ」と思う一方で、「こんな自分を知られたらドン引きされてしまう」とも感じているわけだ。人との理解・共感はできないと感じているのが明らかだが、自身の個別性に関して、前者を見れば気付いていないとみられることになり、後者を見れば気付いているとみられることになる。すなわち、四分類された孤独感のうちB型とC型両方の特徴が組み合わさった状態が、その時点での彼の孤独感なのである。

『セヴンティーン』後半、すなわち皇道派に入党した後の「おれ」は、やや不完全ではあるもののD型に移行していったとれるだろう。皇道派の同志たちは必ずしも彼と同じ方向を向いているわけではなかった。時には彼らから趣味嗜好の違いが原因で罵られることもあったが、前半で姉に対してしたように逆上はせず、彼らと共感できる話題に変えるなどしてうまく付き合っていく術を覚えた。不完全だと言ったのは、同志以外

から罵られるようなことがあれば、ますます凶暴に嘯みつくようになったからだ。彼が所属したのは右派の中でも非常に過激な集団であり、少しでも右派を非難しているとされる発言を聞くと、学校の教師であっても逆木原の名前を出して脅迫した。D型のように、自分とは違う意見を持つ人とも理解・共感しようとする姿勢はあるが、その姿勢を見せる相手は限られた者たちのみであるということだ。

『政治少年死す』ではどうだろうか。やはり皇道党の者とは理解・共感しあい、それ以外の人は排除しようという姿勢に変わりはないが、物語が進むにつれて徐々に孤独感が高まっていく。だがその中身はあまり変わらなかっただろう。(一〇)では、農場主の長男の嫁は仏教徒であり、自分とは宗教が違うにも関わらず、お互いに話し合って理解しようとしていた。安西とは、(一一)で同盟に加わることができないと判断してなおも好感を持っている。これらのことから、『政治少年死す』では概ねずつとD型で居続けたと考えられる。しかしその後の暗殺事件から自殺までの一連の行動が、これまで虐げてきた左派勢力からの復讐に対する恐怖心に突き動かされてのことであることを見ると、この段階では恐怖心とそれをこまかすための天皇への忠心と名誉への欲求で頭がいっぱいになっており、孤独感云々どころではなかったのだろう。

前述の通り、『セヴンティーン』冒頭での「おれ」は家庭・学校双方で居場所を失っており、なおかつ姉との口論に一方的に負けるほど自分の意見も確立されておらず、自分をひどく醜い者として認識し、自分の存在意義を根本的に見失いかけていた。この段階では物理的居場所も心理的居場所もない状態である。だが、自分とは違う世界にいるはずの新東宝に誘われ、逆木原との出会いを果たし、皇道派に入党したことで、運命が大きく好転する。自身の抱える不満を逆木原の演説が代弁してくれたように感じ、この人についていこうと皇道派に入党した。こうして自分の都合の悪い部分は隠し、他人から認識されたい形での自分だけを出す環境を得て、物理的居場所だけでなく心理的居場所をも充実させていったのだ。

『政治少年死す』では、せつかく得た皇道党内での物理的・心理的居場所にやがて満足できなくなり、そこに左派からの報復への恐怖も加わって、ついには暗殺という暴卒へと走る。そうして過激な皇道黨員としての自分を貫くことで心理的居場所を取り戻そうとしたが、求めていた死刑判決は出なかった。これではやがて自分という存在も忘れ去られ、恨みを持った人に襲われて惨めに野垂れ死にするだろうと考えた。さらに姉が病院を辞めたことで家庭での居場所を失ったと感じた。こうして物理的居場所を完全に失った「おれ」は、せめて事件後間もない段階で死ぬことで天皇への忠義を示しつつ伝説になろうとする。いわはこの時の自殺は、最期に自分の内面の心理的居場所を確保するための行動でもあったのかもしれない。

第三章 考察

ここまで、四作品の小説を解説し、要素をピックアップしてきた。わかったことは次の通りである。

まず、四作品の主人公は皆、最終的に友達あるいは尊敬する仲間を作ることができた。物語前半では他人を軽蔑したり、頑なに関心を持たなかったりして、内心で人を自分から遠ざけようとしていたが、他の登場人物との関わりあいの中で、やがて相互に理解しあい信頼関係を築く仲間を持つ方向に動いた。

次に、孤独感の動向を見てみよう。どの主人公も四分類のうちB型あるいはC型から始まり、最終的にD型へとどった。居場所に関しては、現代の二作品では物理的・心理的両面で満たされた形で終わったが、一九六〇年前後(以降「前時代」)の二作品は物理的居場所を失い心理的居場所の獲得を目指した形で終わった。

もう一つ、現代の二作品と前時代の二作品との間に、決定的な相違点があった。それは、物語の展開である。前者では、孤独な主人公が友達を作るまでの成り行きが主軸として描かれ、友達がきたらそこで完結する。対して後者では、それも軸の一つの要素としてはあるものの、それだけにとどまっていない。主人公がいかに生き、己を貫いたかが如実に描かれているのである。『君の朦朧をたべたい』では志賀が山内の死後にその親友と仲直りして共に墓参りするシーンで終わり、『ぼっちーズ』では森川が中村さんと交際を始めるところで終わる。しかし『金閣寺』では「私」が柏木と議論の末意見を一致させてお互いの仲を確認した後、自分の理想を裏切った金閣を燃やす。『セヴンティーン』では「おれ」が安西と話し合い理解し合った後、自分の理想を貫くために暗殺事件を起こして自殺する。このように、後者は理解者を得つつもその後自分の理想を追求して行動を起こし、その非行をクライマックスとしているのだ。

以上のことから考えると、それぞれの時代における青年像が見えてくる。前時代では、自己の美意識や政治観などにおける理想の追求を重視しており、それをある程度共有する者と仲良くするべきだと考えている。さらに、理想は友達よりも優先され、それにそぐわなければ関係を放棄することもいとわず、孤軍奮闘でも自己を貫く姿こそ美しいと思われていた。対して現代では、学校で友達を作り居場所を確立することは幸せな生活を過ごすための絶対条件であり、友達がいない状況は避けねばならない異常事態であるとみなされている。「二人で生きていければ」という憧れは多少なりともあるものの、現実的ではない。しかし「友達とは何か」という根本的な疑問もあり、改めてその存在について考え直そうという試みがある。

なぜこのような変化があらわれたのだろうか。そこには、社会情勢や高校・大学の意義などの変化が大きく関係している。まず、前述したように、高校・大学の進学率は大きく高まった。今や大半の青年が一定の学歴を持つようになった。このことは、高卒・大卒・エリートというイメージが崩壊する結果につながり、よほどの有名大学出身でない限り高卒・大卒という肩書だけでは目立たなくなってしまう。菅孝之『現代史のなかの学生』*によると、『大学進学が大衆化し、学生であるということ、天下国家を論じることもなければ、知的専門分野を我がものとする階級でもなく、多くの青年は十八歳になると、中学へ行くように、高校へ行くように、大学に行くのである。そして、無難に就職するための必要条件としてただ大学を卒業することをめざす。』*とあ

る。この書籍は一九七九年に発行されており、その時代ですらこのようなことが言われているのである。そこから四〇年経った現代ではさらに高校・大学進学率が高まっているので、この傾向がより深く進んでいることは言うまでもない。逆に、かつては学生であることが『天下国家を論じ』『知的専門分野を我がものとする階梯』であった時代があつたということである。金閣の美を追究した末に燃やした『金閣寺』の「私」や、極右勢力による理想国家をつくるために戦った『セヴンティーン』の「おれ」はまさにそれを体現した登場人物である。

話がそれが、高校・大学への進学が普通となった現代では、高学歴という肩書だけでは将来を約束されない。さらに安定しない社会情勢により、将来の見通しが全く立たない世の中になつてしまつた。片桐新自『不透明社会の中の若者たち』*によると、このような社会の中で若者は、『どこに社会の目標を指定すべき』*、なにかわからなくなり、その結果『社会関心を持たず、自分と家族と仲間たちだけの身近な世界に逃げ込む』という選択をすることによつて、精神的不安状態から脱却している**、という。そしてそれによつて、前時代の小説に表れているような「自己の理想」が衰退し、それよりも身の回りの環境が重視され、「友達」の存在に再注目した小説が流行したのではないだろうか。

山崎鎮親『半径1メートルの想像力 サブカル時代の子ども若者』四四ページより、現代の若者は「将来思考」から「現在思考」へと考え方がシフトしており、それは『「将来のために現在を我慢する」という価値観から、「将来が見通せないので現在を楽しむ」価値観』*へという変化だとある。つまり、例えば終身雇用がさほど一般的ではなくなり、親よりも将来の見通しが立ちにくくなった結果、難しい将来よりも今の充実を第一に考えるようになる。その結果、学校で友達を作り居場所を確保することの重要性がより高まつたと考えられる。特に学生に関しては、前時代よりも進学という道がさらに一般的になり、学生Ⅱエリートの卵、学生Ⅲ知識人という考えはもはやなくなつていく。また、同著一二二―一二三ページより、日本の一八―二四歳の男女を対象とした内閣府の調査から、『自分が学校に通うこと』の意義に関する回答選択肢で、「友だちと友情をはぐくむ」が約六六%を示している**とある。さらに、仲正昌樹『ヘリアホ』幻想 ―真実があるということの思い込み― 六九ページで、『大学教員の』あるのかないかわからない』、教養主義的なライフスタイルを「かっこいい」と思つて憧れる人もかなり少なくなつていくであろう**とある。これらのことから、現代の学生は、高校や大学で友達関係を勉学以上に重視している傾向にあることがわかる。つまり、現代の学校という環境は「学びの場」という側面もあるがそれよりも「友達と交流する場所」としての意義のほうが強い。だから『金閣寺』の「私」のように、勉学の知識をもとに美意識や己の存在意義を考えることが現代の学生には少なく、「難しいことはいいから、とにかく友達が欲しい」という考えのほうが現代人にはより受け入れやすいのかもしれない。

1. 学びたいことがあったから。(図3-2「学問」)
2. 就職を有利にするため。(同「就職」)
3. 友人を作るため。(同「友人」)
4. 遊びたかったから。(同「遊び」)
5. 大卒の肩書きが欲しかったから。(同「肩書」)
6. 教員免許等の資格が欲しかったから。
7. 社会に出る前にもう少し時間が欲しかったから。
8. 大学に行くのは当然だと思っていたから。
9. その他

図3-1 『大学への入学目的は何ですか』 選択肢*9

『不透明社会の中の若者たち』では、大学入学目的の時代的变化について述べられている。著者は関西を中心とした私立・国立大学合わせて六大学、および複数の短期大学の学生に五五問のアンケートを取り、その集計結果および考察を同著に記載している。なお、年によって調査した大学は多少変化しているらしい。

次の図は、『大学への入学目的は何ですか。あてはまるものすべてに○をして下さい。』という質問の選択肢(図3-1)と、回答者の多かった五つの選択肢の一九八七年～二〇一二年の集計結果の推移のグラフ(図3-2)である。なお、選択肢は二〇一二年のアンケートによるものである。それ以前のアンケートでもほぼ同じ選択肢が設けられていたようだが、『その他』の項目に数多く書かれた意見は次の回のアンケートで新たな選択肢になるなど、多少の選択肢の変化はあったようだ。同著ではこの年のアンケート内容のみが参考として記載されており、それ以前のアンケートの選択肢を知ることが困難であるため、こゝでも二〇一二年のものしか記載しない。

これらを見ると、一九八七年では、入学理由として「学びたいことがあった」という回答は六〇%を超えるが、二〇一二年では四五%ほどである。一方「就職を有利にするため」「大卒という肩書が欲しかったから」という回答は概ね増加傾向にある。今回取り扱った小説では、高校や大学を出た後のことについてはむしろ前時代のもの主人公のほうが気にしており、現代の小説では「将来安定のために大学に行く(行きたい)」と

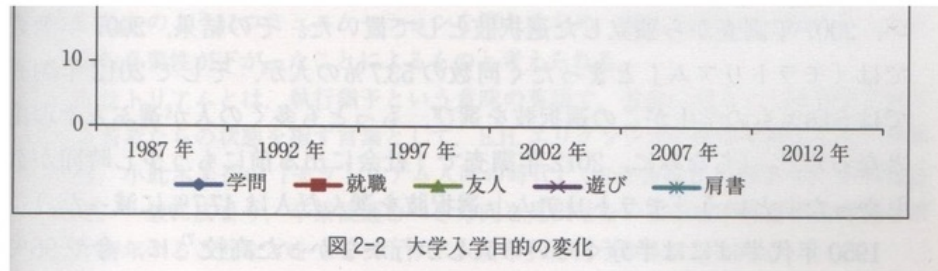


図 2-2 大学入学目的の変化

いったことを考えている登場人物は出てこず、一見矛盾しているように思われるかもしれない。しかし前述した、現代の将来の不透明性と、身近な世界のことだけを考えると生きた若者の傾向、そして主人公がそれぞれ高校二年生と大学一年生（四年生）であることを考えれば、まだそのタイミングでは将来を考えていないことは納得できる。しかし意外だったのは、「友人を作るため」と回答した人が減少傾向にあることだ。これは、同著で『現代の日本においては、平均以上の生活をするためには、大卒という肩書は当然持っていなければならない「エントリー・チケット」（入場券）のようなものになっている』*1と述べられていることから、友達の重要性が下がったわけではなく、就職や肩書を重視する人が増えたために相対的に下がったと考えられる。また現状を重視する現代の青年においては、友達は極めてありふれた存在であり、故にあえて大学入学の目的として挙げる人が多くなかったからではないだろうか。むしろだからこそ、友達がいないのは異常極まりないことであり、そんな孤独な人が友達を獲得するという内容だけでも十分に一つの物語になるのだろう。

おわりに

考察は以上であるが、内容が不十分であったところや、研究によって新たな疑問点がいくつか出てきた。

まず、今回取り扱った小説は、孤独な男子を主人公としている。女性視点で描かれているのは『ぼっちーズ』の第三章のみであり、その章については触れなかった。女子学生の孤独が男子学生とはどのように異なってくるのかをしてみると面白そうである。

次に、主人公を取り巻く他の登場人物について、特に親の描写で気になることがあった。前時代の二作品では、親は主人公に軽蔑されていた。対して現代の二作品では、そのような描写は見当たらない。親がほとんど登場しない『ぼっちーズ』はともかく、『君の臍臓をたべたい』では主人公を見守り応援するなど、良好な関係性である。この違いはいついかなる何故なのだろうか。そこに時代的な関係性があるのかもしれない。

また、もう一つ、現代小説と前時代小説の違いとして、主人公と女性の関わり方の違いが確認された。前時代では主人公を脱童貞へと導く女性がしばしば登場し、主人公はその経験によって己の美意識や考え方を変化させあるいは固めてゆく。一方で現代小説ではそのような描写はない。『君の臍臓をたべたい』で山内とホテルで一泊した志賀でさえ、同じベッドで寝るまではしたもののそのまま何もなく一夜を過ごした。つまり、現代小説では男子が学生段階で同級生の女性に強性的欲求を抱く描写はあまりなく、あくまで主人公を孤独から救い出し友達環境へと導く天使のような存在として描かれる傾向がある。このあたりは、それぞれの時代におけるジェンダー論の視点などを交えながらより深く研究していくことが求められる。

〈テキスト・参考文献リスト〉

はじめに

- * 1 『これまでの本屋大賞 2016年本屋大賞(第13回)・2015年11月〜2016年4月実施』(NPO 本屋大賞) 最終閲覧日: 二〇一九年十二月一日
URL: <https://www.hontai.or.jp/history/>
 - * 2 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇一四年)
 - * 3 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇一四年)『せいねん【青年】』より抜粋
 - * 4 『平成21年度文部科学白書 第2章 現下の教育課題への対応』教育の機会の確保と質の向上』(文部科学省) 最終閲覧日: 二〇一九年二月一日 URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200901/detail1/1296733.htm
 - * 5 『平成21年度文部科学白書 第2章 現下の教育課題への対応』教育の機会の確保と質の向上』(二〇一〇年八月二十五日)より『図表1.2.3.8 高校進学率』を抜粋 最終閲覧日: 二〇一九年二月一日
 - * 6 『資料4・1 学士課程教育の現状について(基本データ)』(文部科学省、二〇一九年六月三日)より『5.1.8 歳人口及び高等教育機関への入学者数・進学率等の推移』を抜粋 最終閲覧日: 二〇一九年二月一日 URL: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/ai_jf/_icsFiles/afiledfile/2019/06/07/1417864_001.pdf
- 第一章
- * 1 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇一四年)
 - * 2 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇一四年)『ソビエト【孤独】』より抜粋
 - * 3 『孤独な心: 淋しい孤独感から明るい孤独感へ』(落合良行、サイエンス社、一九九九年) 二七〜二八頁
 - * 4 『孤独な心: 淋しい孤独感から明るい孤独感へ』(落合良行、サイエンス社、一九九九年) 二七〜二八頁
 - * 5 『孤独な心: 淋しい孤独感から明るい孤独感へ』(落合良行、サイエンス社、一九九九年) 六四〜六五頁 『図7 孤独感の規定因の構造と4類型の特徴』を参考に作成
 - * 6 『大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連』(浅木海音、奥野誠一、立正大学心理臨床センター、二〇一八年三月二二日) 最終閲覧日: 二〇一九年二月一日
URL: http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11286/6581/1/bullletin6_p021_asagi_etal.pdf
 - * 7 『大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連』(浅木海音、奥野誠一、立正大学心理臨床センター、二〇一八年三月二二日) 最終閲覧日: 二〇一九年二月一日
URL: http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11286/6581/1/bullletin6_p021_asagi_etal.pdf

第二章

第一節

『君の臍臓をたべたい』（住野よる、双葉社、二〇一七年）
引用箇所は全てこの書籍による。

第二節

『ぼっちーズ』（入間人間、KADOKAWA、二〇一五年）

引用箇所は全てこの書籍による。

*1 『ぼっちーズ』（入間人間、アスキー・メディアワークス、二〇一〇年）

第三節

『金閣寺』（三島由紀夫、新潮社、一九六〇年）

Wikipedia『金閣寺』 最終閲覧日：二月一日 URL:<https://ja.wikipedia.org/wiki/金閣寺>（小説）

注釈なき引用箇所は全てこの書籍による。

『金閣寺』観念構造の崩壊』（佐藤秀明、『相山国文学』掲載、一九九五年）

*1 『三島由紀夫「金閣寺」研究』（井迫洋一郎、『國文學』掲載、関西大学国文学会、二〇〇七年）

『金閣寺』観念構造の崩壊』（佐藤秀明、『相山国文学』掲載、一九九五年）

第四節

『大江健三郎全小説3』（大江健三郎、講談社、二〇一八年）

引用箇所は全てこの書籍による。

『大江健三郎「幻の作品」が57年ぶりに刊行される理由』（山口和人、最終閲覧日：二〇一九年二月一日 URL:<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/55161>

第三章

*1 『現代史のなかの学生』（菅孝之、思想の科学社、一九七九年発行）

*2 『現代史のなかの学生』（菅孝之、思想の科学社、一九七九年発行）一九ページ
六～九行目

*3 『不透明社会の中の若者たち』（片桐新自、関西大学出版部、二〇一四年）

*4 『不透明社会の中の若者たち』（三ページ 二二～二行目）

*5 『不透明社会の中の若者たち』（三ページ 二二～二五行目）

*6 『半径1メートルの想像力 サブカル時代の子ども若者』（山崎鎮親、旬報社、二〇一四年）四四ページ 一四～一五行目

*7 『半径1メートルの想像力 サブカル時代の子ども若者』（山崎鎮親、旬報社、二〇一四年）一一三ページ 一～二行目

*8 『ヘア芯 幻想 ―真実があるというこの思い込み―』（仲正昌樹、明月堂書店、二〇一〇年）六九ページ 九～一一行目

- *9 『不透明社会の中の若者たち』二一〇ページ 一〇行目『Q3 大学への入学目的は何ですか。』の内容を参考に作成
- *10 『不透明社会の中の若者たち』二九ページ 『図2.2 大学入学目的の変化』を抜粋
- *11 『不透明社会の中の若者たち』二九ページ 三〇五行目



〈異世界転生もの批評〉

データベース化する男性主人公と物語の関連について

塚本 悠太

目次

はじめに	1 2 1
一章 データベース的「男性」主人公	1 2 8
二章 キャラクター設定と物語の関係	1 3 1
三章 「悪」という要素	1 3 4
四章 作品紹介	1 4 0
おわりに	1 4 5
参考文献	1 4 6

はじめに

□アニメにも流行はある

「教養主義が衰退した」という話題は文学界で度々隆盛している。現在の教養主義を論じてベストセラーになった書籍に竹内洋の『教養主義の没落』がある。竹内によると、かつて学生に必要だった教養とは、読書を中心に人間形成を考えることであり、現在の学生は「変人」扱いされないための一般常識を重んじる大衆平均人文化と実用主義に基づく適応文化が教養となっている。現在の学生はかつての学生より「ライトな教養であるがゆえに、片仮名の「キョウヨウ」に生きていることになる。」(『教養主義の没落』二二九頁)。

現在の「キョウヨウ」を考えて見よう。『Eテレ』で放送された『Rの法則』は主に高校生をターゲットに一〇代の若者が充実した若者生活を送るための情報を発信した教養番組だ。そこで扱われたのは世間の流行を中心にツイッターの使い方やフォトジェニックな撮り方、インスタ映えするスポットの紹介などバライティに富んだ内容だった。また二〇一〇年に刊行された『10代にしておきたい17のこと』(本田健、だいわ文庫)は後にシリーズ化し、『20代にしたい...』など二〇代から六〇代まで刊行された。

二つの事例に共通することは、どちらも極めて短期的であることだ。短期的な期間で何者かが決めた、しかし誰にでも作れそうな流行に適応し平均人化するのが現在の若者である。私はキョウヨウとは短期間を充実した、キラキラした生活を送れるため流行に適応し、いわゆるリア充へと平均化するツールだと考える。故にキョウヨウに生きる私たちの生活には常に流行が存在する。

私たちの生活には常に流行が存在するからこそ、意外に思われるかも知れないが、アニメにも流行が存在する。アニメは(ジブリ作品)や『君の名は。』だけではない。オタクの中には流行っては廃れ、また隆盛する流行が存在する。この論文ではアニメの最新の流行を取り上げ分析する。そのために、一九九〇年代アニメの流行を体系化した東浩紀をはじめに紹介する。

□一九九〇年代の流行

東は一九九五年にテレビ東京から全国放送された『新世紀エヴァンゲリオン』や、その後の同人誌など二創作を分析し「データベース消費」という消費形態を打ち出した。以下『動物化するポストモダン』から引用する。

90年代のオタクたちは一般に、80年代に比べ、作品世界のデータそのものには固執するものの、それが伝えるメッセージや意味に対してはきわめて無関心である。

逆に90年代には、原作の物語とは無関係に、その断片であるイラストや設定だけ

が単独で消費され、その断片に向けて消費者が自分で勝手に感情移入を強めていく、という別のタイプの消費行動が台頭してきた。この新たな消費行動は、オタクたち自身によって「キャラ萌え」と呼ばれている。(『動物化するポストモダン』五八頁)

『エヴァンゲリオン』の爆発的な人気は多くの二次創作を生み出した。しかし『エヴァンゲリオン』のファンが作り出す二次創作には『エヴァンゲリオン』の世界観は継承されず、キャラクターだけが継承された。このことを踏まえ東は「大きな物語」を消費するのではなく「小さな物語」を消費することを嗜好する、いわゆる「キャラ萌え」が九〇年代の消費形態だと分析した。設定である「小さな物語」が消費の中心であるため重要なのはヒロインの綾波レイであり、『エヴァンゲリオン』の世界観ではない。だからこそ綾波レイを対象とした日常ものや恋愛ものなど二次創作が数多く生産されることが出来た。

また東は一九九八年に誕生した『デ・ジ・キャラット』こと「でじこ」に注目し、「キャラ萌え」するオタクの消費傾向をさらに分析した。

『デ・ジ・キャラット』でもうひとつ興味深いのは、前述した物語やメッセージの不在を補うかのように、そこでキャラ萌えを触発する技法が過剰に発達している点である。(同・六五頁)

詳しくは上の図*を参考にしたい。東は、これらキャラクターを構成する要素が『デ・ジ・キャラット』オリジナルの要素ではなく、「消費者の関心を触発するため独自の発展を遂げたジャンルの存在である」(同・六六頁)と述べている。

例えば【メイド服】は八〇年代後半のアダルトアニメからの流行であり、【触覚のようになつた髪】は九〇年代半ばのノベルゲームからの引用であり、現在では【アホ毛】と呼ばれる萌え要素である。

これら萌え要素は「ジャンルの存在である」ため、作品世界は違うが、同じような要素を持つ似通ったキャラクターが次々と生産されては人気を博す。

九〇年代のオタクは、その作品世界に登場する固有のキャラクターに萌えるのではなく、例えば【アホ毛】などに萌えるようになった。つまり物語でもキャラクターでもなく、キャラクターを構成する萌え要素に消費の関心を向けている。東は萌え要素(アホ毛や無口、髪の色など)がデ



(C) フロッピー

ータベースとして集積され、そこから任意に取り出した萌え要素を基に作られたキャラクターに萌えるオタクの消費行動を「データベース消費」と名付けた。

□二〇一〇年代の流行

現在も「データベース消費」はオタク市場に大きな影響力を持っている。ファンタジー、恋愛、日常など様々な物語が生産され、物語が目されることもあるが、オタクたちの一番の関心はキャラクターの萌え要素に向けられていると感じる。特にギャップ萌えの一種である「残念」は現在最も関心を集める萌え要素の一つだろう。「残念」とは二〇〇〇年代末のオタク市場に見受けられ、二〇一〇年代に一般化した美少女キャラクターへのギャップ萌えを指す。以下「残念」について詳しく分析する。

「残念」について、さやわか『10年代文化論』を参照する。さやわかは、ある時から「残念」を本来の否定的な用法でなく、肯定的な用法で「残念が」使われていると述べている。「相手の欠点をチャームポイントのように暖かく受け入れるものが多い」(二〇年代文化論…一八頁)。「残念」が二〇〇〇年代後半に刊行されたライトノベルに現われ、ベストヒットする要素となった。

ライトノベルで扱われる「残念」はギャップのことであり、例えば美人なのに変人のような「〇〇なのに△△」と形容される。伏見つかさ『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』(二〇〇八年)や、平坂読『僕は友達が少ない』(二〇〇九年)のヒロインは「残念」なギャップが魅力なキャラクターである。「残念」を取り上げている小森健太郎『神、さもなくば残念。』では、「残念」の流行を二〇〇七年に放映された『涼宮ハルヒの憂鬱』に求めており、前述の二作品の初巻発行年度も近いこともあり、「残念」が二〇〇〇年代後半からヒットした主張は一定の説得力がある。

二〇〇〇年代後半からヒットした「残念」キャラは二〇一〇年代でも変わらず人気を博す。その一例として丸戸史明『冴えない彼女の育て方』を取り上げ、第一巻に登場する三人のヒロインのキャラクター設定を紹介する。

一人目は澤村・スベンサー・英梨々。イギリス人と日本人のハーフである彼女のキャラクター設定は以下のようにされている。

いつもはお嬢様のように可憐な行動と言動がクラスはもとより学校中で評判の美少女だが、一皮むけばこんな奔放かつ激情的かつマニアックな本性が眠っている。

『冴えない彼女の育て方』…七頁、八頁)

一年の時から展覧会に入賞している美術部のエース。
類い希なる画才の持ち主。

そんな風にもはやされているこの女の「正体」は、校内では他を含めたごく一部の人間にしか知られていない。(同…八頁)

澤村・スベンサー・英梨々のキャラクター説明では「こんな莽猛かつ…」や「正体」などギャップを思わせるワードが並んでいる。ちなみにこの「正体」とは後述する霞ヶ丘詩羽のキャラクターの説明にも使われる言葉で、最大のギャップであり「残念」要素である「おたく」を意味している。

二人目は霞ヶ丘詩羽を紹介する。主人公より一つ年上であり、クールで美人な彼女のキャラクター説明は以下のようにされている。

一年の時から学年一位を外したくない学園きつての秀才。
気まぐれで演劇部の脚本も書いたりする類い希なる文才の持ち主。
そんな風に畏怖されているこの女性の『正体』は、やっぱり校内では俺を含めたごく一部の人間にしか知られていない。(同・二四頁)

澤村・スベンサー・英梨々にしても霞ヶ丘詩羽にしても、ある分野で「類い希なる」才能を持ち、かつ容姿端麗なのに「おたく」であるという「残念」要素を備えている。最後に本作のメインヒロインである加藤恵を紹介する。彼女のキャラクター設定は以下のようにされている。

ビジュアル的には……まあ、見た通り。
一年以上、一緒に学校に通っていたはずなのに、つい一月前までまるっきり印象に残っ
ていなかった同級生。

加藤恵。(同・一九頁)

「改めて言うぞ、加藤……お前は、地味なんかじゃない」
地味でも派手でもない。
個性も属性もない。

それは、ひとことと言ってしまう……

「お前はキャラが死んでいるんだよ！」

「……………」

ついでに、二言三言付け加えるなら……

「ただ単にキャラが立ってないだけなんだよ！ 中途半端なんだよ！」

「……………」

とどめに。

「だから全然目立たないんだよ！」(同…七三頁)

加藤恵のキャラクター設定はつまり「キャラが死んでいる」ことである。メインヒロインなのに「印象に残らなく、「キャラが立って」おらず、「中途半端」で「全然目立たない」。メインヒロインなのにメインヒロインらしくない、という「残念」さが加藤恵のキャラクターである。

□現在の流行

ここまでキャラクターのデータベース化と二〇一〇年代に流行しているデータベースの一つ「残念」について解説した。そして小論を執筆している二〇一九年は、データベースと「残念」の時代に該当する。そのために作られるキャラクターもデータベース的であり、「残念」だ。それを証明するために二〇二二年から原作小説が刊行され始め、二〇一八年にアニメ第二期が放送された『オーバーロード』で実例を示す。

『オーバーロード』の主人公は西暦二二二八年に生きる会社員である。彼は MEMO

MEMO ゲームの YOGRAHILL をプレイするゲーマーでもある。かつては絶大な支持を集めたユグドラシルも今では人気が無くなり二二二八年にサービスが終了してしまう。昔を懐かしみサービス終了までゲーム世界に居続けようと考えた主人公は、しかしサービス終了の時間が過ぎてもゲームが終わらないことに気がつく。のみならず、得られるはずがない嗅覚や触覚を感じたことで、何らかの理由で自分はゲームの世界に入り込んでしまったことを自覚する。これが物語のはじめに位置する。

注目すべきは主人公のキャラクター設定である。『オーバーロード』の主人公のキャラクター設定は従来の主人公のそれとは明らかに異なり、データベースと「残念」に基づき作られている。では『オーバーロード』の主人公がどのように描かれているかを引用する。

安堵の色濃いアウラの返答を受け、モモンガは自分の存在がどれだけアウラに恐れられているかを十分に悟る。

モモンガは服の下どこにもない胃がしくしくと痛むようなプレッシャーに襲われた。もしこれで自分が弱かったらどうしよう。そんなことを考えるたびに、全力で逃げ出したくなる。(『オーバーロード』…九七頁)

モモンガ（別名アインズ）とは、現実社会では普通のサラリーマンである主人公のプレイヤーネームであり、アウラとはモモンガが治める拠点の幹部のような存在であり、他の幹部同様、モモンガの圧倒的な力に恐れながらも絶対的な忠誠を誓う。注目すべきは、主人公が絶対的な強者であるはずなのに中身が気弱な会社員である点であり、キャラクター設定が「残念」に基づき作られているということだ。

□小論の目的

厳密には三章で述べるように、『オーバーロード』のような作品を（異世界転生もの）と呼ぶ。（異世界転生もの）は二〇一〇年代中頃から相次いでアニメ化がされ、シリーズが映画化されるほど人気を博す現在の流行である。そして小論が分析対象とするのが（異世界転生もの）である。

厳密には（異世界転生もの）とは違う『オーバーロード』を取り上げた理由は、どちらも『小説投稿サイトに投稿されたという事情があり、主人公のキャラクター設定が酷似しているからだ。』『オーバーロード』が、ゲーム内での地位と現実社会での地位の違いを、「普通の会社員のアインズには威厳のある人物の演技は荷が重い」などライバルの至る所で強調し、アインズが幹部の前では威厳ある態度で接するが、一人になると途端に気弱な「駄目営業マン」になることも、（異世界転生もの）の主人公と同じ「残念」を意識的に取り込んでいるからだろう。

そして『オーバーロード』と（異世界転生もの）の主人公は「残念」以外にももう一つ、あるデータベースを共有している。（異世界転生もの）に共通するデータベースとは何かを説明していくことが小論の目的である。そしてこのデータベースを説明するためには三つの作業が必要だ。一つ目は東浩紀が提唱した「データベース消費」が美少女キャラクターを対象としたものから男性キャラクターまでも包含するようになったことを述べなければならない。なぜなら（異世界転生もの）の主人公は男性キャラクターであることが圧倒的に多いからだ。二つ目はキャラクター設定と物語の関係を分析する必要がある。東はキャラクターの作成と物語は乖離していると分析し、これが「データベース消費」の特徴と述べたが、小論では東の言の例外を探るために、乖離されたキャラクター設定と物語を積極的に結びつける。なぜなら（異世界転生もの）の主人公が共通して持つデータベースは明らかに物語との関連が存在しているからだ。そして最後に（異世界転生もの）の物語構造を分析し、（異世界転生もの）の主人公が共通して持つデータベースとは何かを説明する。

これらをそれぞれ一章、二章、三章で述べていきたい。そして四章は三章の補完と位置づけ、三章で明かしたデータベースがいかに活字化されているかを事例紹介する章とする。

本文中、作品ジャンルを「へ」、キャラクター設定を「へ」、映画やアニメ、書籍を「へ」、その他引用を「へ」で記した

一章 データベース的「男性」主人公

□キャラが立つ主人公

東浩紀の言う「データベース消費」から二〇一九年現在で約三〇年となった。九〇年当時、〇年代は東の言う通りオタクたちの消費の中心はデータベースに基づき作られた女性キャラクターであったが、一〇年代を迎えると女性キャラクターのみ適応されていたデータベースが主人公である男性キャラクターにも適応されるようになった。それはつまり、女性キャラクターと同じように男性キャラクターも消費の中心となることを意味する。ここで同種の題材を扱いながらも主人公のキャラクター設定に大きな違いがある二作品を紹介する。片方は従来の主人公キャラであり、もう片方はキャラが立つ、データベース的の主人公である。

一作目は『エリアの騎士』だ。サッカーを題材にした本作は週刊少年マガジンで連載され、二〇一二年からアニメ化が実現した。簡単にあらすじを述べる。

主人公逢沢駆は兄でサッカーアンダー一五（一五才以下のサッカー日本代表）日本代表の逢沢傑を持ちながらも、中学校の部活動でベンチ外を一度経験したことにより、選手であることを止めマネージャーとなる。ある日、傑と通学していた駆は交通事故に遭い、兄は死んでしまう。傑の事故死をきっかけに駆は選手として再びピッチに立ち、やがて日本代表にまで上り詰める成長物語である。

次に主人公駆のキャラクターを分析していく。駆は、選手としてだけでなく容姿も優れた兄がコンプレックスである。そのため性格は【内気】であり、一度の失敗で挫折してしまう【気弱】な性格である。さらにアンダー一五日本代表だけでなく顔立ちもクールで女子からの人気が高い兄に対して【平凡】な顔立ちでもちろん【モテない】。しかしサッカーでは【隠れた才能】を持ち、密かに【ヒロインから好意を持たれている】。偶付き括弧で示した箇所は全て従来の主人公が備えている要素である。内気で気弱、そして平凡にすることで「主人公の無力化と空白化」(『神、さもなくば残念…一〇〇頁』)を演出し、モテないからこそヒロインからの好意に気付かない「能力の無力化」(同…一〇〇頁)が行われている。

二作目は『潔癖男子！青山くん』だ。『エリアの騎士』と同じくサッカーを題材にした本作はミラクルジャンプでの連載の後ヤングジャンプに連載を移し、二〇一七年にアニメ化が実現した。簡単にあらすじを述べる。

主人公の青山くん(名前は作中に登場しない)はサッカーアンダー一六日本代表ミッドフィルダーの天才。しかし潔癖症でありヘディングやスライディングなど汚れるプレーや、タックルなど人と接触するプレーを嫌う。サッカーをしようと思った理由も汚いボールに手を触れなくて良い、という極度の潔癖症の青山くんが部活仲間や同級生たちが織りなすサッカーコメディである。

次に主人公青山くんのキャラクターを分析する。青山くんは日本代表ということもあり「天才」だ。そして端正な顔立ちの「イケメン」でもちろん「モテる」。そして最大の特徴が極度の「潔癖症」であることだろう。

隅付きカギ括弧で示した箇所は全て従来の主人公が備えない要素である。事実、青山くんのキャラクター設定は、『エリアの騎士』では序盤で物語を退場する脇役、傑のキャラクター設定と多く共通しており、青山くんのキャラクター設定が主人公らしくないことが分かる。主人公が無力化し空白化する理由の一つは、主人公を読者と似通わせることで読者の感情移入を促すためであるが、『潔癖男子！青山くん』は無力化も空白化もされていない。青山くんは世の中にそうはいない「天才」（事実世代別サッカー日本代表は全国で各三〇人ほどしかない。）でファンが出来るレベルで「モテる」。つまり従来の主人公と比べ、現実世界で該当する人物はほほいしない。さらに極度の「潔癖症」ともなれば現実世界で該当する人物は一人もいないだろう。

□物語が不要な作品

同種のテーマを扱う『エリアの騎士』と『潔癖男子！青山くん』の違いはキャラクター設定の違いである。東は『動物化するポストモダン』で一九九〇年代のオタクは作品それ自体への関心よりも作品に登場するキャラクターの萌え要素に消費の関心を向けると述べた。つまり作品の目玉が物語や世界観からキャラクターへと移行したことを意味する。

次の図はテレビアニメ『エリアの騎士』公式ホームページ¹⁾のトップ画像を引用した。図の左にいる男性が主人公逢沢駆の兄傑で、右にいる女性がヒロインの美島奈々（セブン）である。そして中央でボールを蹴っているのが逢沢駆だ。続いてはテレビアニメ『潔癖男子！青山くん』公式ホームページ²⁾のキャラクター紹介からの引用である。トップページと同じイラストをキャラクター紹介に使われていたので、こちらを引用した。

二つ画像で注目すべきは、主人公が何をしているかである。『エリアの騎士』はサッカーを題材にした漫画であるため当然主人公はボールを蹴っている。しかし『潔癖男子！青山くん』はサッカーを題材にしているにも関わらずボールは見当たらない。しかしボールの代わりに彼の右手には掃除道具が握られている。

『エリアの騎士』は練習や苦悩を乗り越え主人公が日本代表へと上り詰める（成長物語）が主題であり、サッカーの詳しいルールや戦術が作中に登場する（スポーツもの）が目玉だ。対して『潔癖男子！青山くん』の主題はサッカーではなく、『潔癖症』であることだ。『潔癖男子！青山くん』は主人公が「潔癖症」でさえあれば、たとえ学園を舞



台にした日常物語や、魔法を使い戦うバトル物語でも成立する。これが意味することは『エリアの騎士』は〈成長物語〉であり(スポーツもの)という作品世界が必要とされるのに対して『潔癖男子！青山くん』は特定ジャンルの作品世界が必要とされないということだ。つまり『潔癖男子！青山くん』は物語が不要な、主人公が消費のターゲットとなるデータベースに基づかれた作品ということになる。

□データベース化する主人公

東は美少女キャラクターを分析し「データベース消費」を打ち出した。いくつものデータベースが集積され美少女キャラクターが生産されてきたが、そのデータベースを男性キャラクターにも転用する事例が登場した。『潔癖男子！青山くん』の【潔癖症】はその実例の一つだ。

データベースとして【潔癖症】があるのだから他作品にも【潔癖症】が特徴のキャラクターはもちろん存在する。例えば『進撃の巨人』のリヴァイ・アッカーマンは拠点の掃除に部下を巻き込み一日中行うほどの【潔癖】であり、『変ゼミ』の市河菱清は【潔癖症】故に無味無臭のフィギュアを愛好する【潔癖症】キャラである。

『進撃の巨人』と『変ゼミ』を例に挙げた二人のキャラクターは作品では脇役である。『進撃の巨人』の主人公エレン・イーターは敵である巨人に憎しみを持つ少年であるが、キャラクター設定は『エリアの騎士』の主人公とほとんど変るところがない。【普通】な主人公だ。『変ゼミ』の主人公松隆奈々子は女性キャラクターではあるが、キャラクター設定で至って【普通】な女子大生とされている。対して『潔癖男子！青山くん』は主人公がデータベース化され、従来の【普通】な主人公ではなくなっている。『潔癖男子！青山くん』はデータベースが物語の主人公にも適応されている一例である。

物語に一番多く登場する主人公をデータベース化するということは、それだけ物語が必要とされていないということである。事実、『潔癖男子！青山くん』は、練習の末新しい技術を獲得することもなく、サッカーを題材にしながらも〈成長物語〉も〈スポーツもの〉でもない。つまり、主人公をデータベース化するならば物語が不要になるということである。しかしこれの対偶を考えると、物語が必要ならば主人公のデータベース化は行かない、ということになる。次章ではこのことを考えていきたい。そのために物語が消費の中心であり、主人公はキャラが立たないつまり【普通】である作品。それらが隆生した一九八〇年代の消費形態を分析した大塚英志『物語消費論』を参照し、主人公が【普通】である意味と、【普通】というキャラクターが生産される構造を分析する。

二章 キャラクター設定と物語の関係

□『物語消費論』

二章ではキャラクター設定と物語の関係を分析し、キャラクターの要素がデータベータ化される過程には物語が必要不可欠なのではないか、という結論を導く。そのためには作品世界とキャラクター設定が乖離している「データベータ消費」に基づき作られた作品では説明がしづらいので、「データベータ消費」以前の「物語消費」を参照し解説する。以下「物語消費」を説明するために大塚英志『物語消費論』を紹介にする。

大塚は一九八七年から八八年に爆発的にヒットした「ビックリマンチョココレート」に注目し、「物語消費」という消費形態を打ち出した。「ビックリマンチョココレート」には（ビックリマンシール）が付録されており、シールの裏には「ビックリマンチョココレート」の世界観を断片的に作り出すキャラクターの設定が描かれている。消費者である子どもたちは、それ自体は、世界観全体からすると小さな設定でも、（ビックリマンシール）をたくさん集めることでより大きな「ビックリマンチョココレート」の世界観を知ることができ、大塚は「ビックリマンチョココレート」が作り出す世界観を「大きな物語」と名付け、（ビックリマンシール）に描かれた設定を「小さな物語」と呼んだ。従来の消費形態はこの「小さな物語」をメインに消費する形態だった。しかし大塚は「ビックリマンチョココレート」の例を参考に八〇年代の消費形態は、「小さな物語」を手がかりに「大きな物語」を分析し消費することを嗜好していると述べた。アニメやドラマの一話一話、つまり「小さな物語」を消費することを目的とせず、設定の裏に隠された世界観つまり「大きな物語」の消費を目指す八〇年代の消費形態を大塚は「物語消費」と名付けた。

ここで述べられていることは、東浩紀の「データベータ消費」と逆のことである。（ビックリマンシール）に描かれるキャラクターやシールの裏に記載されている設定は全て「ビックリマンチョココレート」の世界観を作り出す装置となり、メインである世界観を決定づける脇役である。消費の対象は世界観であり、設定ではないというのが大塚の主張だ。

大塚は同じことを『機動戦士ガンダム』を例に示し説明している。アニメ雑誌などにリークされる『機動戦士ガンダム』の裏情報や視聴者の理解を促し、世界観を裏付けるための独自の年表などが作成されることを受け、一九八〇年代のオタクは作品世界を消費の中心にしていると述べた。

□「物語消費」の主人公

「物語消費」の作品は作品世界がメインであり、キャラクターは脇役である。設定される登場人物は作品世界を反映した人物になる。つまり一章の『潔癖男子！青山くん』のようにサッカーを題材にした世界観なのにサッカーに関係の無いキャラクター設定は行われず、ましてその余計な設定が過度に主張され物語を邪魔することも無い。言い換

えると「物語消費」の登場人物は、作品世界を邪魔しない範囲でキャラクター設定が行われているということだ。その一例として岸本斉史『MARUO-ナルト』を取り上げる。

『MARUO-ナルト』は週刊少年ジャンプで一九九九年四三号から二〇一四年五〇号まで連載された少年漫画であり、ジャンプの代名詞である【友情・努力・勝利】を体現した作品だ。主人公うずまきナルトは、ナルトが住む木の葉隠れの里をかつて壊滅させた九尾を体内に宿し、里中から恐れ嫌われていた。生まれながらに両親がおらず里からも嫌われ孤独だったナルトはいつしか里で一番偉い火影となり皆に認めてもらうことを夢見る。火影になるためにこの葉隠れの忍となったナルトは班員や同期、上司と任務を遂行することで【友情】を育み、火影になるために【努力】し、里や世界を救うべく【勝利】する。ナルトは馬鹿で不器用、しかしド根性は一人前の「意外性ナンバーワン」(『MARUO-ナルト』・第一巻)というキャラクター設定がなされている。

ナルトのキャラクター設定で注目すべき所は、それが【友情・努力・勝利】のためのキャラクター設定であることだ。ナルトは里中から嫌われていた過去があり、人付き合いが不器用な傾向がある。しかしナルトの忍道(座右の銘のようなもの)で真っ直ぐな気持ちで仲間と接することで【友情】が生まれる。また不器用ながらも持ち前のド根性があるため【努力】する。そして【友情】と【努力】の結果が【勝利】へと繋がっている。また従来の【普通】な主人公の要素も持ち合わせていることも注目すべきだ。作中で設定としてナルトの容姿に言及している箇所はないが、ヒロインたちから【モテない】所を見るに【平凡】な顔立ちだと推察される。また体内に九尾という巨大な力を宿し、意外性ナンバーワンであることは【隠れた才能】があることを意味する。つまり『MARUO-ナルト』の主人公は【友情・努力・勝利】と【普通】な主人公をベースに作られたキャラクター設定である。

□物語のための「普通」

『MARUO-ナルト』が、従来の主人公が持ち合わせた【普通】なキャラクターに設定されていることは、『MARUO-ナルト』が、キャラクターが主題の作品ではなく、物語が主題の作品だからだろう。『MARUO-ナルト』が【平凡】な主人公を描いたのは、主人公が落ちこぼれから成功者になるまでの成長物語を描くためであり、成功するには特別な力、つまり【隠れた才能】が必要だった。主人公は落ちこぼれであるため所謂リア充に設定することはできない。故に【モテない】。

【普通】な主人公を設定することは、一般的に読者や視聴者の感情移入を促進させるための装置と言われているが、主人公を【普通】にすることは、小論においてそれ以上に重要な意味を持つ。それは物語が主役であるがために、物語に最も多く登場する主人公は作品世界を邪魔せずかつそれを反映させるために【普通】というキャラクター設定がなされている、ということだ。ここで我々は、「データベース消費」の例外を見て取れる。東は『動物化するポストモダン』で、美少女キャラクターの設定は作品世界から

独立し、データベースに基づき行われていると述べた。つまり東の提唱する「データベース消費」に基づけば、生産される作品はキャラクターの作成が物語より先行され行われるが、『MANITO ナルト』の主人公や【普通】な主人公のキャラクター設定は、物語が先行しなければ生まれなかつたはずだ。この例外はしかし当たり前前の事である。なぜなら【友情・努力・勝利】も【普通】な主人公のどちらも「物語消費」の時代の産物だからだ。しかし主人公がデータベース化され消費される「データベース消費」の現在、主人公のキャラクター設定に明らかに物語が関与している一つのジャンルがある。それが〈異世界転生もの〉である。三章では二章で見た東の例外をヒントに、〈異世界転生もの〉の作品構造に注目し、〈異世界転生もの〉の主人公が共通して持つデータベースとは何かを紐解く。

三章 「悪」という要素

□〈異世界転生もの〉とは

一章で東浩紀が提唱した「データベース消費」が主人公である男性キャラクターでも適応されることを示した。二章でキャラクター設定と作品世界が乖離している「データベース消費」の例外、キャラクター設定と作品世界が密接に関わり合っていることを述べた。三章は男性キャラクターが主人公であり、そのキャラクター設定が作品世界を構築しているであろうジャンル、〈異世界転生もの〉を分析する。では、〈異世界転生もの〉とはどんな作品なのか。まず、その特徴を解説する。

〈異世界転生もの〉とは二〇一〇年代中頃からアニメ化によって人気を博す。その原作は一般人がインターネット上に小説を投稿する『F』小説に多く、『G』小説サイトとして代表的な『小説家になろう』を踏まえ（なろう系）とも呼ばれる。

〈異世界転生もの〉の特徴は、主人公が異世界へ転生し生活をする点にある。〈異世界転生もの〉と似た構造を持つ作品に、例えばヤマグチノボル『ゼロの使い魔』がある。『ゼロの使い魔』は『文庫』から出版され二〇〇六年にアニメ化がなされた。物語は主人公平賀才人が異世界の住人でヒロインのルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに召喚され使い魔としてルイズに使えることになった【普通】の男子高校生である。

〈異世界転生もの〉と『ゼロの使い魔』の違いは、まず転生しない点である。〈異世界転生もの〉の主人公は往々にして、それまで生きていた世界で死ぬことを契機に異世界へと転生される。また死が契機にならずとも、〈異世界転生もの〉の主人公は生きていた世界では引きこもりの社会不適合者であることが多い。生きていた世界では役目がなかった、言い換えると役目が死んでいる人物が、異世界へと転生されることにより役目を得ることが「異世界転生もの」の大枠である。『ゼロの使い魔』の主人公は【普通】の男子高校生であり、描写こそされないが、将来社会の一員として活躍する未来を有している。しかし〈異世界転生もの〉の主人公は更正の余地はあるものの、将来社会の一員として活躍する未来を積極的に排除されている。

次に主人公が元いた世界に帰らない点である。『ゼロの使い魔』では主人公が一時的に元いた世界に帰る場面が存在するが、〈異世界転生もの〉ではその描写がされない。その理由は先ほど述べたように、〈異世界転生もの〉の主人公は元いた世界での役割は存在しないから帰る必要が無いためである。

また『ゼロの使い魔』と共通する箇所も存在する。

一つ目は、主人公は異世界の住人と生活することである。例外的に主人公と同じように召喚や転生を経た別の登場人物と主人公が関わることはあるものの、〈異世界転生もの〉は異世界の住人と生活することが主題だ。よって物語の大部分は異世界の住人との生活や冒険が描かれる。

二つ目は、元いた世界と異世界ではイデオロギーに大きな差は無く、異世界は架空の存在ではなく実在する点だ。スウィフト『ガリバー旅行記』や芥川龍之介『河童』など異世界で異なるイデオロギーに触れる作品はアニメ系作品以外にも存在するが、それらの主題は異なるイデオロギーを通して現行のイデオロギーを批判することにある。よって『ガリバー旅行記』などで描写されるイデオロギーの相違は幅が広い。対して『異世界転生もの』は現代の日本と極端に違う微妙な線で描かれる。これは読者の理解度や作品への親密性を向上するための措置であり、そもそも『異世界転生もの』の主人公は元いた世界での役割や生は死んでおり、また元いた世界に未練もないため元いた世界を批判するというテーマは『異世界転生もの』にはそぐわないという事情もあるだろう。さらに異世界は仮想世界ではなく現実世界であることも特徴である。

ここをまとめると『異世界転生もの』は以下の特徴を持つ。

- ① 異世界に転生し、異世界の住人と生活すること。
- ② 元いた世界での主人公の生命や社会的役割は死んでいること。
- ③ 異世界と現代の日本でイデオロギーの違いはあまりないこと。
- ④ 異世界は仮想世界ではなく実在すること。

このことを踏まえると、『オーバーロード』と似た物語である『ソード・アート・オンライン』は『異世界転生もの』には含まれないことが分かる。なぜならこれらはゲームのプレイヤーが仮想世界にダイブし、同じく仮想世界にダイブする別のプレイヤーと生活や冒険をするからだ。これらの主人公は、同じ世界に生きる人たちとしか生活しないために、異世界の住人と生活をする『異世界転生もの』には含まれない。

そしてこれら四つの特徴を備えた作品を小論では分析対象とする。対象作品は、暁なつめ『この素晴らしい世界に祝福を！』、長月達平『零…ゼロから始める異世界生活』、カルロ・ゼン『幼女戦記』、伏瀬『転生したらスライムだった件』の四作品を原作としたアニメである。

三章では、作品世界がいかに主人公のキャラクター設定に影響を与えているかを考察する。そのために『異世界転生もの』の物語構造を最初に分析する。小論では『異世界転生もの』の物語構造は二つのジャンルで構成されていると考える。

□ 『異世界転生もの』の物語構造

二つのジャンルとは、『セカイ系』と『マレイト』である。以下それぞれの特徴の説明と『異世界転生もの』との関連を考察する。

一つ目の『セカイ系』について解説する。『セカイ系』とは二〇〇〇年代初頭に流行した恋愛もの一ジャンルである。その特徴を述べるために、東浩紀『セカイからもつ

と近くに』を参照する。東は二〇〇四年に出版した同人評論本に〈セカイ系〉の定義を述べ、その定義はウイキペディアで取り上げられるほど世間に認知された言説である。

主人公と(たいていの場合は)その恋愛相手とのあいだの小さな人間関係を、社会や国家のような中間項描写を挟むことなく、「世界の危機」「この世の終わり」といった大きな問題に直結させる想像力を意味する『セカイからもっと近くに』(一五頁)

セカイ系と呼ばれる作品は、視点人物のまわりの小さな日常と、世界や死をめぐる抽象的な観念ばかりを描き、そのどちらでもない複雑な社会現実をほとんど描写の対象にしません。(中略)異星人が攻めてくる、世界が破滅するという構造だけが重要で、攻めてくるのがどういふ異星人なのか、人類はそれにどのような対応をしながら世界は破滅しつつあるのか、といった細部は驚くほどなおざりにされています。(同・二七八頁)

たしかに〈セカイ系〉で扱われる敵対者は驚くほどに詳細な描写がされていない。それは主人公たちが敵対者を何者であるかを検討することなく受動的に防衛することによるのみ物語の大半を消費するからである。あくまで重要なのは「異星人が攻めてくる、世界が破滅するという構造」とその困難の最中に芽吹く主人公とヒロインの恋愛であり、敵対者の詳細ではない。

また小森健太郎『神、さもなくば残念。』では「二対多のハーレムものではなく、一対一の純愛もの」(『神、さもなくば残念』…九四頁)であり「バトルものと恋愛もの」の両要素を持っている」(同・九四頁)作品だと解説している。

〈異世界転生もの〉と〈セカイ系〉が共通するところは、〈異世界転生もの〉の転生先がしばしば滅亡の危機に瀕していることだろう。『この素晴らしい世界に祝福を!』では異世界は魔王軍に侵略されており、魔王軍に対抗するために現代社会で死んだ若者を転生者として異世界に召喚している。『幼女戦記』は第一次世界大戦をモチーフにしており、主人公が転生した時期は世界大戦前であり、主人公は兵士として戦争に参加します。多くの作品に共通することは、異世界は危機に瀕しており、それらの解決のために転生者は異世界に召喚されるということである。

実は〈異世界転生もの〉はハーレム要素があるが、それも〈セカイ系〉の系譜をたどっていると考えられる。本来〈セカイ系〉作品は主人公とヒロインの一対一の純愛物語であるはずなので、ハーレム要素がある〈異世界転生もの〉と〈セカイ系〉は交わらないはずだが、小森健太郎『神、さもなくば残念。』によると〈セカイ系〉はハーレム化することで商業的に大きく飛躍し、完成したと述べている。

恋愛ドラマに重点をおいてみれば、男の主人公であり視点人物である坂井悠二が、最初から死せる物として設定されているところが重要である。調べてみれば、主役の無力化と空白化が最初から導入されていることになるが、…マンガやアニメで人気のハーレムものの中にいる男の主人公は、読者の感情移入をしやすくするためか、極端な年若である（「ネギま」など）とか性的に極端に奥手である（「ラブひな」など）といった設定によって、能力を無能化している場合が多い。はじめから死者であるという坂井悠二の設定も、それと同工異曲であり、本来はハーレムものでなく純愛路線である（セカイ系）作品なのに、多数の女の子に主人公が囲まれ愛されるという設定を可能にしている。また、坂井悠二が死者であるために、彼が一人の女性のみを忠誠を尽くさなくてよいとする、ある種の免罪符として機能している面もある。（同：二〇〇一頁）

引用した箇所は、電撃文庫で刊行された『灼眼のシャナ』の主人公坂井悠二を分析した箇所である。多くの（異世界転生もの）はハーレム要素があり、それは主人公がすでに死んでおり「主役の無力化と空白化が最初から導入されている」からだと説明ができてきた。さらに（異世界転生もの）の主人公は、恋愛に対して鈍感であることも特徴だ。『この素晴らしい世界に祝福を！』や『Re:ゼロから始める異世界生活』は主人公が引きこもりであるからこそ、人付き合いや恋愛に対して奥手であり、苦手であるという設定がなされている。『転生したらスライムだった件』は主人公がスライムに転生する話だが、転生先での主人公の性別は男性でも女性でもなく無性別であり、「性能力の無能化」（同：二〇〇頁）がされている。（異世界転生もの）は主人公が「死者であるために、彼が一人の女性のみを忠誠を尽くさなくてよい」という死者ならではの設定の他に、引きこもりなど独自の設定でハーレム化を正当化している。（異世界転生もの）は（セカイ系）を進展させた完成させた『灼眼のシャナ』をさらに発展させた作品であり、（セカイ系）の系譜を持つジャンルであろう。

二二目的（マレビト）について解説する。（マレビト）とは世界中の物語に存在するジャンルである。例えば二〇一四年に公開されたインド映画『きつと上手くいく（邦題）』も（マレビト）作品である。（マレビト）の特徴は、一つのイデオロギーを共有したある共同体に、そのイデオロギーとは相反したイデオロギーを持つ人物、客人（まれびと）が訪れいずれその共同体のイデオロギーを変えることが物語の目玉となる。（マレビト）について柄谷行人・渡部直己『中上健次と熊野』では「過去の経歴を誰も知らない。彼が一体、どこから来て、何をやってこんなところに来たのかいっさい知らない。」と述べられており、異なるイデオロギーを持つ客人が、物語上で謎の人物であることが特徴とされる。これは（異世界転生もの）にも共通する特徴である。まず主人公

が転生者であることは、彼を転生させた者しか知らず、転生する主人公が異世界の住人にとって「彼が一体、どこから来て、何をやってこんなところに来たのかいつさい知らない。」ところが共通する。さらに「異世界転生もの」はしばしば主人公が現実世界の知識や思考を駆使して生活を営み、敵や困難を打破することが多い。『転生したらスライムだった件』では、元会社員であることが影響し、配下である魔物たちにルールを遵守することを命じ、衣食住の充実を徹底させている。『幼女戦記』では推定二〇〇〇年代から二〇一〇年代の元会社員が第一次世界大戦前に転生しており、歴史の知識を使い転生先の戦争が世界大戦に発展することを上官に進言している。立場や知識など異世界では存在しないイデオロギーで物語を牽引する「異世界転生もの」は「マレビト」の要素を持つ作品だろう。

「異世界転生もの」には「セカイ系」と「マレビト」の二つのジャンルが含まれていることを説明したが、二つのジャンルには共通したある要素が含まれている。そしてその要素が「異世界転生もの」の主人公のキャラクター設定に大きな影響を与えている。「異世界転生もの」は、東浩紀が提唱した「データベース消費」の時代に該当する作品である。故に生産されるキャラクターは物語の特色に関わりなくキャラクター設定がなされ消費されるはずである。しかし「異世界転生もの」の主人公のキャラクターは、その設定に明らかに物語の特色が関係している。その特色を見つけるためにまず「異世界転生もの」を「セカイ系」と「マレビト」の二ジャンルに分けて説明した。次は「セカイ系」と「マレビト」に共通する要素とは何かを分析する必要がある。先に結論を述べると、両者に共通する要素とは「悪」を指す。

□「セカイ系」と「マレビト」に共通する要素、「悪」

では「悪」に着目してもう一度「セカイ系」と「マレビト」を分析し直す。まず「セカイ系」を分析するために、神代健彦『悪を歓待する』を引用する。

しかしまた、何者かの新たな到来は、常に一つの脅威である。彼らは、我々の言語も、法も、道徳も、倫理も共有しない客人、つまりは異邦人であるから、それはしばしば我々の秩序への脅威である。彼らは、常にすでに、潜在的には我々にとっての敵対者、破壊者、秩序にまつるわね悪である。(『悪を歓待する』三四三頁)

「セカイ系」とは世界の滅亡や危機に立ち向かい、それらを防ぎ退ける最中での主人公とヒロインとの恋愛を描くジャンルであると解説したが、これは言い方を変えると、主人公やヒロインは世界を滅亡させるだけの力を備えていることを意味する。なぜなら、世界を守るためには世界を破壊する敵と同等またはそれ以上の力を持たなければならない。世界を守るために戦う彼女らは「潜在的には我々にとっての敵対者、破壊

者」である「悪」である。例えば『この素晴らしい世界に祝福を！』では数多くの転生者が魔王軍と戦い命を落としている現状が存在し、転生者が使っていた特殊な力を帯びた武器を魔王軍に使われ、魔王軍の更なる強化を助けてしまうという事情がある。これは異世界を救うはずの勇者が不可抗力ながらも魔王軍に加勢してしまうことを意味する。つまり彼らは「潜在的には我々にとっての敵対者、破壊者」なのだ。

次に〈マレビット〉を分析する。〈マレビット〉はある共同体に異なるイデオロギーを持った人物が訪問することが特徴である。それは神代が述べる「何者かの新たな到来は、常に一つの脅威である。彼らは、我々の言語も、法も、道徳も、倫理も共有しない客人、つまりは異邦人であるから、それはしばしば我々の秩序への脅威である。」ことを言い換えている。異なるイデオロギーで困難に立ち向かう〈異世界転生もの〉の主人公は異世界にとつての「悪」である。

ここでさらに〈マレビット〉の「悪」を分析するために柄谷行人・渡部直己『中上健次と熊野』でも述べられている〈マレビット〉の提唱者、折口信夫について解説した池田彌三郎『日本民族文化体系（2）折口信夫』を参照する。

池田は著書で、折口は〈マレビット〉を二種類に分類していると述べている。

まれびとの来訪には、定期的なそれのほかに、「時をきめずに」訪れて来るものがあることを言い、つまり、第1次、第2次の形のあることを説いている。（六四頁）

しかし折口は、これと同時に、一方に、時をきめずに、さすらいながら来る、いわば不時の出現者としてのまれびとを考え、村を追放されたものが、村々を通過してゆく、第二次のまれびとも考えていた。第一次のまれびとが、盆の聖霊や歳神や、沖繩の、ニライカナイからの訪れびとであるのに対して、第二次のものは、たとえば、すさのおの尊のように、村八分のような刑罰によって追放されたものと考えていたようだが、（六四頁）

折口の述べる〈マレビット〉には「時をきめずに」訪れるものが存在すると述べられており、この不定期に訪れるものがジャンルとしての〈マレビット〉として使われていることが分かる。さらに折口は不定期に訪れる「不時の出現者としてのまれびと」を「村を追放されたものが、村々を通過してゆく」、「村八分のような刑罰によって追放されたもの」を考えていたようで、物語で「不時の出現者」として扱われる「まれびと」は「悪」の要素が含まれていることが見て取れる。つまり〈マレビット〉とは、その理論の元となった折口の論を見ても「村八分のような刑罰によって追放されたもの」という「悪」であり、ジャンルとしての〈マレビット〉も「秩序にまつらぬ悪である。」

第四章 作品紹介

□「普通」な主人公との比較

〈異世界転生もの〉の主人公と「普通」な主人公のキャラクター設定は多くを共有している。〈異世界転生もの〉は現代社会で死ぬことで異世界に転生されるが、「普通」な主人公と同じく、物語を始める契機は受動的に迎える。それは〈異世界転生もの〉の主人公も「普通」な主人公どちらも「気弱」で「内気」で主体的に物語を動かせるだけの才能が無い「平凡」な人物として描かれているからだ。しかし一旦物語が始まるとどちらの主人公も「隠れた才能」を発揮し物語を牽引する。なお「隠れた才能」とは主人公が困難を超えるために使われる特殊能力や知識を指す。結論を言うと、この「隠れた才能」に〈異世界転生もの〉の主人公と「普通」な主人公とで違いがある。〈異世界転生もの〉は「隠れた才能」に積極的に「潜在的には我々にとつての敵対者、破壊者」となり得る危険を設定している。つまり〈異世界転生もの〉の主人公は「隠れた才能」が「悪」であるということだ。

さらに「隠れた才能」以外にも、「悪」をコメディ化した【ゲス】要素も持ち合わせる。〈異世界転生もの〉で扱われる【ゲス】とは従来の主人公では考えられない非倫理的、不道徳的な行為を嬉々として行うことである。これから紹介する〈異世界転生もの〉には全て「隠れた才能」に「悪」の要素がある一方で、【ゲス】はコメディであるために作品によってはその要素がない場合もある。

□作品紹介

紹介する作品は、暁なつめ『この素晴らしい世界に祝福を！』、長月達平『零…ゼロから始める異世界生活』、伏瀬『転生したらスライムだった件』、カルロ・ゼン『幼女戦記』の四作品だ。ちなみに四作品は全て『小説投稿サイトの連載がきっかけでアニメ化がされており、前三作品が「小説家になろう」で投稿されており、『幼女戦記』は「Araragi」で投稿された。また【ゲス】要素を持つ作品は『この素晴らしい世界に祝福を！』である。以下、四作品を紹介し「悪」の要素がいかに使われているかを確かめる。

まず『この素晴らしい世界に祝福を！』の主人公、佐藤和真の「隠れた才能」について紹介する。

…何か一つだけ。向こうの世界に好きな物を持つていける権利をあげているの。
強力な特殊能力だったり。とんでもない才能だったり。神器級の武器を希望した人
もいたわね。(『この素晴らしい世界に祝福を！』…一二三頁)

主人公であるはずなのに「軽くひいている仲間」が描写されるこれらの行動は、【普通】

な主人公では考えられないことだろう。(『異世界転生もの』で描かれる【ゲス】はコメ

ディ

要素を含むため、これを面白おかしく描写している。

次に『ろ…ゼロ』から始める『異世界生活』を紹介する。主人公ナツキ・スバルは、死を

迎え

るとどこかで設定されたセーブポイントから強制的にやり直される「死に戻り」という

能力

を持っている。この能力はスバルが転生した時にデフォルトで備わっていたもので、魔

女の

力が関与しているとされ、これがスバルの【隠れた才能】に該当する。では作中で魔女

がど

のような存在であるかを解説する。

「もう一度、聞くわ。—どうして私を、『嫉妬の魔女』の名で呼ぶの？」

「いや、だって、そう呼べって……」

「……誰に言われたのか知らないけど、趣味が悪すぎる。乗る方も乗る方よ。—

禁忌の象徴『嫉妬の魔女』口にするのも憚られる、そんな名前を呼び名に選ぶな

んて」

嫌悪感も露わにサテラ—銀髪の少女はスバルを混乱の海へ突き落とす。

少女の言に、周囲を取り巻いている群衆の全てが頷く。(『ろ…ゼロ』から始める『異世

界生活』…一五四頁)

「応えてください。あなたは、『魔女に魅入られた者』でしょう？」(同…二四一頁)

「姉様も他の誰も気付かなくても、レムだけはその臭いに気付きます！その悪臭に、咎人の残り香に、嫌悪と唾棄を抱きます」(同…二四二頁)

『ろ…ゼロ』から始める『異世界生活』の世界で言われる魔女とは「咎人」であり「口に

する

のも憚られる」存在である。その魔女の力がスバルの【隠れた才能】となっている。

次に『転生したらスライムだった件』の主人公リムル・テンペストを紹介する。リムルはスライムとして転生され、そこで出会った“暴風竜”ヴェルドラに名前を貰う。名付けという行為は魂に名前を刻むことで絶大な力を得ることができる。これがリムルの【隠れた才能】に該当する。ではリムルの名付け親、ヴェルドラがどのような存在かを述べる。

この日、世界に激震が走った。

“天災”級モンスターである“暴風竜”ヴェルドラの消滅が確認されたのだ。ヴェルドラ。特の階級のモンスター。『転生したらスライムだった件』…五〇―五二頁

特のランクとは、評価を上回る魔王指定クラスであるのランク、その更に上の“天災”もしくは“厄災”級の魔物の事である。本来、ランクの魔物でさえ、国家存続の危機に陥る場合すらある恐るべき脅威なのだ。(同…五二頁)

リムルの【隠れた才能】であるヴェルドラが「悪」の要素を十二分に持つことがわかるだ。

ろう。ちなみにリムルは物語の後半で魔王となり、リムル自身も「悪」を体现する。最後に『幼女戦記』の主人公ターニャ・デグレチャフについて述べる。ターニャは無神論者でありそのことが神の逆鱗に触れ神の偉大さを自覚させるために、神が信仰されかつ貧富の差が激しい戦時下の異世界へと転生される。その世界で魔導師として前線で戦うターニャは神に祈りを捧げることで絶大な力を得るが、ターニャの最大の特徴は極めて合理的な思考にあり、それが「悪」の要素を含んでいる。

ルールに従い、ルールの穴を潜り、ルールを喰いながらもルールに束縛される。

『幼女戦記』…二二頁

対照的に、彼はルールと自由の関係性という点に関して「合理性」を持ち込んだシカゴ学派に出会い、狂喜した。ルールさえ守っていればルールの上に乗っかっていられるもの。(同…二二―二三頁)

これはターニヤが転生する前、現実社会で生きていた頃の彼の哲学を描写している箇所である。ルールの遵守を絶対とし出世コースを上る主人公は、ターニヤとして転生された世界でもこの考えに基づき言動する。

レルゲン少佐にとって、その一例こそがターニヤ・デグレチャフという無数の帝国軍魔導官の中で記憶に値する危険な存在となった瞬間だった。(同…七四頁)

しかし、だ。命令を忘れるようなアホの頭には、頭蓋を切開し、直接命令を叩きこんでやろう(同…七四頁)

幼い見た目からは考えられないほど合理的思考に基づく言動は「幼女の皮をかぶった化け物」(同…八〇頁)と形容されるほど異質な存在として描かれている。合理的すぎる思考と魔法は存在しないが異世界と似た歴史を辿った転生前の世界史の知識に基づいた作戦立案や戦術は、後に異世界を世界大戦に発展させる原因となった。ターニヤのキャラクター設定には明確に「悪」の要素が含まれている。

四作品は表現に違いはあるものの、全てに「悪」の要素が含まれており、それらは作中で明確な「悪」として描写されている。味方や世界を救うために戦う彼らは、しかし「悪」の力を備えたダークヒーローであったのだ。

おわりに

《異世界転生もの》の主人公が共通して持つ「悪」という要素を暴き、それがいかに活字化されているかを小論では述べた。《異世界転生もの》は「はじめに」でも述べた通り、「データベース消費」と「残念」の系譜を辿る作品である。小論では取り上げた四作品の主人公がいかに「残念」であるかをあまり述べるのがかなわなかった。それをこの場で述べさせていきたい。

これまでは《異世界転生もの》の小説を取り上げ論じたが、ここからはそれらが原作となったアニメを取り上げる。なぜなら彼らの「残念」は小説に描かれアニメとして映像化されており、アニメの方がより「残念」を理解できるからだ。

『転生したらスライムだった件』の主人公リムル・テンペストは、見た目は可愛いスライムでその強さと人望から女性陣から多くの好意を受けているのに、中身は三七才のしがないサラリーマンである。『ろっゼロ』から始める異世界生活』の主人公ナツキ・スバルは、自身の能力による勝利を過度に自慢し、それことをもってヒロインに高圧的に接したことで、ヒロインから愛想を尽かされる場面が存在する。【普通】な主人公と違い成果を過度に協調するスバルは性格が「残念」だろう。『この素晴らしい世界に祝福を！』の主人公佐藤和真（カズマ）は引用箇所でも分かる通り、女子の下着を振り回し喜ぶような男である。そして『幼女戦記』の主人公ターニャ・デグレチャフは、見た目は可愛い幼女ではあるが、中身は三〇代半ばのサラリーマンである。

これらの設定は全て作中で「相手の欠点をチャームポイントのように暖かく受け入れ」『10年代文化論』一八頁）られ、作品最大の魅力として描かれることもある。リムルは元いた世界では童貞だったからこそ、異世界で向けられる好意に奥手であり、その姿が見た目の可愛らしさと合わさることでよりリムルのキャラクターを魅力的にしている。スバルはお世辞にも上等な性格とは言えず、俺だけが苦労しているなど自分本位な発言を繰り返すが、だからこそ何度も死の痛みを味わおうとも仲間を助ける姿に読者は熱狂する。カズマは【ゲス】な言動の数々がコメディチックに描かれ、エンターテインメントとして大成している。ターニャはライトノベルではわかりづらいが、ルール違反反際の作戦行動、部下や敵に対する残忍極まる行為、そしてそれらを嬉々として行うサディスティックさ、それらを笑顔で行う様はまさに「幼女の皮を被った化け物」

『幼女戦記』八〇頁）であり、アニメの視聴者からも【ゲス】な笑顔がコメディとして受け入れられた。紹介した四作品は全て「残念」な作品であったのだ。

このことを踏まえると《異世界転生もの》が様々な流行を継承したジャンルだということが分かる。《マレビト》は太古からある物語の類型であるが、「物語消費」、「データベース消費」、「セカイ系」、「残念」とその時代を象徴する作品ジャンルや消費形態を踏襲したジャンルが《異世界転生もの》である。

参考文献一覧

はじめに

参考文献

- 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、二〇〇三年七月二三日）
- 本田健『10代にしたい17のこと』（だいわ文庫、二〇一〇年二月一〇日）
- 東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』（講談社現代新書、二〇〇一年一月二〇日）
- さやわか『10年代文化論』（星海社、二〇一四年四月二四日）
- 丸戸史明『冴えない彼女の育て方』（富士見ファンタジア文庫、二〇一二年七月二五日）
- 小森健太郎『神、さもなくば残念。』〔2000年代以降アニメ思想批評〕（作品社、二〇一三年四月三〇日）
- 丸山くがね『オーバーロード 不死者の王』（KADOKAWA、二〇一二年八月一〇日）
- ※東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』（講談社現代新書、二〇〇一年一月二〇日・六六頁）

一章 データベース的「男性」主人公

参考文献

- 東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』（講談社現代新書、二〇〇一年一月二〇日）
- 月山可也、伊賀大晃『エリアの騎士』（講談社、二〇〇六年八月一七日）
- 坂本拓『潔癖男子！青山くん』（集英社、二〇一五年一月一九日）
- 諫山創『進撃の巨人』（講談社、二〇一〇年三月一七日）
- TAKAO『変ゼン』（講談社、二〇〇八年七月二三日）

引用

※1 テレビ朝日『エリアの騎士』（<https://www.tv-asahi.co.jp/knight/>）

※2 テレビアニメ『潔癖男子！青山くん』公式サイト（<http://kda-anime.com/>）

二章 データベース化されるためには

参考文献

大塚英志『物語消費論―「ピックリマン」の神話学』（ノマド叢書、一九八九年五月）

- 東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』(講談社現代新書、二〇〇一年一月二〇日)
坂本拓『潔癖男子！青山くん』(集英社、二〇一五年一月一九日)
岸本斉史『FARITO-ナルト』(集英社、二〇〇年三月三日)

三章 物語がキャラクターを作る

参考文献

- ヤマグチノボル『ゼロの使い魔』(メディアファクトリー、二〇〇四年六月三〇日)
暁なつめ『この素晴らしい世界に祝福を！ ああ、駄女神さま』(角川スニーカー文庫、二〇一三年一月一日)
長月達平『零…ゼロから始める異世界生活』(メディアファクトリー、二〇一四年一月一三日)
カルロ・ゼン『幼女戦記 Deus lo vult』(KADOKAWA、二〇一三年一月二日)
伏瀬『転生したらスライムだった件』(マイクロマガジン社、二〇一四年六月六日)
小森健太郎『神、さもなくば残念。』2000年代以降アニメ思想批評』(作品社、二〇一三年四月三〇日)
池田彌三郎『日本民族文化体系(2) 折口信夫』(講談社、一九七八年三月二〇日)
東浩紀『セカイからもっと近くに 現実から切り離された文学の諸問題』(東京創元社、二〇一三年二月二〇日)
宮台真司監修 現代位相研究所編『悪という希望 「生そのもの」のたねの政治社会学』(教育評論社、二〇一六年一月二七日)
神代健彦『悪を欲待する』(教育評論社、二〇一六年一月二七日)
柄谷行人・渡部直己『中上健次と熊野』(太田出版、二〇〇〇年六月二五日)

四章 作品紹介

参考文献

- 暁なつめ『この素晴らしい世界に祝福を！ ああ、駄女神さま』(角川スニーカー文庫、二〇一三年一月一日)
長月達平『零…ゼロから始める異世界生活』(メディアファクトリー、二〇一四年一月一三日)
カルロ・ゼン『幼女戦記 Deus lo vult』(KADOKAWA、二〇一三年一月二日)
伏瀬『転生したらスライムだった件』(マイクロマガジン社、二〇一四年六月六日)

おわりに

参考文献

- 暁なつめ『この素晴らしい世界に祝福を！ ああ、駄女神さま』（角川スニーカー文庫、二〇一三年一〇月一日）
- 長月達平『Re:ゼロから始める異世界生活』（メディアアファクトリー、二〇一四年一月一三日）
- カルロ・ゼン『少女戦記 Deus lo vult』（KADOKAWA、二〇一三年一月二二日）
- 伏瀬『転生したらスライムだった件』（マイクロマガジン社、二〇一四年六月六日）
- さやわか『10年代文化論』（星海社、二〇一四年四月二四日）
- アニメ『この素晴らしい世界に祝福を！』（スタジオディーン、二〇一六年一月放映）
- アニメ『Re:ゼロから始める異世界生活』（WHITE FOX、二〇一六年四月放映）
- アニメ『少女戦記』（NHK、二〇一七年一月放映）
- アニメ『転生したらスライムだった件』（エイトビット、二〇一八年一〇月放映）

あとがき

創作を断念したことを最初は悔しく思いましたが、その分作品としっかり向き合うことが出来ました。一つの作品に対して手に入れた教養や知識を持って、自分なりの答えを出せたことはとても良い経験でした。そして、作品の理解を深めることの面白さを知ることが出来ました。(田口 仁美)

テーマ決めから難航し本文を書き出してから不安だらけでしたが、何とかかたわちにできて良かったです。この卒業論文を書くにあたって普段読まないようなマンガ作品にふれることができたので、大変でしたが楽しくもありました。同時に、「女性」という性について考える良い機会にもなつたと思います。(山本 奈実)

個人的に大好きで何度も読んだはずの小説でさえも、分析を重ねるとまたちがった見方で読むことができました。今回は心理学論文も扱い、専門分野の外側からも幅広く知識を得られました。本当に新しい発見の多い研究ができたと思います。(三浦 弘暉)

漠然と消費し続けていたアニメを批評しようと、昨年から一貫して続けてきました。書物や名作と言われる映画以外にも批評の対象が増えたことで新たな知見を得ることが出来ました。ありがとうございました。(塚本 悠太)